仙台市文化財調査報告書第256集

若林城跡

― 第３次発掘調査報告書 ―

２００２年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第256集

若林城跡

― 第３次発掘調査報告書 ―

２００２年３月

仙台市教育委員会

序　文

仙台市内には古くは旧石器時代から、近世にいたるまで各時代の遺跡が数多く知られています。これらは私たちの祖先が築き上げてきた文化の証と言えるものです。このような貴重な文化遺産を守り、後世に伝えていくことが、今に生きる私たちの使命であると考えております。

今回の調査箇所を含む若林区若林・南小泉地区は、他の地区同様に住宅・商業地へと急速に変容し、開発に伴う生活環境の整備等も急務となっています。地域に残る貴重な歴史遺産を新しい街づくりの中で、どのように生かすことができるのかという点について、各地域の特色に応じて調整を図りながら、よりよい保存活用を目指し、事業の推進に取り組んでいるところです。

本報告書は、都市計画道路「南材木町・古城線」の拡幅工事に先だって行われた若林城跡の調査をまとめたものです。若林城跡は現在宮城刑務所となっておりますが、仙台藩祖伊達政宗が晩年を過ごした城として知られているものです。築城後10年程で政宗の死去にともない廃城となる歴史をもっています。廃城後幾たびかの変遷があったようですが、堀跡からは江戸時代終わり頃の木製品が大量に出土し、当時の生活を知る良好な資料となりました。

これらの調査成果の蓄積の中から、地域の歴史を再確認し、文化財を大切にする心が育まれることを切に願うものであります。今回の調査や報告書の作成に際し多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対しまして心より感謝申し上げます。

平成14年３月

仙台市教育委員会
教育長　阿部芳吉

例　　言

1　本書は、都市計画街路「南材木町・古城線」に伴う若林城跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、仙台市教育委員会文化財課渡部弘美・伊東真文が担当した。

3　本書の執筆・編集は伊東真文が行い、のち渡部が編集作業を引き継いだ。本書作成作業は次の通り分担した。

○本文執筆　　伊東

○遺構・地図トレース　　柿沼幸子　山田やす子

○遺物実測　　柿沼　山田　赤間淳子　伊東恵美子　大内孝子　小野さよ子　菊地和江　鈴木貴美子　曽根ちよ子　種田ふくよ　針生せつ子　依田光子

○遺物拓本　　柿沼　山田

○遺物トレース　　柿沼　山田　赤間　伊東(恵)　大内　小野　菊地　鈴木　曽根　種田　針生　依田

○遺物写真撮影　　渡部　伊東

4　陶磁器・燻瓦の鑑定は、仙台市博物館佐藤洋氏に依頼した。

5　縄文土器の鑑定は、仙台市教育委員会吉岡恭平が行った。

6　ヘギ板および建築材については、(財)文化財建造物保存技術協会武藤正幸氏にご教示と資料の提供を得た。

7　宮城集治監、宮城刑務所時代の城跡周辺の状況については、次の諸氏に聞き取り調査を行い、貴重なご教示を得た。

木村満氏(雄勝天然スレート株式会社)　佐藤正治氏(前宮城刑務所職員)　柴修也氏(宮城刑務所職員)　五十音順

8　本調査における出土遺物・実測図・写真などの資料は、仙台市教育委員会文化財課で一括保管しているので活用されたい。

凡　　例

1　本書中で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1：50,000「仙台」をもとにしたものである。

2　本書中の土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原1973)を使用した。

3　調査区は、平面直角座標系Xに位置づけている。

4　実測図中の水糸高は、標高で統一している。

5　本書の文章・実測図中の方位は真北で統一してある。なお、仙台市周辺では磁北は真北に対して西偏約7°20′である。

6　本書で使用した遺構略号は次の通りである。

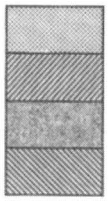
SD：溝跡・堀跡　　SK：土坑　　P：ピット　　SR：河川・小流路跡

7　本書で使用した遺物略号は、次の通りで、それぞれ種類別に番号を付した。

A：縄文土器　　C：非ロクロ土師器　　D：ロクロ土師器　　E：須恵器　　F：丸瓦　　G：平瓦

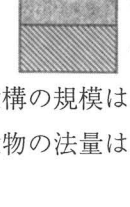
H：軒桟瓦　　I：陶器　　J：磁器　　K：石製品　　L：木製品　　N：金属製品

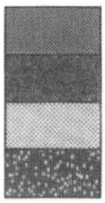
8　土器・木製品の実測図中のスクリーントーンは、次の範囲を示している。


土器・黒色処理

硯石・漆残存範囲

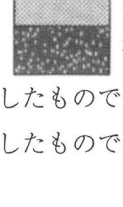
漆器・透け漆

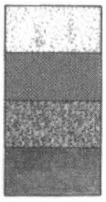

竹釘


土器・赤彩範囲

漆器・赤漆

草履下駄・筵残存範囲


樹皮残存範囲


石製品・自然面

漆器・黒漆

磁器

焦げの範囲

9　遺構の規模は、図化した後に図上で計測したものである。

10　遺物の法量は、図化した後に図上で計測したもので、数値はすべて最大値である。

本文目次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2
　1．遺跡の位置と地理的環境 …… 2　　2．周辺の歴史的環境 …… 3
Ⅲ　調査経過と調査概要 …… 10
　1．調査経過 …… 10　　2．調査概要 …… 13
Ⅳ　基本層序 …… 13
Ⅴ　検出遺構と出土遺物 …… 14
　1．堀跡・溝跡・河川跡 …… 14　　3．遺構外出土遺物 …… 22
　2．土坑 …… 20
　遺物図版・観察表 …… 23
Ⅵ　まとめ …… 40
　1．検出遺構について …… 40　　3．若林城について …… 44
　2．出土遺物について …… 40　　4．結び …… 45

○引用・参考文献○ …… 46
○注○ …… 48

挿図目次

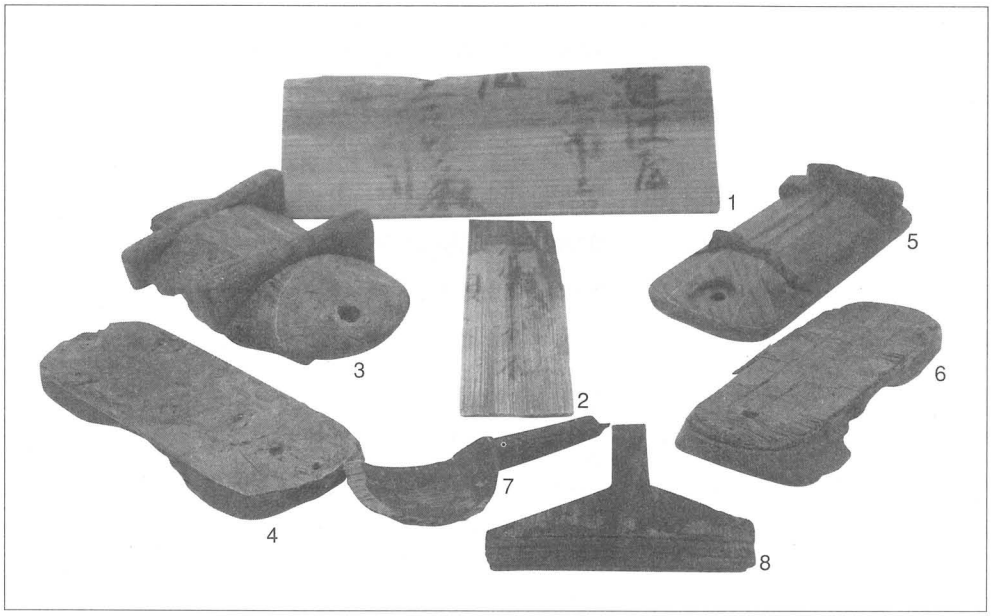
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　若林城跡周辺の調査地点と中・近世遺構の状況 …… 7
第３図　調査地点 …… 10
第４図　遺構配置図 …… 11
第５図　ＳＤ１堀跡平面図・断面図(1) …… 16
第６図　ＳＤ１堀跡平面図・断面図(2) …… 17
第７図　ＳＤ１堀跡平面図・断面図(3) …… 18
第８図　ＳＤ１堀跡平面図・断面図(4) …… 19
第９図　溝跡平面図・断面図 …… 20
第10図　ＳＫ１土坑平面図・断面図 …… 21
第11図　ＳＫ２～７土坑平面図・断面図 …… 22
第12図　出土遺物(1)縄文土器・土師器・須恵器・陶器 …… 23
第13図　出土遺物(2)瓦・銅製品・石製品 …… 24
第14図　出土遺物(3)木製品① …… 25
第15図　出土遺物(4)木製品② …… 26
第16図　出土遺物(5)木製品③ …… 27
第17図　出土遺物(6)木製品④ …… 28
第18図　出土遺物(7)木製品⑤ …… 29
第19図　出土遺物(8)木製品⑥ …… 30
第20図　出土遺物(9)木製品⑦ …… 31
第21図　出土遺物(10)木製品⑧ …… 32
第22図　出土遺物(11)木製品⑨ …… 33
第23図　出土遺物(12)木製品⑩ …… 34
第24図　出土遺物(13)木製品⑪ …… 35
第25図　出土遺物(14)木製品⑫ …… 36
第26図　出土下駄の比較 …… 42
第27図　傘の轆轤の比較 …… 43
第28図　大日北遺跡出土提灯底板とヘギ板（Ｌ61） …… 43
第29図　若林城跡周辺旧字名 …… 45
第30図　若林城跡概要平面図 …… 45
第31図　若林城跡各絵図 …… 45

表　目　次

第１表　遺跡地名表……2
第２表　若林城跡周辺の中・近世の遺構と遺跡……6
第３表　南小泉遺跡の中世屋敷跡の消長
（養種園遺跡・若林城跡・国分氏）……6
第４表　出土遺物観察表(1)……37
第５表　出土遺物観察表(2)……38
第６表　出土遺物観察表(3)……39

写真図版目次

写真１　若林城跡とその周辺の航空写真……51
写真２　ＳＤ１確認状況（２トレンチ・西から）……52
写真３　ＳＤ１完掘状況（４トレンチ・西から）……52
写真４　４トレンチ・東壁断面（西から）……53
写真５　ＳＤ１断面（４トレンチ・東から）……53
写真６　ＳＤ１完掘状況（１トレンチ・西から）……54
写真７　ＳＤ１木製品出土状況（４トレンチ・西から）……54
写真８　ＳＤ１断面（３トレンチ・西から）……54
写真９　ＳＤ１断面（５トレンチ・北から）……54
写真10　２トレンチ西壁断面（ＳＤ１・ＳＲ１重複状況）…54
写真11　ＳＤ１・ＳＲ１重複状況（１トレンチ・西から）…54
写真12　ＳＤ３完掘状況（４トレンチ・南から）……54
写真13　ＳＫ２断面（４トレンチ・東から）……54
写真14　ＳＫ３断面（４トレンチ・西から）……55
写真15　ＳＫ４完掘状況（４トレンチ・南から）……55
写真16　ＳＤ１・ＳＫ１断面（３トレンチ・東から）……55
写真17　ＳＫ７確認状況（２トレンチ・南から）……55
写真18　ＳＤ６断面（５トレンチ・西から）……55
写真19　出土遺物(1)……56
写真20　出土遺物(2)……57
写真21　出土遺物(3)……58
写真22　出土遺物(4)……59
写真23　出土遺物(5)……60



１．Ｌ57　木札
２．Ｌ59　ヘギ板
３．Ｌ16　差歯下駄
４．Ｌ２　無歯下駄
５．Ｌ22　差歯下駄
６．Ｌ１　無歯下駄
７．Ｌ25　汁杓子
８．Ｌ28　刷毛

ＳＤ１－Ｂ出土木製品

Ⅰ　調査に至る経緯

本調査は、都市計画街路「南材木町・古城線」拡幅工事に関わる事前調査である。「南小泉・古城線」は、仙台市若林区の通称「宮城野萩大通り」から西にのびる都市計画街路で、建設工事は平成５年に始まり、過去それに伴う調査（南小泉遺跡第22次調査－斎野：1994）も実施されている。今回の工事範囲は、その大半が若林城跡遺跡範囲に含まれるため、道路部街路課と協議の上、事前調査を実施した。試掘調査は、平成10年９月25日～９月28日にかけて２カ所にトレンチを設定し行った。その結果、当初の予想通りいずれのトレンチでも若林城の堀跡が確認されたため、本調査の実施が必要と判断した。発掘届は、平成11年５月13日に提出され、それを承け、平成11年８月23日より本調査を開始した。

調　査　要　項

1　遺跡名　　若林城跡（宮城県遺跡番号01030　仙台市遺跡番号C－511）

2　調査原因　　都市計画街路「南材木町・古城線」拡幅工事

3　所在地　　仙台市若林区古城二丁目地内

4　調査対象面積　　1,375㎡

5　調査面積　　表土掘削面積…約760㎡　　実調査面積（遺構検出面面積）…約370㎡

6　調査期間　　＜試掘調査＞　平成10年９月25日～９月28日
＜野外調査＞　平成11年８月23日～10月26日
＜室内整理＞　平成12年２月１日～３月17日　平成12年11月２日～12月21日
平成13年１月９日～３月23日

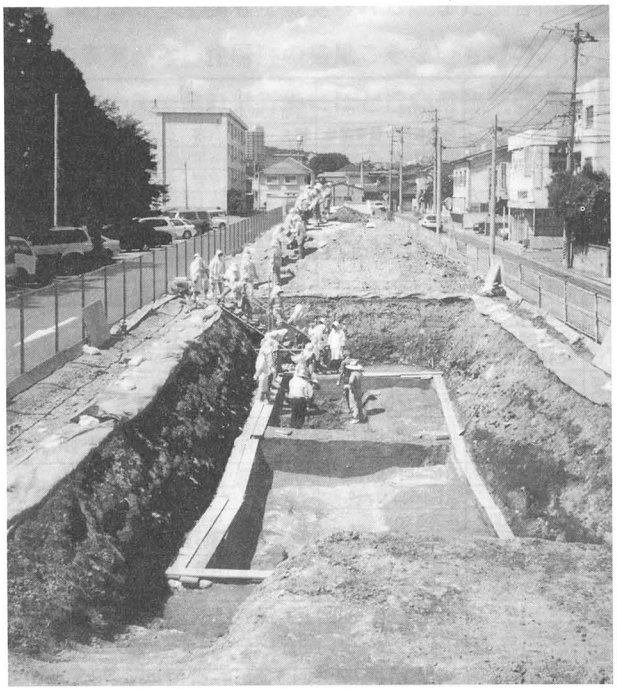
7　調査主体　　仙台市教育委員会

8　調査担当　　仙台市教育委員会文化財課

9　担当職員　　＜試掘調査＞　篠原信彦　渡部弘美　伊東真文　松本知彦
＜本 調 査＞　渡部弘美　伊東真文

10　野外調査参加者
赤間淳子　芦野ヒデ子　板橋祝子　伊東恵美子
伊藤はるよ　遠藤清子　大内孝子　奥田美津子
奥山妙子　奥山祐子　小野栄子　小野さよ子
柿沼幸子　葛西郁子　菊地和江　日下啓子
酒井正雄　佐藤すみ子　佐藤よし子　佐野靖男
柴田徳郎　庄子範男　鈴木貴美子　曽根ちよ子
種田ふくよ　土屋みどり　中里とわ子　永野くみ子
永野泰治　針生ゑなよ　針生せつ子　三浦市子
鑓水芳子　吉田アキヨ　依田光子　渡辺イチ子
渡辺貞子

11　室内整理参加者
赤間　伊東　大内　小野　柿沼　菊地　鈴木　曽根
種田　針生(せ)　山田　依田



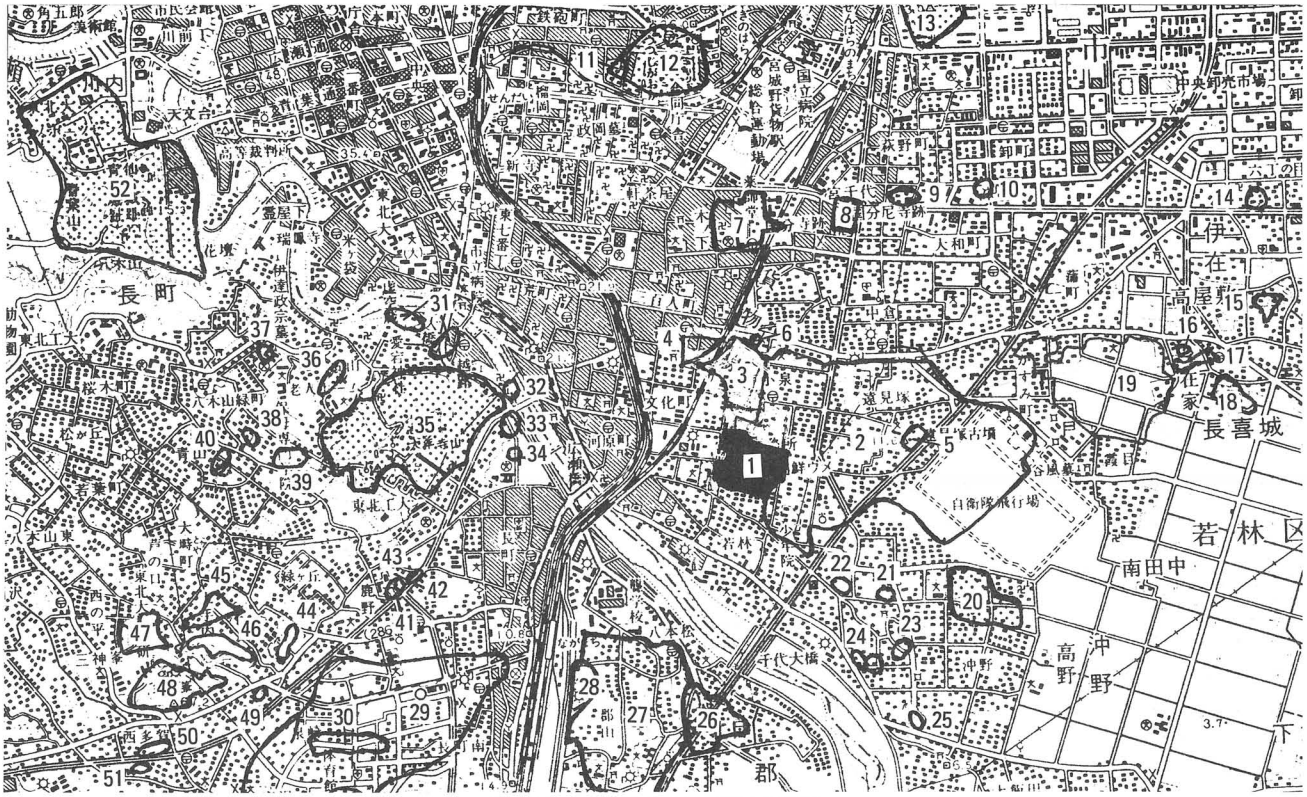
調査風景

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と地理的環境

若林城跡は、ＪＲ仙台駅の南東約３㎞地点に位置している。遺跡の規模は、南北が約300～320m、東西が約360～400mで、遺跡面積は約117,500㎡である。遺跡内は、若林城の堀跡の名残を残す凹地、城内の土塁跡など起伏に富むが、標高11～14mの範囲内にある。

この若林城跡を含む南小泉地区[注1]は、広瀬川（流路長：約40㎞・流域面積約310㎢）左岸の自然堤防上に位置し



第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

No	遺　跡　名	立　　地	時　　代	No	遺　跡　名	立　　地	時　　代
1	若林城跡	自然堤防	古墳・平安・中世・近世	27	郡山遺跡	自然堤防・後背湿地	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
2	南小泉遺跡	自然堤防・後背湿地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	28	西台畑遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世
3	養種園遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	29	富沢遺跡	自然堤防	旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
4	保春院前遺跡	自然堤防	縄文・奈良・平安・中世・近世	30	泉崎浦遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・平安
5	遠見塚古墳	自然堤防	古墳	31	愛宕山横穴群	丘陵斜面	古墳・奈良
6	法領塚古墳	自然堤防	古墳	32	宗禅寺横穴群	丘陵斜面	古墳・奈良
7	陸奥国分寺跡	自然堤防	奈良・平安・中世・近世	33	根岸遺跡	丘陵斜面	縄文
8	陸奥国分尼寺跡	自然堤防	奈良・平安	34	兜塚古墳	自然堤防	古墳
9	志波遺跡	自然堤防	奈良・平安	35	茂ヶ崎城跡	丘陵	中世
10	谷地館跡	自然堤防	中世	36	萩ヶ丘遺跡	丘陵斜面	縄文・奈良・平安
11	天神社遺跡	段丘	縄文（晩期）	37	向山高裏遺跡	丘陵	縄文
12	国分鞭館跡	段丘	中世	38	八木山緑町遺跡	丘陵	縄文・奈良・平安
13	南目城跡	沖積平野	中世	39	萩ヶ丘Ｂ遺跡	丘陵	縄文
14	地蔵裏遺跡	自然堤防・後背湿地	中世	40	二ツ沢遺跡	丘陵	縄文
15	押口遺跡	自然堤防	奈良・平安	41	一塚古墳	後背湿地	古墳
16	中在家遺跡	自然堤防	平安	42	鹿野屋敷遺跡	段丘	古墳？・奈良・平安
17	中在家南遺跡	自然堤防・旧河道	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	43	鹿野一丁目遺跡	段丘	縄文・弥生？・奈良・平安
18	長喜城跡	自然堤防	平安	44	砂押屋敷遺跡	段丘	奈良・平安
19	仙台東郊条里跡	後背湿地	奈良・平安・中世	45	土手内遺跡	丘陵	縄文・奈良・平安
20	沖野城跡	自然堤防・後背湿地	中世	46	土手内窯跡	丘陵斜面	奈良・平安？
21	神柵遺跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	47	芦ノ口遺跡	丘陵	縄文・弥生・平安
22	砂押Ⅰ遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	48	三神峯遺跡	段丘	縄文・平安
23	中柵西遺跡	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	49	金洗沢遺跡	段丘	古墳
24	砂押Ⅱ遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	50	原遺跡	段丘	弥生・古墳・奈良・平安
25	河原越遺跡	自然堤防	古墳・奈良・平安	51	西台窯跡	段丘	奈良・平安
26	北目城跡	自然堤防	中世・近世	52	仙台城跡	丘陵	中世・近世

第１表　遺跡地名表

ている。この地域は、大きくは六郷堀[注2]、按配堀、七郷堀の３本の用水堀が東流している。これらは、東に行くほど分岐を重ね、仙台市東部の田園地帯を潤している。七郷堀は、若林区役所付近で、東に向かう仙台堀と、陸奥国分寺跡－陸奥国分尼寺跡の間へ北進する高砂堀に分岐する。按配堀は七郷堀から分岐するもので、遠見塚付近から佐久間堀と呼称される。六郷堀・按配堀・七郷堀の起源を記す史料はないが、六郷堀・七郷堀近隣の調査[注3]では、現在の流路とほぼ併走する古代～中世の河川跡を検出しており、この二つの用水堀の起源は旧河川にあると思われる。そのように考えると、少なくとも若林城跡北面から七郷堀方向に向かっては、旧河川に隔てられた東西に細長い自然堤防帯があり、南小泉遺跡西部～養種園遺跡の基盤となっている。また、若林城跡２次調査（佐藤甲二：1986）や、若林城跡の南東部の９次調査（菊地・佐々木：1983）では、北西－南東方向の河川跡（年代不明）を確認しているが、この北東にある遠見塚にも発達した自然堤防があり、古墳時代以降集落が営まれている。それに対し、遠見塚古墳の北西～北側に向かっては町並みの乱れが顕著であり、小流路が複雑に入り込んでいると考えられる。以上のように、南小泉地区の微地形は、微高地と旧河道が入り組む複雑な様相を呈するなかで、比較的良く発達した二つの自然堤防を指摘できる。また、南小泉に入り込む旧河川は、生活用水、水運、また東方に所在したと見られる生産域への用水の便といった、水の恵みをもたらし、人々の生活を支えてきたのである。

２．周辺の歴史的環境

若林城跡がある南小泉地区には、南小泉遺跡・養種園遺跡・保春院前遺跡・遠見塚古墳・法領塚古墳など多数の遺跡がある。以下、これらの諸遺跡の調査成果を含めながらこの地域の歴史を概観する。なお、中・近世以降についてはやや詳細に記述を行う。調査名について特に遺跡名を記さないものは南小泉遺跡を指す。

〔縄文時代〕　現在のところ、縄文時代の遺構は確認されていないが、包含層が確認されており、土器が少量出土している。17次調査（佐藤洋：1990）では大木10式～南境式の土器１点、19次調査（佐藤淳：1990）では晩期最終末大洞A`式の土器（図示25点）が石器とともに出土している。養種園遺跡１次調査（佐藤洋：1997）では下層調査の際、黒色シルト・粘土層[注4]より４点の繊維土器が出土しており注目される。養種園･保春院前遺跡では、その黒色粘土層よりも上位の黄褐色粘土質シルト（地山）層も、後・晩期（大洞A`主体）の包含層である。

〔弥生時代〕　昭和14、15年の霞目飛行場拡張工事の際、故伊東信雄氏らによって弥生時代の遺物が採集され、南小泉遺跡発見の契機となった。遺物は、大量の桝形囲式期の土器・石器で、土偶も１点見られる。また、合口土器棺15組も出土し、墓域が営まれていたことも明らかとなった。この事実から、住居跡の発見こそないものの、南小泉遺跡は弥生時代の中期を主体とする集落遺跡と認識されている。その後、霞目飛行場にほど近い遺跡東部で実施された12次調査（佐藤甲二：1985）で、溝跡１条を検出し、桝形囲～天王山式の土器が出土している。養種園遺跡２次調査では、中世以降の遺構群が密度濃く分布する中で、桝形囲式期の土器棺墓を１基検出しており注目される。

〔古墳時代〕　この地域では、遠見塚古墳、若林城内古墳、法領塚古墳の３基の古墳が調査されている。４世紀末に築造された遠見塚古墳は、東北地方の代表的な前方後円墳である。被葬者は初期大和政権と関係を取り結んだこの地の大首長と見られている。若林城内古墳は、若林城跡２次調査（佐藤甲二：1986）で発見された推定直径22mの円墳である。円筒埴輪が伴い、年代は５世紀後半～６世紀初頭である。法領塚古墳は、聖ウルスラ学院構内にある直径32mの円墳である。主体部は横穴式石室で、年代は７世紀前半である。古墳時代後期は古墳から横穴墓への過渡期にあたり、横穴式石室を持つこの古墳は貴重なものである（整備保存されている）。法領塚古墳の南南西380m地点には、猫塚古墳（少林神社境内）が、同じく南方280m地点には蛇塚古墳があるが詳細は不明である。

この地域の古墳時代の集落のようすは、各調査で徐々に明らかになってきている。前期の遺構は現在のところ少なく、住居跡は遺跡中央部南端で実施された20次調査（工藤哲司：1991）で１軒、他は遠見塚古墳西南西450m地点の26次調査（五十嵐：1998）で河川跡が確認されているのみである。中期になると、広範囲で住居跡が確認され、

集落の成長の様子をうかがうことができる。また、遺構からは土器のほか石製模造品も多数出土し、これらを用いた祭祀が盛んであったことがわかる。遺跡東部の12次調査では、この時期のカマドが見られない住居跡を検出し、古墳時代中期が地床炉からカマドへの移行期にあたることが立証された。16次調査（佐藤洋：1990）では、石製模造品の製作工房と推定される住居跡や粘土溜めをもつ竪穴遺構を検出し、鉄滓も出土していることから、この時期の集落内の生産部門を担った空間と考えられている。また、17次・30次（工藤・渡部・根本：1998）調査地点は、古墳中期～後期にかけての遺構密度が他の調査地点に比して高く、集落の中心として認識されている。養種園遺跡１次調査でもこの時期の住居跡を５軒確認している。

〔飛鳥時代〕　この時代、若林城跡の南方1.5kmの地点、広瀬川右岸に郡山遺跡（官衙）が出現する。この官衙跡は二期に区分され、時期はⅠ期官衙が７世紀半ば～７世紀末、寺院が付属するⅡ期官衙が７世紀末～８世紀初頭である。南小泉地区では、この官衙跡に前後ないし併行する集落跡が若林城跡北面の22次調査地点で発見されている（斎野：1994)。特に、Ⅰ期官衙造営以前－いわゆる「プレⅠ期」～Ⅰ期官衙の時期には、幅７ｍの大溝で区画された住居跡群がみられ、さらに関東系土器の一定量の出土から、当集落が関東からの移民に関わる可能性を示している（斎野：1994)。この時期の住居跡は、22次調査地点より西側の23次（斎野：1994)・31次（工藤・渡部・根本：1998）調査地点でも確認されており、関東系土器を伴う集落の広がりが推測される。31次調査の住居跡は、鍛冶に関わる遺物も伴っており注目される。なお、22次調査地点の集落はⅡ期官衙以降は散在的となる。

〔奈良時代〕　この時代前半には、陸奥国府が郡山から多賀城に移る。８世紀中葉[注5]には、若林城跡北方1.5kmの木ノ下の地に陸奥国分寺・国分尼寺が造営される。この地域の奈良時代の様相はこれまで不明な点が多かったが、近年実施された南小泉遺跡北西部の28次調査地点、その西方の養種園・保春院前遺跡において奈良時代後半～末を主体とする住居跡を30軒程発見している。住居跡群の特徴としては、軸線をほぼ真北方向にそろえ、一定の規格性が看て取れることから、北方１kmに位置する陸奥国分寺・同尼寺に関わる計画集落の可能性がある。土師器坏は内外面ミガキ調整で器高が低く扁平ないわゆる「丸底風平底」が主体をしめるが、段ないし沈線を有し丸底なもの、外面調整がヘラケズリ・ヨコナデで行われるもの等これらと異なるものも含まれており、住居跡の所属年代がさらに細分される可能性がある。今後集落の変遷が明らかになるものと期待される。また、養種園遺跡２次調査では起源が奈良時代後半に遡るかと思われる流路ないし水路跡を確認しており、集落との関わりが注意される。

〔平安時代〕　この時代、南小泉遺跡中央部～西部にかけての広い範囲で、９世紀代を主体とする住居跡が散在的に確認されている。その中にあって若林城跡南東方300ｍにある６次調査（渡部弘美：1983）地点、同じく東方400ｍにある11次調査地点では、墨書土器を含む土師器坏のまとまった出土が見られる。６次調査１号住居跡は、隅丸長方形で床面積60m^2近いもので、この時代の住居跡としては異例の規模を誇るが、２基の貯蔵穴からは図化されただけでも70個体以上のロクロ土師器坏が出土している。うち30点に墨書が見られ、「比」と書かれたものが大半を占める。他に高台付皿や灰釉陶器の影響が指摘される碗・小瓶がある。11次調査（結城・佐藤洋：1984）28号土壙からは、土師器坏16点と高台付坏２点が一括出土しており、うち９点に墨書がある。このような出土状況は、他の調査地点では見られないものである。若林城跡周辺の調査（４[注6]・６・７[注7]・９・11次）では、計31軒の住居跡が確認されており、周辺地域が平安時代前半の集落の極をなす可能性が高い。若林城跡２次調査でも、住居跡４軒、竪穴遺構３基等を検出している。

10世紀代では、保春院前遺跡で一辺1.5ｍ程度の小型住居跡[注8]が調査されている。21次調査（金森・稲葉：1992）では、堆積土中に10世紀前半頃に降下した灰白色火山灰を含む小溝群を発見している。11世紀～12世紀後半にかけては、仙台平野では考古学的発見例が激減し様相がつかめなくなる。その背景として竪穴住居の消滅という居住形態の変化と、土器から木器へという食器の変容が考えられている。

なお、建立以来当地に深く関わる陸奥国分寺は、第３期多賀城政庁を倒壊させた869年の貞観の大地震で被災し

たが、まもなく復興されたと見られる[注9]。しかし、934年に七重塔が雷火のため焼亡（『日本紀略』）すると以後復興されることはなく、僧の居住は別としても、その偉容は衰えたものとみられる[注10]。

〔中世―鎌倉・南北朝・室町時代〕　1185年に平氏を滅ぼした源頼朝は、これに続き1189年に奥羽に侵攻、奥州藤原氏を滅ぼした。この文治五年奥州合戦の際、奥羽兵は本陣を国分原鞭楯に置くが、阿津賀志山の防塁が抜かれると、主将藤原泰衡は鞭楯から平泉に逃亡し、その後鎌倉の兵による残党狩りの際、陸奥国分寺は悉く焼亡したという[注11]。この文治五年奥州合戦の後、奥羽の地には、鎌倉御家人が地頭として下向する。当地域が含まれる宮城郡南部を領有したのは、有力な鎌倉御家人千葉常胤の五男胤道で、国分荘を領したことから以後国分氏を称したといわれている[注12]。

12世紀後半には、掘立柱建物と井戸・土坑から構成される原初的な中世的屋敷が検出されている（17次調査屋敷C[注13]）。13世紀になると、南小泉遺跡中央部には、かわらけや高級陶磁の出土から領主クラスの居館と考えられる屋敷Bを中心に、半町規模クラスの屋敷がいくつか成立する（第2・3表、第2図[注14]参照）。屋敷Bは、14世紀前半頃には柵や櫓によって防御性を増し、14世紀中葉まで存続するが、その後14世紀後半代には、幅15m・深さ3m程の巨大な堀と土塁を持つ城館に発展し、この頃の屋敷跡として幅4～5mの溝に囲まれた屋敷Ⅰが想定されている（田中：1997）。他方、養種園遺跡ではこの時期の遺構として、1次調査ではほぼ真北方向に軸線を有する集落の一部を、2次調査では土坑墓を60基以上検出している。土坑墓は七郷堀の祖形と見られる河川跡の南側に展開しており、土坑墓群の東側では道路遺構を検出している。

〔戦国時代～近世初頭〕　15世紀中頃には、南小泉の城館跡は廃絶し、それに代わって15世紀末～17世紀初頭にかけて西方のより標高の高い養種園遺跡に大規模な遺構群が展開する。遺構には、区画溝[注15]・掘立柱建物[注16]・廃棄土坑・井戸・竪穴建物がある。これらの遺構群の一部は、その規模から家臣クラスの居住地と考えられる。遺跡東方120m地点（南小泉遺跡）では、戦国時代の道路跡も発見されている[注17]。遺物には、陶磁器・石製品・瓦質土器・土師質土器[注18]等があるが、坩堝（ないし取鍋）・鞴の羽口・鉄滓・鍛造剥片等、金属製品の製造に関わる遺物が相当量出土している。1次・2次調査では、鍛冶炉・廃棄土坑からなる鍛冶工房も調査されている。出土した坩堝の中には、金・銀の合金が付着したものや銅が付着したものも見受けられ、鉄滓が大量に投棄された土坑もある。また、保春院前遺跡の戦国時代末～近世初頭の土坑からは、この時期のものとしては東北地方では稀少な鉄鍋の鋳型が出土している。以上のことから、金属加工に関わる職人の居住[注19]も明らかとなった。

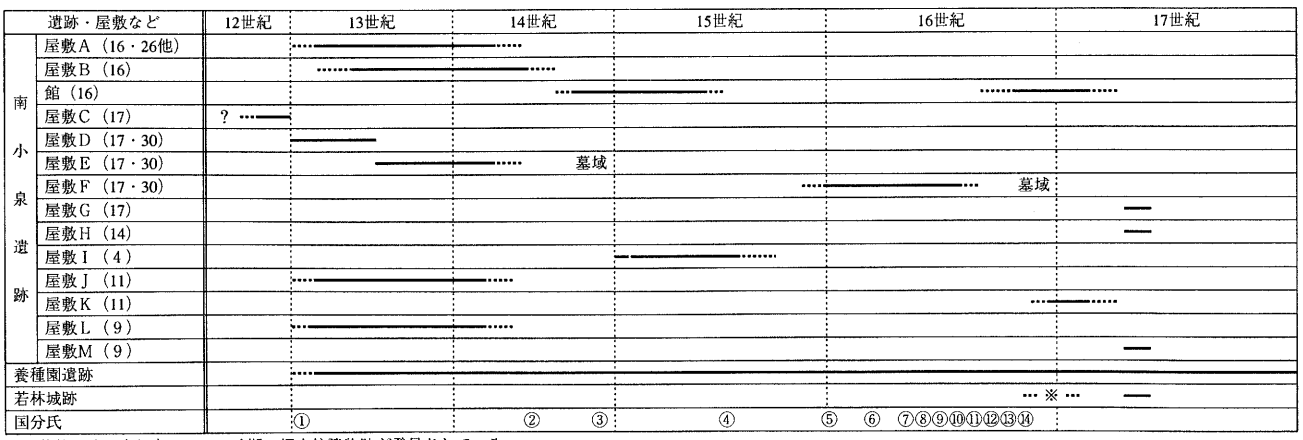
これら養種園遺跡の遺構群は、若林城跡ないしそれに北接する地点に存在が推定される国分氏居城の小泉城の城下町として評価されている。その都市的な場の範囲はこの頃国分氏が保護していた陸奥国分寺と同寺域内にある国分氏氏神の白山神社を包摂する範囲と推定されている（以上、市史：2000）[注20]。

養種園遺跡の遺構群は、出土遺物から見て15世紀末には成立したと見られるが、国分氏没落直後の16世紀末から17世紀初頭に一つの大きな画期を見いだすことができる。この時期には、1次調査Ⅱ区に建物・塀を囲い込む大溝が出現する。また、2次調査区でも区画溝が新たに出現している。また、養種園遺跡西部の鉄滓が大量投棄された16世紀末～17世紀初頭の土坑や、保春院前遺跡の16世紀後半から17世紀初頭の瓦質土器が共伴する鉄鍋の鋳型が出土した土坑の存在は、金属加工職人の居住地が西方へ移動したことを示唆している。この頃には、前代の職人居住地を示す鍛冶炉は永楽通寶[注21]6枚の六道銭を伴う土坑墓に切られ、逆に前代に掘られた2次調査区の大溝は、この時期には中位まで埋没し溝としての機能を失い、鍛造剥片が大量に投棄されている。これらも金属加工職人の西方への域内移動を示している。この16世紀末～17世紀初頭には、南小泉遺跡の屋敷跡・堀跡の一時的な再興が見られ（田中：2000）、これらの現象は国分氏領国から伊達氏直轄領という支配者の変化と時期的にほぼ整合する。

〔近世―日町住人の城下移住から若林城下町形成まで〕　慶長5（1600）年12月、政宗は青葉山の地に縄張りを行い翌慶長6（1601）年1月より仙台城の築城を開始、慶長7（1602）年5月には一応の完成を見た[注22]。これと併行

No	遺構・関連寺社等	年　　代	備　　考
1	屋敷を区画する溝	戦国時代？	上幅３m、深さ1.3m程、断面Ｖ字形。石臼、板碑出土（陶磁器なし)。北辺は、途中で途切れる。区画中央に５間×３間で四面庇or縁の南北棟。建物は焼失。一部に焦土･炭化物が投棄、3／4程は人為的に埋められる。
2	大窯Ｖ期に出現した大溝	16世紀末～	上幅最大5.8m、深さ２m程。断面Ｖ字形でＬ字に屈曲。
3	大窯Ｖ期に出現した区画溝	16世紀末～17世紀初頭	上幅１m、深さ80cm程。敷地内の小区画の溝か。
4	鍛冶炉跡	戦国時代	戦国面検出。
5	鍛造剥片・坩堝が大量に出土した大溝	戦国時代～近世初頭	上幅４m、深さ2m程、断面きついＶ字形。中位層より明末青花、それ以下の層は、大窯Ｉ期まで。鍛造剥片は中位層より出土。最上層は、人為的に埋められている。
6	鉄滓が大量に出土した土坑	近世初頭	瀬戸美濃陶器（大窯Ｖ期)、明末青花共伴、木炭出土。
7	鉄鍋の鋳型が出土した土坑	戦国時代～近世初頭	16世紀後半～17世紀初頭の瓦質擂鉢共伴。
8	壁土が出土した土坑（複数あり）	戦国時代	下限：大窯Ⅱ・Ⅲ期。
9	壁土が出土した井戸跡	戦国時代～近世初頭	大窯期の瀬戸美濃陶器小片共伴。
10	廃棄土坑	日町廃絶～若林城下町以前？	指標：登窯Ｉ期・明末青花。
11	廃棄土坑	若林城下町期	指標：登窯Ⅱ期（御深井釉製品)。
12	井戸跡	若林城下町期	指標：登窯Ⅱ期（白天目茶碗)、他に丹波擂鉢等出土。
13	土坑墓	戦国末～近世初頭	永楽通寶６枚完全セット。
14	土坑墓	戦国時代～近世初頭	六道銭に無文銭１枚を含む。
15	土坑墓	若林城下町期	金箔軒丸瓦出土。
16	柱穴埋納銭	戦国時代？	50枚（明銭９枚を含む)。
17	志波町出土銭	中世（戦国以前）	367枚（明銭含まず)。
18	広瀬橋下大量出土銭	近世？	寛永通寶？約11,000枚。
19	平安通寶出土地点	近世初頭？	盛土Ｉ層出土（６枚ひとまとまり、六道銭か？)。
20	平安通寶出土地点	近世初頭？	盛土Ｉ層出土（この地点に土坑墓群、六道銭か？)。
21	道路跡	中世前期～下限不明	
22	道路跡	中世前期？（戦国以前）	戦国期の遺構群に切られる。土坑墓群と重複無し。
23	道路跡	上限不明～戦国期？	バラス敷き（瓦質土器擂鉢出土)。
24	河川跡	不明	
25	河川跡	不明	
26	河川跡	中世～	堆積土下部の砂礫層とそれより上位の層は近世。下部に中世の遺物しか含まない層あり。
27	河川跡（水路？）	奈良時代～？	最下層に奈良時代。それより上位には中世陶器・宋銭が入る。最上層は人為堆積、近世陶磁器含む。
28	少林神社・猫塚	不明	板碑群。
29	少林山保春院	寛永12（1635）～	政宗が生母義姫の十三回忌にあたりその菩提のため創立。開山北山覚範寺清岳和尚。
30	薬師堂	戦国～？	薬師座像を納める厨子に、国分盛重の息災繁盛を祈念した銘文あり。慶長10(1605)年に政宗修築。
31	白山神社	古代～？	国分寺建立時、十八伽藍の一にしたという。国分盛重復興し、神事に流鏑馬を始めたという。
32	須賀神社（牛頭天王・木ノ下）	古代～？	国分寺建立の際、十八伽藍の一として祀られた。国分盛重復興という。
33	須賀神社（河原町）	不明	もとは木ノ下須賀神社の祭礼に使われた場所か(木村孝文2000)。
34	毘沙門堂	不明	名取郡北目にあったものを寛永４(1627)年に荒町に移した。
35	三宝荒神社	近世～	文亀３(1503)年に修験者が開き花京院と号したという。近世には火伏せの神として南鍛冶町の鍛冶職が崇拝。
36	愛宕山経塚（推定地）	16世紀前半？	昭和６(1931)年の調査で、経筒４合銭貨83枚（内41枚永楽通寶）1.5m離れた地点で刀子一振出土。
37	茂ヶ崎城跡	中世～戦国？	16世紀中葉に一時国分宗政が在城した「野手口城」に比定。系図によれば、宗政は野手口城から小泉に移る。

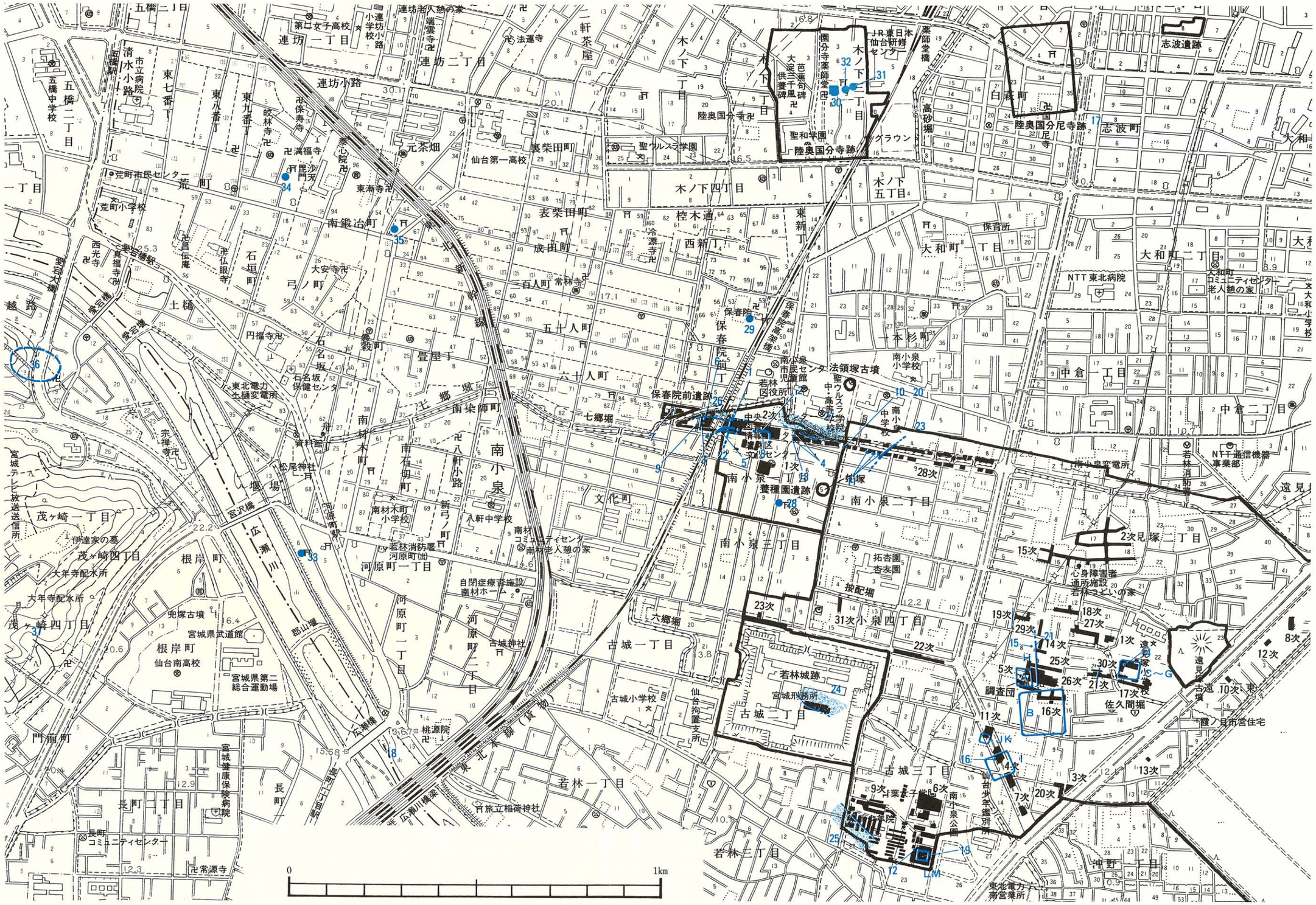
第２表　若林城跡周辺の中・近世関係遺跡・遺構



※若林城跡１次調査で、この時期の掘立柱建物跡が発見されている。

①国分氏、この頃宮城郡領主として下向か。
②この頃、藤姓国分氏へ移行か。
③「平姓国分系図」(享保年間）によれば、11世盛行は文明12(1480)年に隠居し小泉邑に住むとある。
④康生３(1457)年銘上愛子諏訪神社棟札「国分下野守宗治」
⑤この頃、留守氏と交戦。永正３(1506)年小鶴合戦で留守方が国分方を破る（留守景宗の郷古藤三郎宛書状)。
⑥永正14(1517)年銘上谷刈八木沢明神棟札「国分弾正少弼広政」息子「宗政」
⑦天文５(1536)年銘上谷刈八木沢明神棟札「藤原朝臣長沼式部少輔宗治」
⑧天文11(1542)年天文の乱……国分宗政、伊達稙宗方につき、留守景宗を松森に破る（市史2000)。
⑨永禄３(1560)年銘諏訪神社棟札「国分宗政」「国分宗元」
⑩永禄５(1562)年銘上谷刈八木沢明神棟札「藤原朝臣長沼郷六大膳宗家」
⑪永禄７(1564)年　保寿寺梵鐘銘「国分能登守宗政」
※「保寿寺京円覚書」(菅野1995)
⑫天正５(1577)年　伊達彦九郎政重（盛重)、国分弾正少弼の養子となる。
⑬天正13(1585)年　陸奥国分寺薬師如来像厨子願文に「藤原朝臣政重（国分盛重)」
⑭天正14(1586)年　国分家中に騒動、翌年国分氏滅亡。

第３表　南小泉遺跡の中世屋敷跡の消長と養種園遺跡・若林城・国分氏



第２図　若林城跡周辺の調査地点と中・近世遺構の状況

して城下町の建設が進められたが、慶長10（1605）年までには国分日町の住人は城下に移り（佐藤洋：1997）、国分町が割り出された[注23]。しかし、この動きは戦国時代以来の都市空間の消滅を意味するものではなく、南小泉遺跡28次調査では、養種園遺跡に隣接する調査地点で、国分町の割り出しから寛永４（1627）年の若林城下町の形成に至る20数年間の枠内に収まる土坑を１基検出している[注24]。また、この調査区では土坑墓を数基検出している。17世紀前半に流通したとされる「平安通寶」[注25]が後世の盛土から出土している。六道銭が巻き上げられた可能性があり、これらの土坑墓群の年代の一端を示すものと考えられる（渡部・伊東：2000）。

慶長12（1607）年には陸奥国分寺薬師堂が造営され、国分寺寺域内にある国分氏の氏神、白山神社の祭礼には国分氏の遺臣（国分侍・国分衆）が毎年３月３日に流鏑馬の神事を行うのが慣しだったという。これらのことからも、陸奥国分寺～養種園遺跡～「小泉城」にいたる都市空間は、若林城の築城に伴う小城下町形成の時期まで大きく衰退することなく維持されたものと考えられる。

〔近世ー若林城とその城下町〕　寛永４（1627）年、政宗の「屋敷」新築の願いを許可する旨の二月廿三日付「老中奉書」を受け、政宗は早速若林城の造営に着手する。若林城への移転を受けて、城下には一門・家臣団の屋敷[注26]があり、「米町」「絹布町」という町人町もあった（市史：1954）。町奉行も２名置かれていたという（「奥山常良書状」）。戦国時代に起源を持つ（佐藤洋：1997）若林城下町の軸線[注27]は、北は連坊小路、西は荒町、南西は南材木町・河原町、南東は若林城跡南東方、東は遠見塚古墳の西、北東は中倉付近まで、所々小桝形と思われる屈曲を持ちながら、貫徹している[注28]。この範囲に含まれる町は、足軽町と町人町に大別される。足軽町は、連坊小路が寛永４・５（1627・1628）年頃、三百人町[注29]は寛永７（1630）年、六十人町・五十人町・成田町・柴田町・弓ノ町といった他の足軽町も三百人町とほぼ同時期か寛永10（1633）年までには成立したと推定される（『宮城県の地名』）。近隣の町人町では、寛永年間以前には舟丁（慶長18年初出）、荒町・石垣町は若林城築城に絡まる寛永４・５（1627・1628）年頃、南鍛冶町・穀町は寛永５（1628）年～寛永11（1634）年頃に割り出されたと推定されている（『宮城県の地名』）。また、南材木町は「若林材木町」として寛永11（1634）年に初出する（永沼穎家文書）。これらの町々は、若林城の築城と同時期かその直後に割り出されており、若林城築城が仙台城下町の東南方への拡張の契機となったことを示している。

若林城とその城下町が存続した時期、南小泉遺跡では当時期の遺構が数地点で発見されている[注30]。しかし、仙台堀（七郷堀）の北側の調査（南小泉28次）では、戦国時代の道路跡を除き、中・近世の遺構は確認されていない。調査区の制約上断言することはできないが、若林城下町域の北限は、部分的に七郷堀付近となる可能性がある。今後の発掘調査成果の蓄積が期待される。

〔近世ー若林城廃絶後〕　寛永13（1636）年５月、政宗は江戸で死去し、その後若林城は廃城となった。城周囲の家臣屋敷も順次仙台城下に移り、若林城下町の一部は仙台城下町に統合され（菅野：1996）、残りは在郷分（小泉村）となった。寛永16（1639）年、二代藩主忠宗により仙台城二ノ丸の造営が始まると、若林城は解体され建築物は二ノ丸へ移築された。瑞鳳殿御供所は「竹楼」と称した若林城内の書院、片平丁にあった茂庭氏屋敷の門は若林城の城門、八ツ坂松音寺山門、正楽寺山門も若林城から移したものという（三原：1948）。若林城解体の後は、藩の御薬園になった（菅野：1996）。

在郷分となったとはいえ、養種園遺跡地内に、二代藩主忠宗が万治年間（1658～1661）頃に御仮屋[注31]置き、その後元禄５（1692）年には四代藩主綱村がこの地に「別荘」を造営した。これは一時衰えたが、宝暦年間（1751～1764）に六代藩主宗村がこれを再興した[注32]。宝暦３（1753）年には、小泉屋敷に重層書院が完成したといわれる（以上、佐藤洋：1997）。養種園遺跡１次・２次調査では、屋敷を区画する堀跡、池跡、溝跡、土坑、井戸跡など、伊達家別荘に関わる遺構を検出している。若林城廃絶後、その領域を狭めながらも依然として当地にはこのように藩施設が置かれ、藩主・家臣団と関わりの深い土地であったことが知られる。また、保春院前遺跡の近世遺構からは相当量の溶解

炉・鋳型・鞴の羽口の破片と鉄滓が出土しており、鋳造に関わる職人の居住が考えられる。金属加工職人の住む町は北鍛冶町・南鍛冶町であるが、これは米沢以来の伊達氏に関わる工人集団である。保春院前１次調査で明らかとなった工人集団の居住地は、養種園遺跡の戦国期～近世初頭の調査成果を踏まえれば、系譜の異なる国分氏に関わるものだった可能性がある。なお、養種園・保春院前遺跡の北には「鍛冶屋敷」の旧字名が見られる（第29図参照）。

〔近代以降〕　明治維新後の若林城跡は、周知の通り宮城刑務所として現在に至るが、数少ない資料（宮城刑務所：1979、柴：1990）と聞き取り調査からその変遷を簡略にまとめてみた。

明治10(1877)年　西南戦争国事犯の収容と監獄改良の目的で、若林城跡に監獄の新築に着手する。六角放射状の「六角塔」の建築様式はフランスにならったものである。

明治12(1879)年　宮城集治監が設置される。宮城監獄署から西南戦争国事犯の移送を承ける。

明治13(1880)年　宮城監獄署から雄勝浜石盤採取作業を継承し、雄勝出役所を設置する（西南戦争国事犯も出役）。

明治19(1886)年　木柵囲障680間を自所製煉瓦石をもって改装、煉瓦塀とする。

明治29(1896)年　三陸大津波で雄勝出役所が甚大な被害を被る。翌年廃止。

明治36(1903)年　監獄官制発布により、宮城監獄となる。

大正11(1922)年　宮城刑務所と改称する。

昭和25・26(1950・1951)年頃　中程まで埋まった堀跡を整地し、官舎を建設する[注33]。

昭和48(1973)年　六角塔解体。この際、その廃材や炭殻を使って、堀を現地表面まで埋めたという。

昭和53(1978)年　宮城県沖地震で、外塀倒壊。翌年復旧する。

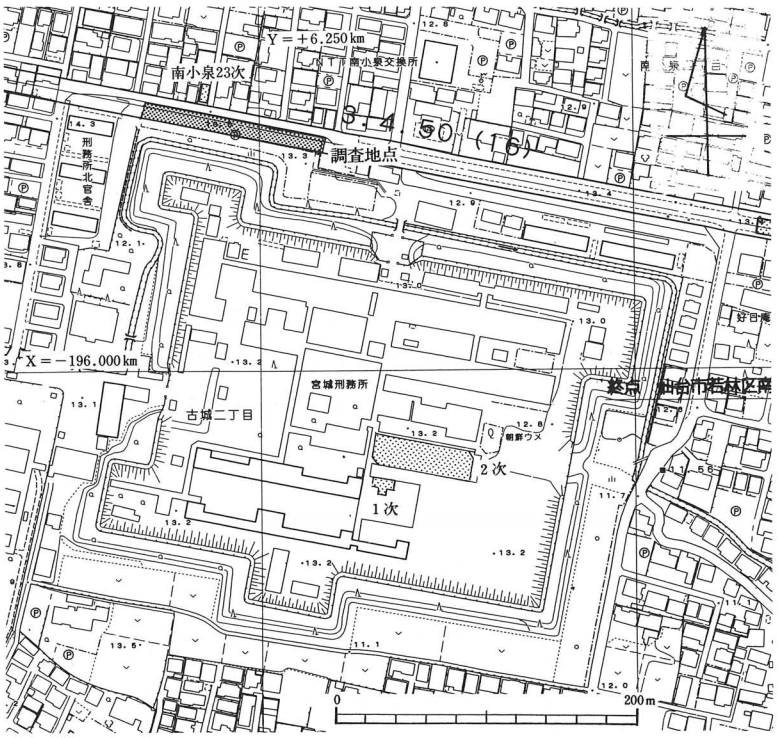
Ⅲ　調査経過と調査概要

１．調査方法

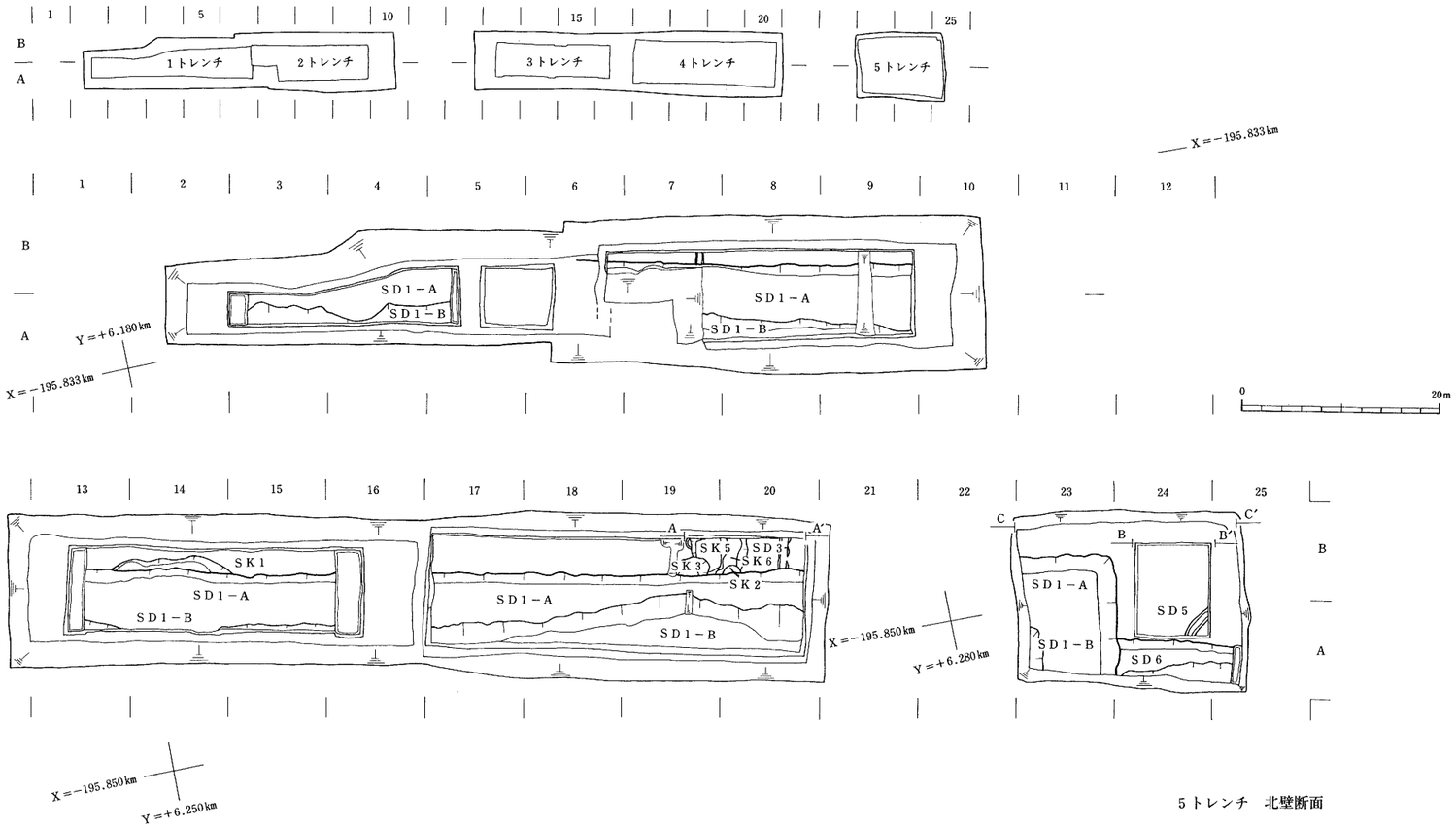
調査対象地は若林城跡北辺堀跡の西側部にあたる。東西125m・南北11mの東西に細長い調査区で面積は1,375㎡である。当初、トレンチを４本設定し、西から順に１～４トレンチとした。

調査は、平成11年８月23日より開始した。まず、１トレンチ・３トレンチ、次にそれを埋め戻した後２トレンチ・４トレンチを調査した。また、４トレンチの調査中その東側で堀が屈曲することが推定されたため、新たに５トレンチを設定し堀のコーナー部分を確認した。

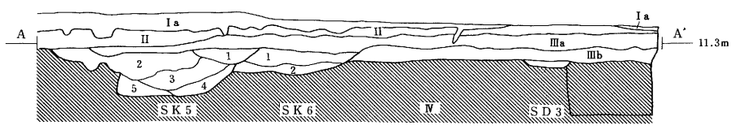
各トレンチとも、重機で表土と堀の盛土を除去したが、瓦・炭殻を多量に含むこの盛土が２メートル以上に及ぶことが判明していたため、その除去にあたっては安全上の配慮からかなり勾配を持たせて行った。そのため、調査の総面積は計370㎡程度となった。



第３図　調査地点

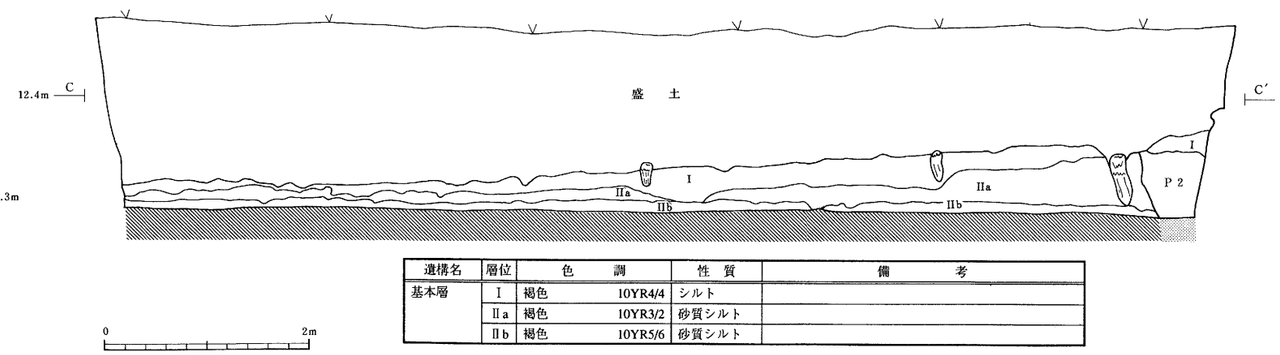


4トレンチ　東部北壁断面



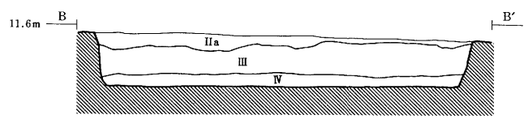
遺構名	層位	色調		性質	備考
基本層	Ⅰa	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	灰黄褐色土・褐色土・黄褐色土を斑に含む
	Ⅱ	にぶい黄橙色	10YR6/4	シルト	酸化鉄を粒状に含む
	Ⅲa	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	
	Ⅲb	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	Ⅲa層に比べやや暗い、酸化鉄を粒状に含む
	Ⅳ	にぶい黄褐色	10YR5/4	シルト質粘土	灰白色火山灰を層状に含む
SD3	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む
SK5	1	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	黄橙色土を斑に含む
	2	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	混成層
		にぶい黄橙色	10YR6/4	シルト質粘土	
	3	明黄褐色	10YR6/6	粘土質シルト	黒褐色土をブロック状に含む
	4	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	黒褐色土・黄褐色土をブロック状に含む
	5	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	褐灰色土をすじ状に含む
SK6	1	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	
	2	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	混成層
		明黄褐色	10YR6/6	粘土質シルト	

5トレンチ　北壁断面



遺構名	層位	色調		性質	備考
基本層	Ⅰ	褐色	10YR4/4	シルト	
	Ⅱa	褐色	10YR3/2	砂質シルト	
	Ⅱb	褐色	10YR5/6	砂質シルト	

5トレンチ深掘り　北壁断面



遺構名	層位	色調		性質	備考
基本層	Ⅱa	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
	Ⅲ	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	下部に酸化鉄を多量に含み、黄褐色土を層状に含む
	Ⅳ	にぶい赤褐色	5YR4/4	粘土質シルト	灰白色火山灰を多量に含み、褐灰色土を斑に含む

第4図　遺構配置図

また、調査区の制約から、下層の自然堆積層を良好に検出できたのは４トレンチのみで、他のトレンチではほとんど検出できなかった。さらに、盛土下では官舎建設の際の整地による削平が著しく、４トレンチ西部以西は遺構・基本層の残りが悪く、これらから調査期間は２ケ月ほどで、平成11年10月26日には調査を終了した。

なお、実測原点は調査区南西角で、ここから５ｍ×５ｍのグリッドを設定した。グリッドの名称は、南北方向が南から北へＡ～Ｂ、東西方向が西から東へ１～25である。南北基準線の方向は、Ｎ－11°－Ｅ、原点の国家座標値はＸ＝－195,833.087ｍ、Ｙ＝＋6,174.930ｍである。

以上、調査区の配置、実測基準線については、第４図を参照されたい。

２．調査概要

発見した遺構は、若林城の堀跡・溝跡５条・土坑７基・ピット２基、河川跡１条である。

若林城の堀跡は、１トレンチで発見したものをＳＤ１、３トレンチで発見したものをＳＤ２と呼んでいたが、２トレンチの調査の結果、ＳＤ１とＳＤ２が同一の堀跡として確認できたためＳＤ２を欠番とした。

出土遺物は、収納用平箱で31箱である。その内容は、縄文土器・非ロクロ土師器・ロクロ土師器・須恵器・平瓦・軒桟瓦・陶器・磁器・石製品・キセル・木製品である。このうち、８割近くを木製品が占め、この木製品の出土はＳＤ１下部のグライ層（ＳＤ１－Ｂ）に限られており、堀のより内側にはさらに数多くの遺物が包含されているものと推測される。

Ⅳ　基本層序

基本層は６層に大別される。この上に炭殻・ガラス・ビニール・瓦等を大量に包含する褐色の盛土（74cm～240cm）がのる。盛土は５トレンチでは比較的薄いが、１～３トレンチでは200cm以上、４トレンチでは150～190cmある。概して東から西に向かって盛土が厚く、旧地表面（官舎時代）の勾配を示している。この盛土は、昭和48（1973）年の六角塔解体に伴う堀埋め立ての際のものである。

Ⅰ層はすべてのトレンチに分布する。層厚は３トレンチで最大41cmを確認している。色調は暗褐色・褐色・にぶい黄褐色で、土質は粘土質シルトないしシルトである。小礫や炭化物と共に下層の土を巻き上げこれを斑に含んでいる。１・２・４トレンチではグライした部分があり、これをⅠb層として区別した。層中からは、非ロクロ土師器３点・ロクロ土師器１点・土師質土器１点・摩滅した土師器片３点・須恵器２点・平瓦４点・陶器３点・磁器10点・漆皮膜１点が出土した。陶磁器には現代物と思われるものも含まれており、官舎時代の表土で耕作による形成層として理解した。この層を除去しＳＤ１を確認している。

Ⅱ層は遺存状況のよい４トレンチ東部～５トレンチでのみ確認した自然堆積層である。４トレンチ東部と５トレンチで色調・土性がやや異なり、トレンチ相互での対応関係は不明である。４トレンチではにぶい黄橙色のシルトで、酸化鉄を粒状に含む。層厚は最大17cmである。５トレンチでは２層に細分される。Ⅱa層は褐色の砂質シルトで最大層厚57cmである。Ⅱb層は暗褐色の砂質シルトで最大層厚16cmである。層中から摩滅した土師器小片が１点出土しているのみで情報に乏しい。Ⅱ層上面でＳＤ６を確認した。

Ⅲ層は自然堆積の包含層である。４トレンチでは色調･土質は酷似するが、２層に細分される。上部のⅢa層は灰黄褐色の粘土質シルトで固くしまる。最大層厚16cmである。検出遺構はない。下部のⅢb層は褐灰色の粘土質シルトで、酸化鉄を粒状に含み固くしまる。最大層厚16cmである。ＳＫ２～６はⅢb層上面確認の遺構である。層中からは、非ロクロ土師器23点・ロクロ土師器２点・摩滅した土師器小片100点・須恵器３点が出土している。５トレンチでは、灰黄褐色の粘土質シルトで部分的に黄褐色土を層状に含む。最大層厚は35cmである。５トレンチからは、

非ロクロ土師器７点・ロクロ土師器１点・摩滅した土師器小片15点・須恵器３点とともに13世紀代の龍泉窯系無文青磁碗の破片が１点出土しており、Ⅲ層の堆積年代の一端を示している。

Ⅳ層は１トレンチでは全面ＳＤ１－Ａのため失われているが、２～４トレンチでは調査区全面に確認された黄褐色の粘土質シルトを基調とする自然堆積層である。２～４トレンチ中央部までは、このⅣ層上面で遺構確認を行った。各トレンチで色調･土質がやや異なり、相互の対応関係は不明である。２～３トレンチ中央では黄褐色～褐色の粘土で、にぶい黄橙色土をブロック状に含んでいる。層厚は最大10cm程で、Ⅰ層の落ち込みも激しい。層厚が薄いため部分的にⅤ層が確認される。明黄褐色粘土質シルトと黄褐色シルトの互層となり層厚も43cmと厚い。４トレンチでは、にぶい黄褐色のシルト質粘土で灰白色火山灰を層状に含んでいる。最大層厚は52cmである。５トレンチでは、にぶい赤褐色を呈し灰白色火山灰を多量に含んでいる。層厚15cmまで確認した。Ⅳ層からは遺物が出土していないが、10世紀前半代に降下したといわれる灰白色火山灰を二次堆積として含んでいることから、上限が知れる。検出遺構にはＳＤ３～５がある。

Ⅴ層は総じてにぶい黄橙色～にぶい黄褐色の砂層ないし砂礫層で、１～４トレンチで確認した。最大確認層厚は、試掘時の124cm（本調査２トレンチ内）であるが、４トレンチでは薄く、17cmしかない部分もある。総じて西に向かうほど層厚が増す。３トレンチでは層上部より、縄文晩期の土器片が１点出土している。Ⅴ層は河川堆積土として理解される。

Ⅵ層は酸化鉄が凝固した極めて堅く締まった砂礫層で、当調査地点では地山面となる。ＳＤ１－ＢはこのⅥ層上面まで掘り込まれている（確認地点の標高9.83m、現地表面より－3.24m）。

なお、遺構確認は全面がＳＤ１－Ａであった１トレンチでは盛土除去下、２～４トレンチ中央部はⅣ層上面、４トレンチ東部以西はⅡ層上面･Ⅲ層上面･Ⅳ層上面で確認した。

Ⅴ　検出遺構とその出土遺物

１．堀跡・溝跡・河川跡

（１）ＳＤ１堀跡

調査区全域にわたって検出した若林城の堀跡である。調査区の制約上、張り出し部分の北辺と東辺の片辺のみの部分的な確認である。Ⅰ層除去下で確認した。形状と溝方向からＳＤ１－Ａ（人為堆積）とＳＤ１－Ｂ（自然堆積）の２条の堀として調査を進めた。

①ＳＤ１－Ａ

調査区に並行に直線的に延び、５トレンチで南に直角に屈曲する。検出長は105.33mで、上端幅4.51m・下端幅3.68m・深さ1.06mまで確認した。北辺軸方向はＮ－80°－Ｗである。壁はきつい勾配で立ち上がるが、断面形は不明である。堆積土は６層に分層され１トレンチではグライ化している。大半は人為堆積土である。出土遺物は、縄文土器２点・非ロクロ土師器49点・ロクロ土師器11点・摩滅した土師器片13点・須恵器13点・土師質土器１点・瓦質土器２点・土製品（レンガ片？）４点・丸瓦２点・平瓦４点・桟瓦３点・細片のため種別不明な瓦片４点・陶器10点・磁器42点・石製品（硯・硯石・スレート）８点・金属製品１点・木片１点がある。このうち、縄文土器１点・ロクロ土師器１点・須恵器１点・陶器２点・丸瓦１点・硯と硯石各１点・金属製品（キセル吸い口）１点を図化した。平瓦はプレス瓦かと思われる。桟瓦はいわゆる「引っ掛け桟瓦」である。陶器・磁器には現代のものも含まれている。硯は硯石の破損を防ぐために採石場で塗られる漆を残しており、製作過程で投棄された未製品ないし破損品である。また、硯石の切断面は近世に行われていたような鋸引きの粗いものと異なり、電動鋸による細かいものである。宮城刑務所では、昭和26年前後に雄勝町から石材を搬入し所内労働で硯やスレートを製作していたら

しく（聞き取り調査）、その際に投棄されたものと考えられる。こういった遺物の状況と、崩落土以外は人為堆積であることを踏まえると、堆積土は昭和25～26年に行われた官舎建設の際の整地に関わる埋め戻し土であろう。堆積状況は、崩落土と解されるもの以外は水平であり丁寧な埋め戻しが行われている。堆積土には、基本層を多量に含んでおり、埋め戻しの際には堀岸の削平も伴ったようである。直線的なＳＤ１－Ａの上端は、埋め戻しの際の切り岸によって形成されたものと考えられる。

②ＳＤ１－Ｂ

１～３トレンチでは概ね直線的に延びるが、４トレンチ東部で大きく膨らみ、５トレンチ内で南へ屈曲する。検出長は101.39m、上端幅3.02m・下端幅2.11m・深さ1.43mまで確認した。部分的に平坦面がみられるが、試掘時の断面を見るとさらに南側に向かって深く落ち込むようである。立ち上がりは急である。断面形は不明である。堆積土は７層に分層されグライ化している。砂と粘土が複雑に入り組み、水性堆積の様相を呈している。出土遺物には、非ロクロ土師器４点・須恵器２点・丸瓦１点・平瓦１点・陶器４点・石製品１点・木製品480点がある。特に堆積土下部から多量の木製品が出土している。瓦は燻瓦で、陶器は大堀相馬白濁釉碗（底面）・同白濁釉瓶類、瀬戸美濃産陶器（19世紀）・東海産山茶碗窯系甕で、いずれも近世までのものである。石製品は砥石である。木製品には、下駄19点・下駄の歯21点・汁杓子１点・箸２点・刷毛１点・桶ないし樽の側板11点・樽の栓２点・提灯の底板？を含む円盤状木製品６点・刃物の柄１点・傘の轆轤１点・ヘラ状木製品１点・くさび状木製品３点・杭６点・板材５点・竹釘？２点・一定の法量に切りそろえた割竹17点・ヘギ板216点・棒状ないし板状木製品としか表現し得ない破損の著しいものと端材がある。年代が特定できる遺物の中で、19世紀代の瀬戸美濃陶器片と、文化・文政期に出現するとされる（市田：2000）無歯下駄ないし草履下駄が最新のものと思われる。このことからＳＤ１－Ｂの堆積層の上限は19世紀前半頃に求められる。なお、図化した遺物は須恵器１点・丸瓦１点・石製品（砥石）１点・木製品177点である。

（２）ＳＤ３溝跡

４トレンチのＢ－20グリッドで検出した。確認面はⅣ層上面である。ＳＤ１に切られる。南北方向に直線的に延び、軸方向はＮ－15°－Ｅである。規模は確認長164cm・上端幅50cm・下端幅28cm・深さ８cmである。断面形は逆台形を基調とする。底面はほぼ平坦で中央がやや深く落ち込むが、南北で高低差は認められない。堆積土は１層である。出土遺物は、縄文土器１点・非ロクロ土師器坏１点・赤焼土器坏？１点・摩滅した土師器片１点である。

（３）ＳＤ４溝跡

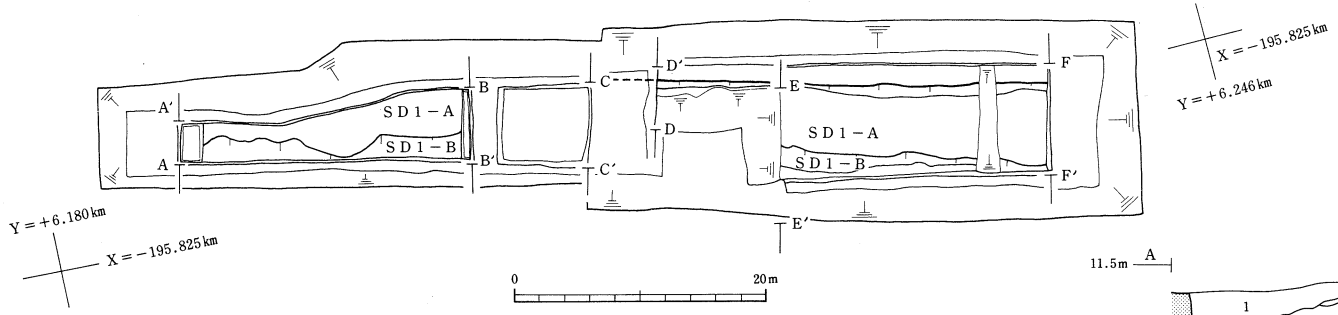
２トレンチのＢ－７グリッドで検出した。確認面はⅣ層上面であるが２トレンチはⅡ・Ⅲ層が失われており、より上位の可能性がある。ＳＤ１－Ａに切られる。南北方向に直線的に延び、軸方向はＮ－10°－Ｅである。規模は確認長70cm・上端幅34cm・下端幅28cm・深さは最深部で22cmである。断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦であるが一部落ち込みが見られる。南北で高低差は認められない。堆積土は１層である。出土遺物はない。

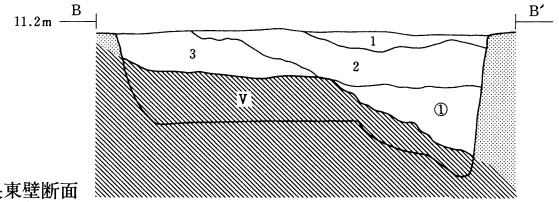
（４）ＳＤ５溝跡

５トレンチのＡ－24グリッド下層調査で検出した。確認面はⅣ層上面である。軸方向はＮ－54°－Ｅだが、やや湾曲している。規模は、確認長192cm・上端幅は52cm・下端幅30cm・深さ22cmである。断面形は逆台形を基調とする。底面はやや凹凸があるが高低差は認められない。堆積土は１層である。出土遺物はない。

（５）ＳＤ６溝跡

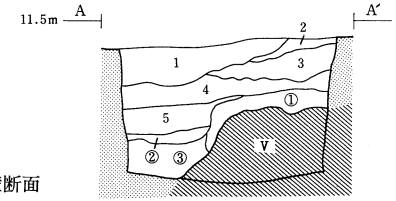
５トレンチのＡ－24～25グリッドで検出した。確認面はⅡ層上面である。ＳＤ１－Ａに切られる。溝北側部のみの確認である。軸方向はＮ－73°－Ｗである。規模は、検出長594cm・確認上端幅190cm・深さ36cmである。底面はほぼ平坦であるがゆるく南側へ落ちている。堆積土は２層で、底面には酸化鉄が集積凝固する。断面形は不明である。出土遺物は、非ロクロ土師器９点・ロクロ土師器２点・摩滅した土師器片２点がある。





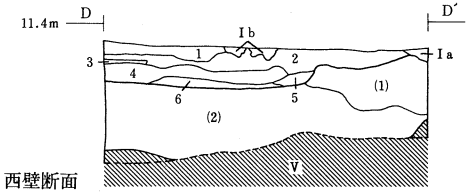
1トレンチ　中央東壁断面

遺構名	層位	色　　調	性　質	備　　考
SD1－A	1	灰オリーブ色　7.5Y4/2	砂質シルト	砂を粒状に含む、グライ化
	2	にぶい黄褐色　10YR5/4	砂	同色の砂質粘土をすじ状に含む
	3	褐色　10YR4/4	砂質シルト	黒褐色土を粒状に含む
SD1－B	①	灰オリーブ色　7.5Y4/2	砂	部分的に粗砂を含む、グライ化
基本層	V	にぶい黄褐色　10YR5/4	砂礫	



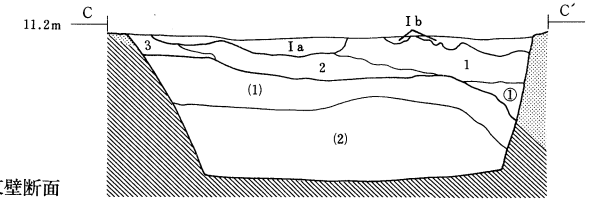
1トレンチ　西壁断面

遺構名	層位	色　　調	性　質	備　　考
SD1－A	1	灰オリーブ色　7.5Y4/2	粗砂	グライ化
	2	灰オリーブ色　7.5Y4/2	砂	ややシルト質、1よりやや明るい、グライ化
	3	にぶい黄褐色　10YR5/4	砂	褐灰色土を粒状に含む
	4	にぶい黄褐色　10YR4/3	粗砂	黒褐色土を粒状に含む
	5	灰オリーブ色　10YR4/3	砂	黒褐色土を粒に含む、グライ化
SD1－B	①	黄褐色　10YR5/6	砂質シルト	黒褐色土・褐灰色土を斑に含む
	②	灰オリーブ色　7.5Y4/2	砂質シルト	黒褐色土をすじ状に含む、グライ化
	③	灰オリーブ色　7.5Y4/2	砂質シルト	層下部にすじ状に砂が堆積、グライ化
基本層	V	褐色　10YR4/4	砂礫	2～5㎝大の礫



2トレンチ　西壁断面

遺構名	層位	色　　調	性　質	備　　考
SD1－A	1	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	暗褐色土を斑に含む
	2	暗褐色　10YR3/3	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む
	3	黒褐色　10YR2/2	シルト質粘土	小礫を含む
	4	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土質シルト	暗褐色土を斑に含む
	5	暗褐色　10YR3/3	シルト質粘土	黒褐色土をブロック状に含む
	6	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に含む
SR－1	(1)	灰黄褐色　10YR6/2	砂質粘土	酸化鉄をブロック状に含む
	(2)	にぶい黄褐色　10YR4/3	粗砂	層下部に酸化鉄集積
基本層	Ia	暗褐色　10YR3/3	シルト	小礫を含む
	Ib	暗青灰色　10BG4/1	シルト	小礫を含む、グライ化
	V	にぶい黄褐色　10YR4/3	粗砂	



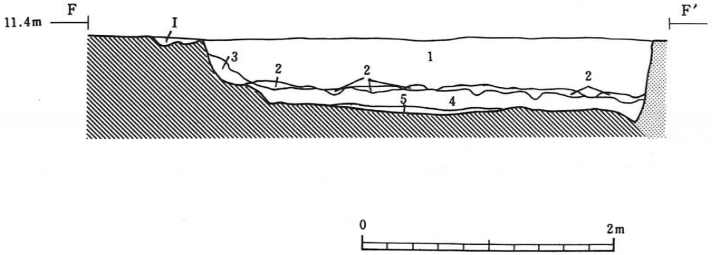
1トレンチ　東壁断面

遺構名	層位	色　　調	性　質	備　　考
SD1－A	1	にぶい黄褐色　10YR4/3	砂質シルト	暗褐色土を斑に含む、南側はややグライ化
	2	にぶい黄褐色　10YR4/3	砂質粘土	下部に粗砂を層状に含む
	3	暗褐色　10YR3/3	砂質粘土	
SD1－B	①	暗青灰色　10BG3/1	粘土	グライ化
SR－1	(1)	にぶい黄橙色　10YR7/2	細砂	互層　酸化鉄を層状に含む
		明褐色　7.5YR5/6	粗砂	径1～2㎝の礫を含む
		灰黄褐色　10YR6/2	砂質粘土	酸化鉄を層状に含む
	(2)	にぶい黄褐色　10YR4/3	粗砂	酸化鉄・灰黄褐色粘土をブロック状に含む
基本層	Ia	暗褐色　10YR3/3	砂質シルト	やや粘土質、明黄褐色土・灰黄褐色土を斑に含む
	Ib	オリーブ黒色　5Y3/1	砂質シルト	やや粘土質、灰オリーブ色土を斑に含む、グライ化

第5図　SD1堀跡平面図・断面図（1）

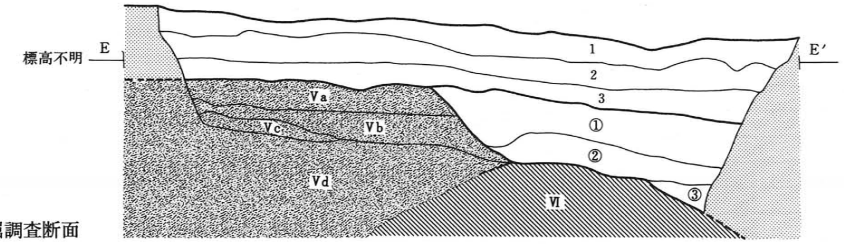
第6図　SD1堀跡平面図・断面図（2）

2トレンチ　東壁断面

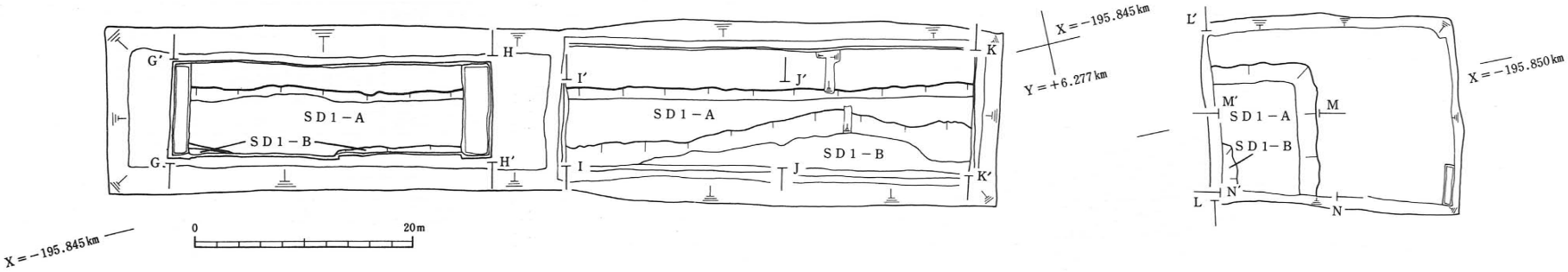


遺構名	層位	色　調	性　質	備　考
SD1－A	1	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土質シルト	にぶい黄褐色土・細砂・褐色土を斑に含む
	2	にぶい黄褐色　10YR5/3	砂質粘土	
	3	暗褐色　10YR3/3	シルト質粘土	黒褐色土をブロック状に含む
	4	褐色　10YR4/4 褐灰色　10YR4/1	粘土質シルト 粘土質シルト	混成層　層下部に炭化物を層状に含む
	5	褐色　10YR4/4	粘土質シルト	にぶい黄橙色土をブロック状に少量含む
基本層	Ⅰ	暗褐色　10YR3/3	シルト	小礫を含む

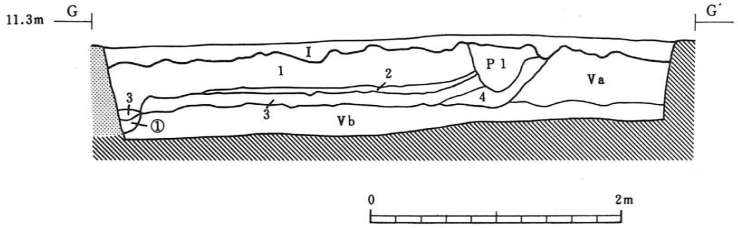
試掘調査断面



遺構名	層位	色　調	性　質	備　考
SD1－A	1	黄褐色　10YR5/6	砂質シルト	
	2	灰黄色　2.5Y6/2	砂質シルト	酸化鉄を含む、炭化物を薄く層状に含む
	3	にぶい黄褐色　10YR5/4	粘土質シルト	にぶい黄褐色土・にぶい黄橙色土を斑に含む
SD1－B	①	灰色　5Y5/1 灰オリーブ色　5Y6/2	粘土質シルト 粘土	互層
	②	灰色　5Y5/1	粘土	細砂と互層をなす
	③	灰色　5Y4/1	粘土	
基本層	Va	にぶい黄橙色　10YR6/4	粗砂	
	Vb	にぶい黄褐色　10YR5/3	粗砂	
	Vc	にぶい黄褐色　10YR5/4	砂礫	
	Vd	にぶい黄褐色　10YR5/4	粗砂	
	Ⅵ		砂礫	酸化鉄が集積し極めて固くしまる



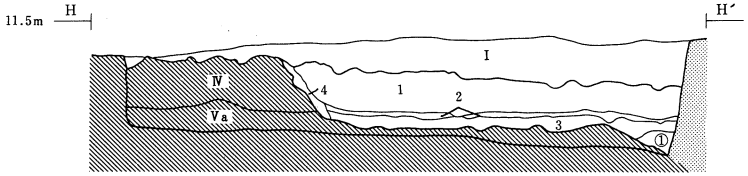
3トレンチ　西壁断面



遺構名	層位	色　調	性　質	備　考
SD1－A	1	にぶい黄褐色　10YR5/4	細砂	下部に褐灰色土をブロック状に含む
	2	灰黄褐色　10YR5/2	粘土	
	3	黄褐色　10YR5/4 灰黄褐色　10YR5/2	粘土 粘土	混成層　酸化鉄を斑に含む
	4	にぶい黄褐色　10YR4/3	砂	暗褐色土を斑に含む
SD1－B	①	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土	酸化鉄をブロック状に含む
基本層	Ⅰ	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土質シルト	
	Va	にぶい黄褐色　10YR4/3	砂	黄褐色土を層・ブロック状に含む
	Vb	にぶい黄褐色　10YR4/3	砂	

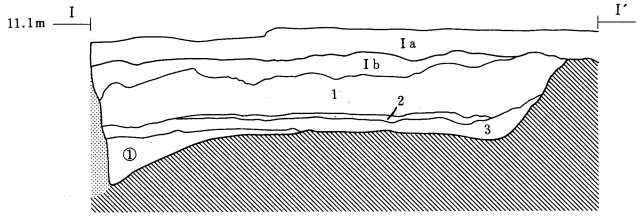
第7図　ＳＤ１堀跡平面図・断面図（３）

３トレンチ　東壁断面



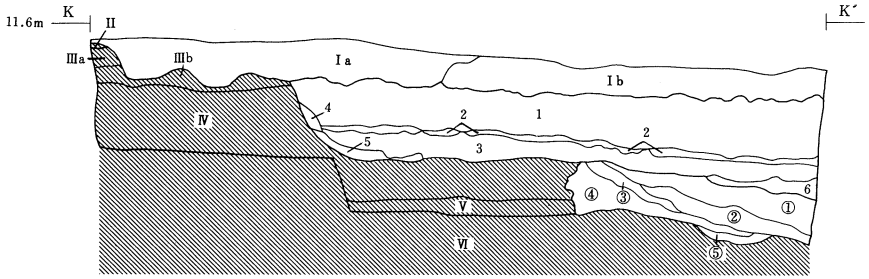
遺構名	層位	色　　調	性　質	備　　考
ＳＤ１－Ａ	1	にぶい黄褐色　10YR5/4	細砂	下部に褐灰色土をブロック状に含む
	2	灰黄褐色　10YR5/2	粘土	
	3	黄褐色　10YR5/4 灰黄褐色　10YR5/2	粘土 粘土	混成層　酸化鉄を斑に含む
	4	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	黄褐色土を粒状に含む
ＳＤ１－Ｂ	①	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土	酸化鉄をブロック状に含む
基本層	Ⅰ	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土質シルト	
	Ⅳ	明黄褐色　10YR6/6 黄褐色　10YR5/6	粘土質シルト シルト	部分的に細砂を層状に含む
	Ⅴa	にぶい黄褐色　10YR4/3	砂	黄褐色土を層状・ブロック状に含む

４トレンチ　西壁断面



遺構名	層位	色　　調	性　質	備　　考
ＳＤ１－Ａ	1	にぶい黄褐色　10YR5/3	粘土質シルト	酸化鉄を含む、褐灰色土をブロック状に含む
	2	褐灰色　7.5YR6/1	粘土	下部に薄く酸化鉄集積
	3	褐色　7.5YR4/4 黒褐色　7.5YR3/1 灰黄褐色　10YR5/2	粘土質シルト 粘土 粘土	混成層　酸化鉄を斑に含む
ＳＤ１－Ｂ	①	灰黄褐色　10YR5/2	粘土	酸化鉄を斑に含み下部で集積
基本層	Ⅰa	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	小礫・炭化物を含み褐灰色土をブロック状に含む
	Ⅰb	褐色　10YR4/4	シルト	小礫・炭化物を含み褐灰色土をブロック状に含む

４トレンチ　東壁断面

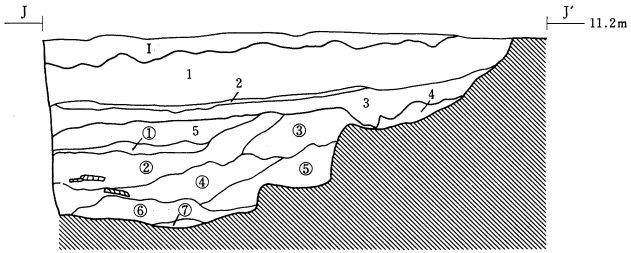


遺構名	層位	色　　調	性　質	備　　考
ＳＤ１－Ａ	1	灰黄褐色　10YR6/2	粘土	酸化鉄・粗砂を斑に含む、層最下部に炭化物
	2	灰黄褐色　10YR5/2	粘土	ややグライ化
	3	灰黄褐色　10YR6/2	粘土	部分的にグライ化、酸化鉄を斑に含む
	4	暗灰黄色　2.5Y5/2	粘土	細砂をブロック状に含む
	5	褐色　10YR4/4 褐色　7.5YR4/4 灰褐色　7.5Y5/2	粘土 粘土 粘土	混成層　酸化鉄を斑に含む
	6	緑灰色　10G5/1	砂質粘土	酸化鉄・粗砂を斑に含む、グライ化
ＳＤ１－Ｂ	①	青灰色　10BG5/1 オリーブ黒色　7.5Y3/1	粘土 粘土	混成層　木片・枝葉を多量に含む、グライ化
	②	暗オリーブ灰色　5GY4/1 緑灰色　10GY5/1	砂質粘土 砂質粘土	互層　板材・枝葉を多量に含む、グライ化
	③	にぶい黄色　2.5Y6/3	粘土	層下部に酸化鉄集積、ややグライ化
	④	褐色　10YR4/6	細砂	酸化鉄を粒状に含む、木製品を少量含む
	⑤	オリーブ黒色　10YR4/6	粘土	グライ化
基本層	Ⅰa	にぶい黄褐色　10YR4/3	粘土質シルト	灰黄褐色土・褐色土・黄褐色土を斑に含む
	Ⅰb	褐灰色　10YR5/1	粘土質シルト	褐色土・黄褐色土を斑に酸化鉄を霜降り状に含む
	Ⅱ	にぶい黄橙色　10YR6/4	シルト	酸化鉄を粒状に含む
	Ⅲa	灰黄褐色　10YR4/2	粘土質シルト	固くしまる
	Ⅲb	褐灰色　10YR4/1	粘土質シルト	固くしまる、酸化鉄を粒状に含む
	Ⅳ	にぶい黄褐色　10YR5/4	シルト質粘土	灰白色火山灰を層状に含む
	Ⅴ	にぶい黄褐色　10YR4/3	砂	黄褐色土を層状・ブロック状に含む
	Ⅵ		砂礫	固くしまる

0　　2m

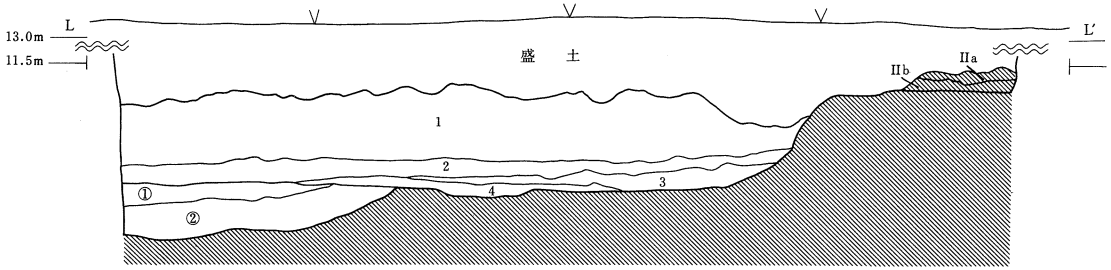
第8図　SD1堀跡平面図・断面図（4）

4トレンチ　中央西壁断面



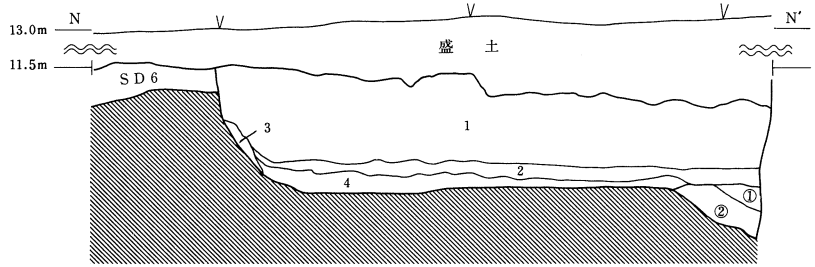
遺構名	層位	色調		性質	備考
SD1－A	1	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	酸化鉄・粗砂を斑に含む、炭化物を層状に含む
	2	灰黄褐色	10YR5/2	粘土	上部に炭化物を層状に含む、グライ化
	3	褐灰色	10YR5/1	砂質粘土	酸化鉄・粗砂を斑に含む
	4	褐色	10YR4/4	粘土	混成層
		灰黄褐色	10YR6/2	粘土	
	5	黒褐色	10YR2/3	粘土	混成層　酸化鉄を斑に含む
		にぶい黄橙色	10YR7/2	砂質粘土	
SD1－B	①	灰色	7.5Y4/1	粘土	炭化物を少量含む、グライ化
	②	灰色	10Y4/1	粘土	細砂・木片・枝葉を多量に含む、グライ化
	③	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	褐灰色土を斑に酸化鉄を層状に含む
	④	灰色	7.5Y4/1	粘土	互層　枝葉・板材を多量に含む、グライ化
		灰黄色	2.5Y6/2	細砂	
	⑤	灰黄色	2.5Y6/2	砂質粘土	黄灰色土を層状に酸化鉄を粒状に含む、グライ化
	⑥	灰色	10Y4/1	粘土	粗砂を層状に含む、木製品を多量に含む、グライ化
	⑦	暗緑灰色	7.5GY4/1	粗砂	下部に酸化鉄集積、グライ化
基本層	I	褐色	10YR4/4	粘土質シルト	小礫・炭化物を含む

5トレンチ　西壁断面



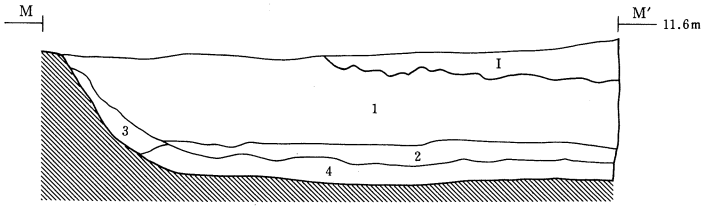
遺構名	層位	色調		性質	備考
SD1－A	1	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	混成層
		褐色	10YR4/4	砂	
		にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	
	2	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	やや粘土質、下部に酸化鉄集積
	3	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	明黄褐色土を粒状に含む
	4	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	やや粘土質、にぶい黄橙色土を斑に含む
SD1－B	①	褐灰色	10YR5/1	粘土	互層　上部に砂堆積
		明黄褐色	10YR7/6	粘土	
	②	褐灰色	10YR5/1	粘土	砂を層状に含む
基本層	IIa	褐色	10YR4/4	砂質シルト	
	IIb	暗褐色	10YR3/4	砂質シルト	

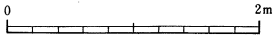
5トレンチ　南壁断面



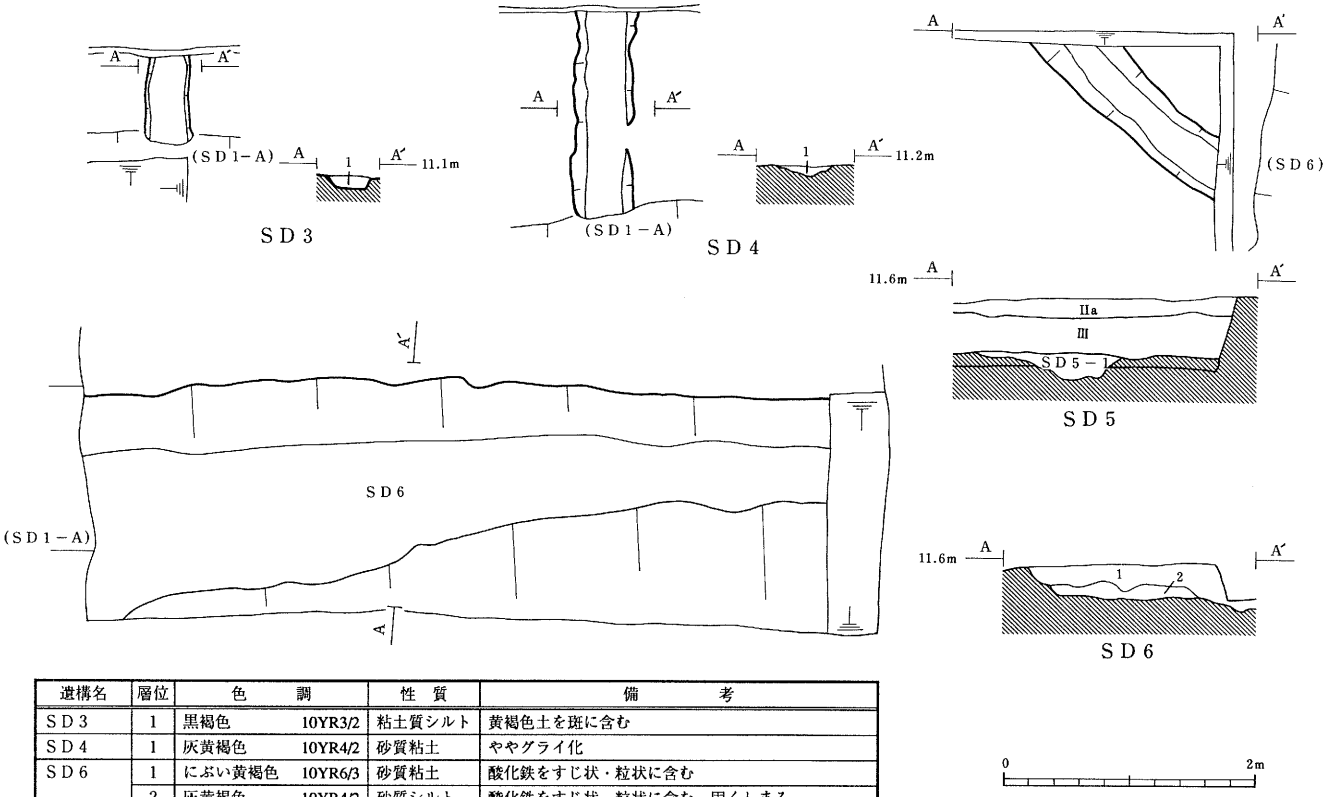
遺構名	層位	色調		性質	備考
SD1－A	1	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	混成層
		褐色	10YR4/4	砂	
		にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	
	2	褐灰色	10YR4/1	砂質シルト	やや粘土質、下部に酸化鉄集積
	3	褐色	10YR4/6	砂質シルト	
	4	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	やや粘土質、にぶい黄橙色土を斑に含む
SD1－B	①	褐灰色	10YR5/1	粘土	互層　砂を含む
		明黄褐色	10YR7/6	粘土	
	②	褐灰色	10YR5/1	粘土	砂を層状に含む
SD6		にぶい黄橙色	10YR6/3	砂質シルト	やや粘土質、酸化鉄をすじ・粒状に含む

5トレンチ　中央南壁断面





遺構名	層位	色調		性質	備考
SD1－A	1	褐灰色	10YR5/1	砂質シルト	混成層
		褐色	10YR4/4	砂	
	2	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	小礫・明黄褐色土を含む
	3	褐色	10YR4/4	砂質シルト	黒褐色土をすじ状に含む
	4	にぶい黄褐色	10YR4/3	砂質シルト	黄褐色土を粒状に含む
基本層	I	暗褐色	10YR3/4	シルト	小礫・炭化物を含む



遺構名	層位	色調		性質	備考
SD3	1	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	黄褐色土を斑に含む
SD4	1	灰黄褐色	10YR4/2	砂質粘土	ややグライ化
SD6	1	にぶい黄褐色	10YR6/3	砂質粘土	酸化鉄をすじ状・粒状に含む
	2	灰黄褐色	10YR4/2	砂質シルト	酸化鉄をすじ状・粒状に含む、固くしまる
SD5	1	灰黄褐色	10YR4/2	粘土	にぶい黄褐色土を層状に黒色土をブロック状に含む
基本層	IIa	褐色	10YR4/6	砂質シルト	暗褐色・褐灰色・にぶい黄橙色土をブロック状に含む
	III	灰黄褐色	10YR4/2	粘土質シルト	下部は酸化鉄を多量に含み灰褐色を呈する
	IV	にぶい赤褐色	5YR4/4	粘土	褐灰色土を斑に、灰白色火山灰を多量に含む

第９図　溝跡平面図・断面図

（６）ＳＲ－１河川跡

１トレンチ東部～２トレンチ西部にかけて検出した（断面観察）。確認面はＶ層上面である。断面観察から、方向は概ね北西－南東方向で、検出範囲内では若林城内へと向かっている。規模から見て河川跡というよりは小流路跡といった方が適切かも知れない。堆積土は、上部は粘土と砂の互層、下部は砂礫層で酸化鉄が斑に入る。出土遺物は、縄文土器１点・非ロクロ土師器16点・ロクロ土師器８点・摩滅した土師器片６点・須恵器５点である。うち、縄文土器１点・非ロクロ土師器２点・ロクロ土師器２点・須恵器２点の計７点を図示した。

２．土坑

（１）ＳＫ１土坑

３トレンチＡ・Ｂ－13～15グリッドで検出した。確認面はＶ層上面であるが、検出地点はＶ層の隆起が著しく、上位層は昭和25～26年の官舎建設に伴う地均しで失われた可能性もあり、確認面は不確定なものである。ＳＤ１－Ａ・Ｂに切られる。規模は、長軸670cm・短軸398cm・深さ134cmを測る。極めて大型の土坑である。平面形は、上端は検出面が砂層のため崩落し不整形であるが、下端では楕円形に近い。底面は平坦で北側の立ち上がりはほぼ垂直でオーバーハング気味でさえある。堆積土は４層に分層される。上部２層は固くしまり、最下層はグライしている。自然堆積である。出土遺物には、縄文土器７点・非ロクロ土師器10点・ロクロ土師器２点・摩滅した土師器片２点があり、うち縄文土器７点を図示した。

（２）ＳＫ２土坑

４トレンチＢ－20グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。ＳＫ６を切り、ＳＤ１－Ａに切られる。規模は、長軸100cm・短軸71cm・深さ28cmである。平面形は円形と思われる。底面はほぼ平坦である。堆積土は１層

で、10cm大の礫が多量に入り固くしまる。出土遺物は、ロクロ土師器の小片が１点ある。

（３）ＳＫ３土坑

４トレンチＢ－19グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。ＳＫ４を切り、ＳＤ１－Ａに切られる。規模は、長軸176cm・短軸160cm・深さ64cmである。平面形は不整な円形である。底面は方形状で浅い落ち込みが見られる。堆積土は４層に分層され、自然堆積である。出土遺物には、摩滅した土師器片１点と須恵器小片１点がある。

（４）ＳＫ４土坑

４トレンチＢ－19グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。ＳＤ１－Ａ、ＳＫ３に切られる。規模は、長軸108cm・短軸80cm・深さ24cmである。平面形は隅丸の方形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は１層である。出土遺物には、非ロクロ土師器２点がある。

（５）ＳＫ５土坑

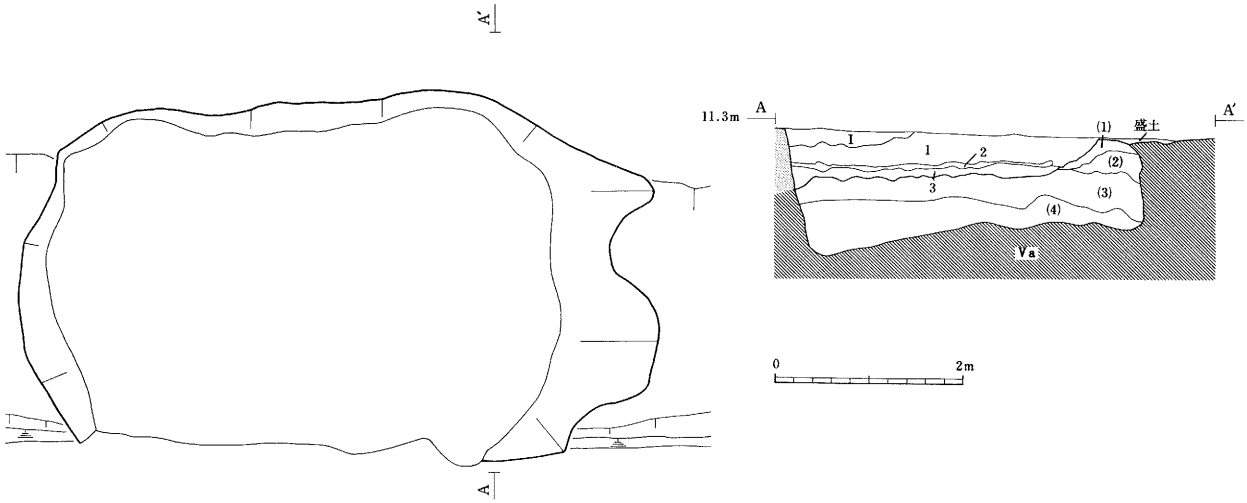
４トレンチＢ－19グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。ＳＫ６を切り、ＳＤ１－Ａ・ＳＫ３に切られる。規模は、長軸206cm・短軸196cm・深さ54cmである。平面形はやや不整であるが方形を基調とする。底面は平坦である。堆積土は５層に分層され、自然堆積である。遺物は、縄文土器１点・非ロクロ土師器９点・ロクロ土師器４点・摩滅した土師器小片26点・須恵器１点が出土している。

（６）ＳＫ６土坑

４トレンチＢ－19～20グリッドで検出した。確認面はⅢb層上面である。ＳＤ１－Ａ・ＳＫ２・ＳＫ５に切られる。検出規模は、長軸184cm・短軸110cm・深さ34cmである。平面形は不明である。壁面は緩やかに落ち、底面は平坦である。堆積土は２層に分層され、自然堆積である。出土遺物はない。

（７）ＳＫ７土坑

２トレンチＡ･Ｂ－８グリッドで検出した。確認面はⅤ層上面であるが、ＳＤ１－Ａ底面での検出のため、より上位の可能性がある。規模は、長軸470cm・短軸202cm・深さ36cmで、大型の土坑である。平面形は不整な長円形



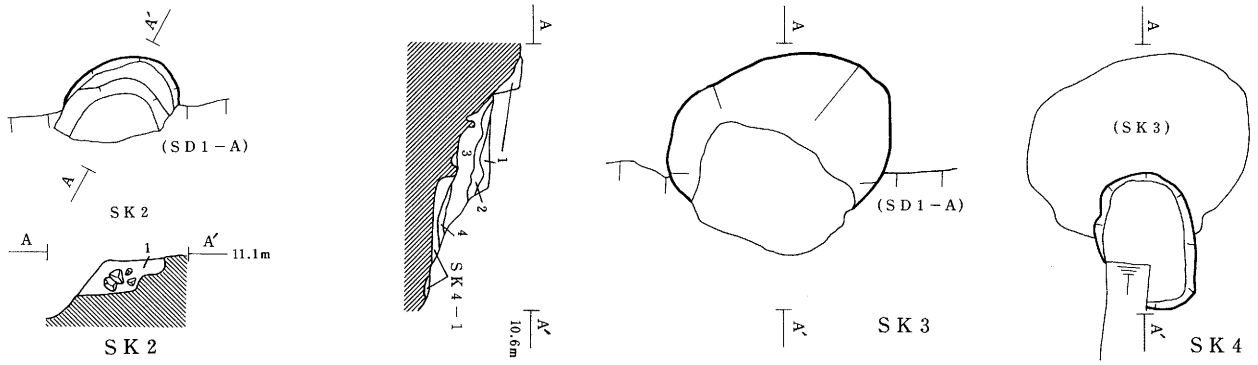
遺跡名	層位	色調		性質	備考
ＳＤ１－Ａ	1	にぶい黄褐色	10YR5/4	細砂	下部に褐灰色土をブロック状に含む
	2	灰黄褐色	10YR5/2	粘土	
	3	黄褐色	10YR5/4	粘土	混成層　酸化鉄を斑に含む
		灰黄褐色	10YR5/2	粘土	
ＳＫ１	(1)	黒褐色	10YR3/2	粘土	混成層
		褐色	10YR4/4	シルト	
	(2)	褐色	10YR4/4	粘土	Ⅳ層・細砂を部分的に含む
	(3)	褐色	10YR4/6	粘土	Ⅳ層・黒褐色土を粒状に含む
	(4)	灰黄褐色	10YR6/2	粘土	酸化鉄をブロック状に含む
基本層	Ⅰ	にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	
	Va	褐色	10YR4/6	砂	互層
		灰黄褐色	10YR4/2	砂	

第10図　ＳＫ１土坑平面図・断面図

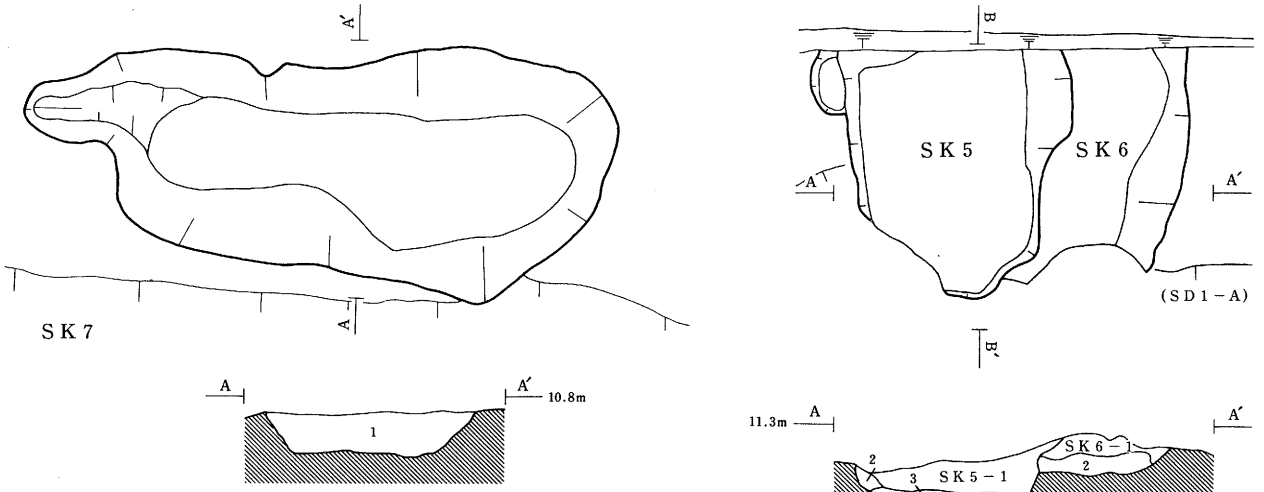
である。壁面総じて緩やかだが、各方向で角度に違いがあり規則的なものではない。底面は平坦である。堆積土は1層で、人為堆積である。出土遺物はない。

3．遺構外出土遺物

非ロクロ土師器9点・ロクロ土師器5点・摩滅した土師器片6点・土師質土器1点・須恵器2点・軒桟瓦3点・陶器9点・磁器11点・石製品1点がある。うち、軒桟瓦3点を図示した。H1の瓦当文様は、小巴部分が連珠に左巻き三巴で、垂れ部分は均整唐草風の意匠である。H2・H3は、文様全体を示していない資料であるが、H1と同一であろう。これらの軒桟瓦の文様は、明治10～12年に建設された宮城集治監にあった六角塔の軒桟瓦（宮城刑務所：1979）と同一である。

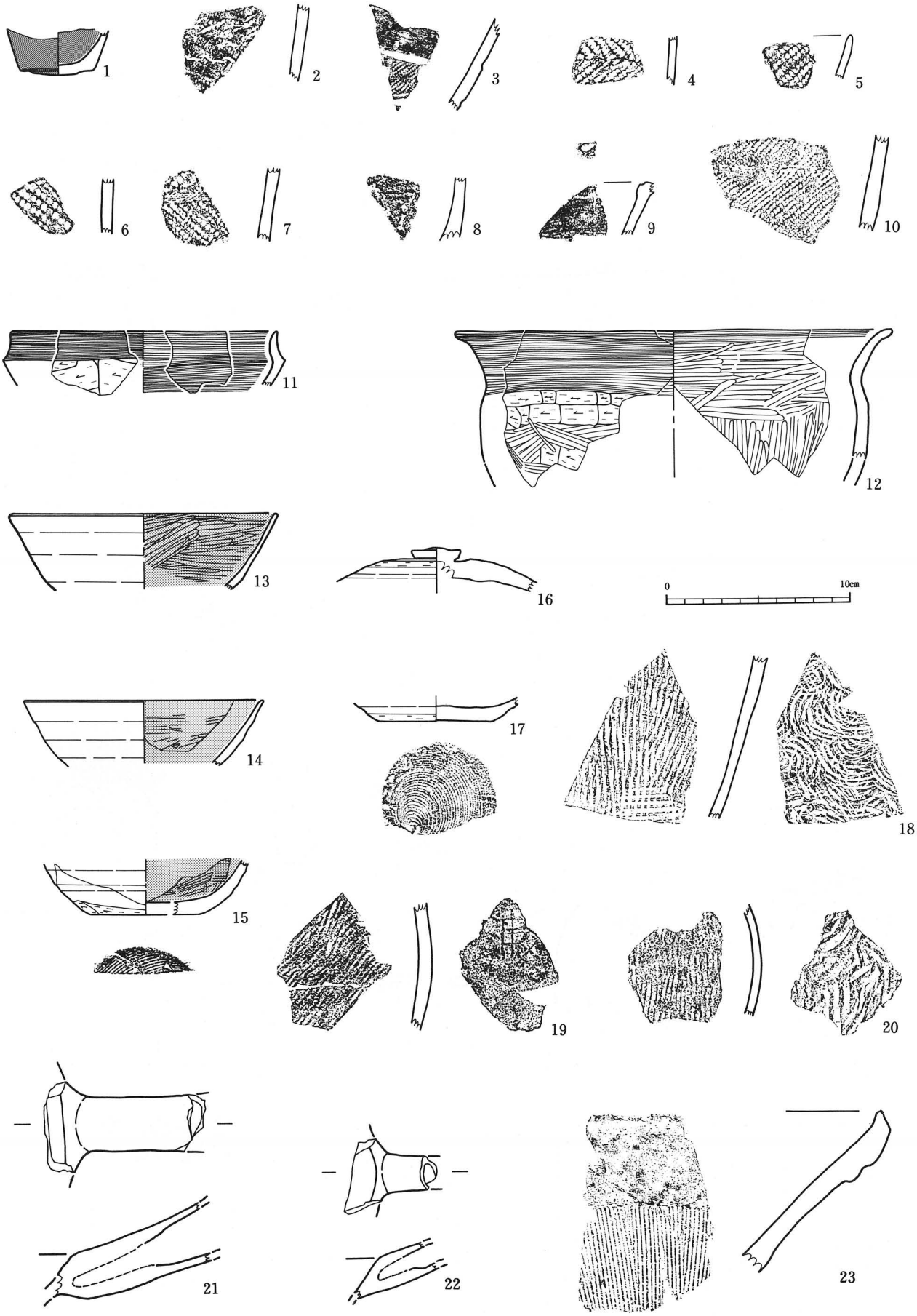


遺構名	層位	色調		性質	備考
SK2	1	褐灰色	10YR4/1	粘土	酸化鉄を斑に含む、径10cm内外の礫を多量に含む
SK3	1	明黄褐色	10YR7/6	シルト	混成層
		黒褐色	10YR3/1	シルト	
	2	灰黄褐色	10YR4/2	シルト	酸化鉄を斑に含む
	3	褐灰色	10YR4/1	シルト	黄褐色土・炭化物を粒状に含む
	4	黒褐色	10YR3/2	粘土質シルト	灰白色土をすじ状に含む
SK4	1	灰黄褐色	10YR5/2	粘土質シルト	黒色土を層状に含む

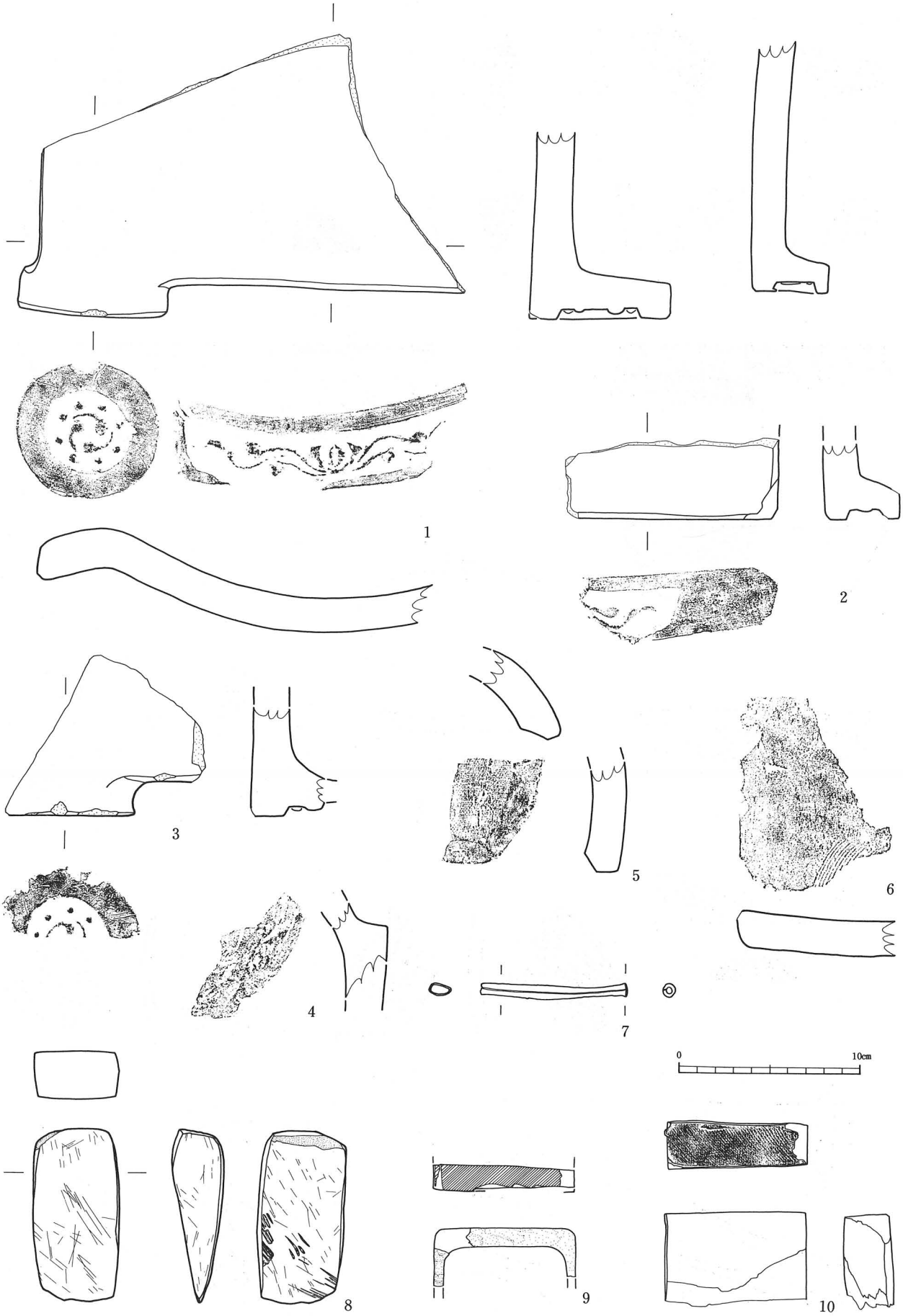


遺構名	層位	色調		性質	備考
SK5	1	褐灰色	10YR4/1	粘土質シルト	混成層
		明黄褐色	10YR6/6	粘土質シルト	
	2	黒褐色	10YR3/1	粘土質シルト	互層
		にぶい黄褐色	10YR4/3	粘土質シルト	
	3	黒褐色	10YR3/1	シルト質粘土	
SK6	1	黒褐色	10YR3/2	シルト質粘土	灰黄褐色土・褐色土を層状に含む
	2	黒褐色	10YR2/2	シルト質粘土	互層　灰白色火山灰を粒状に含む
		明黄褐色	10YR6/6	シルト質粘土	
SK7	1	にぶい黄褐色	10YR5/4	砂質シルト	褐色土をブロック状に含む

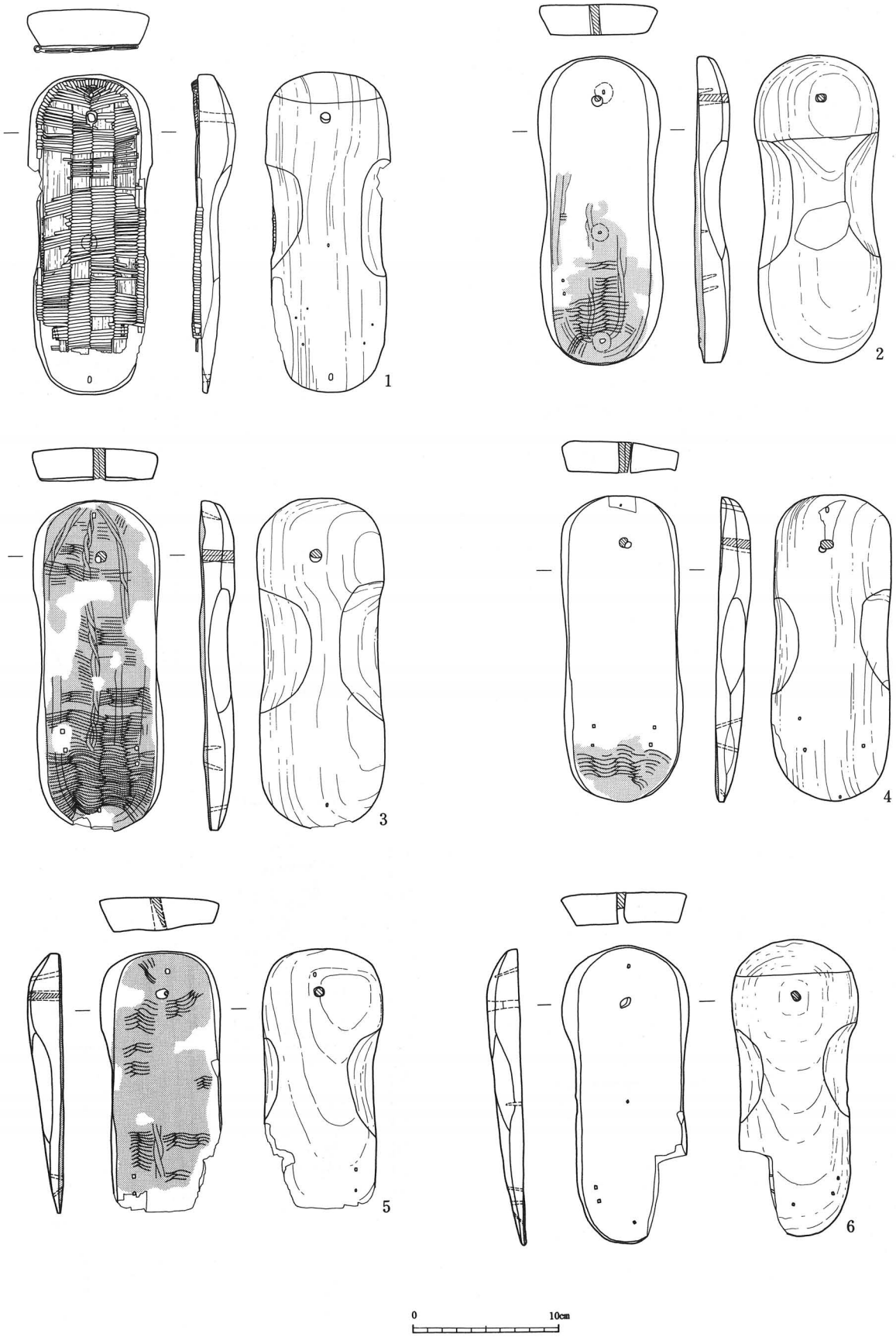
第11図　SK2～7土坑平面図・断面図



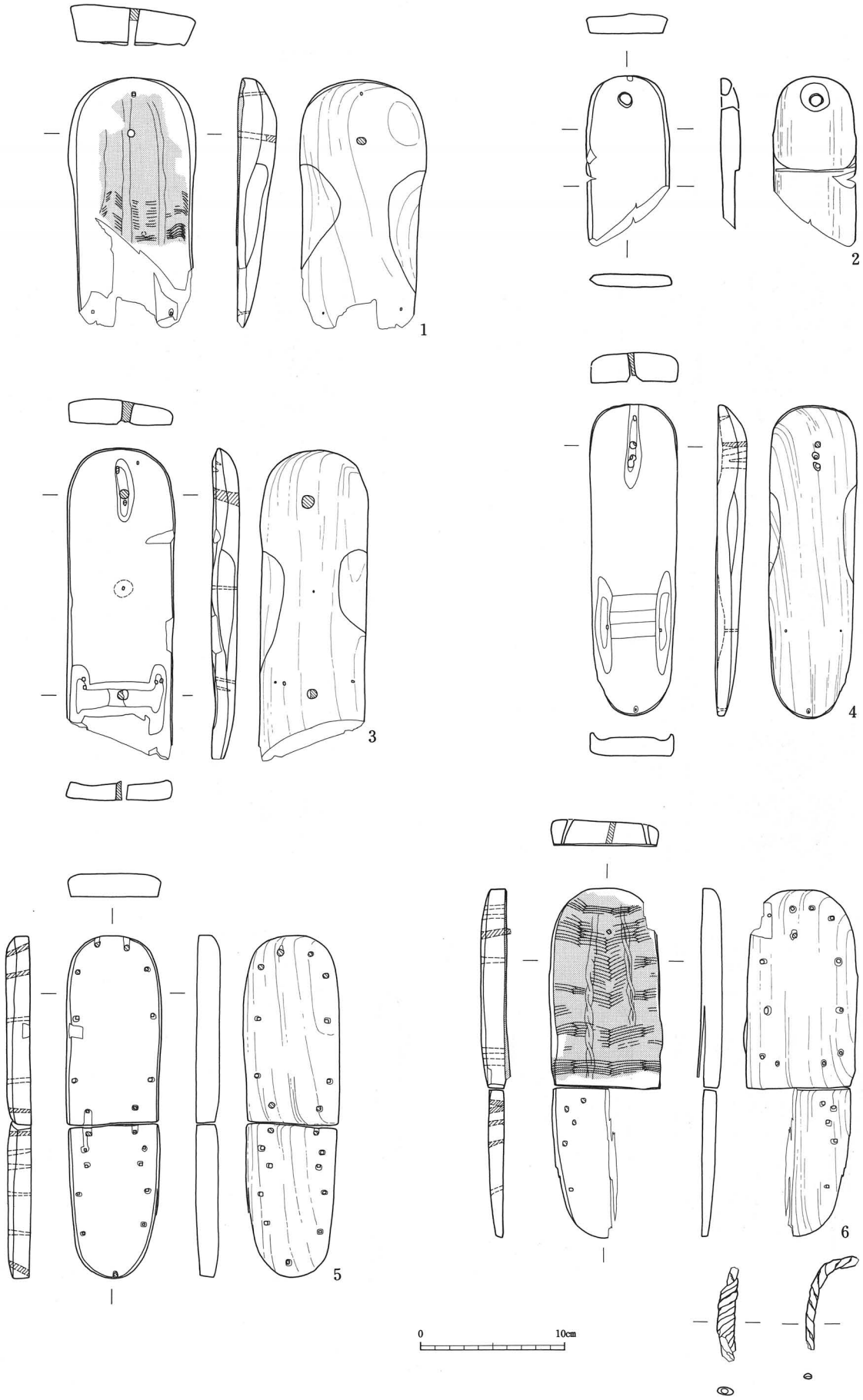
第12図　出土遺物（1）　縄文土器・土師器・須恵器・陶器



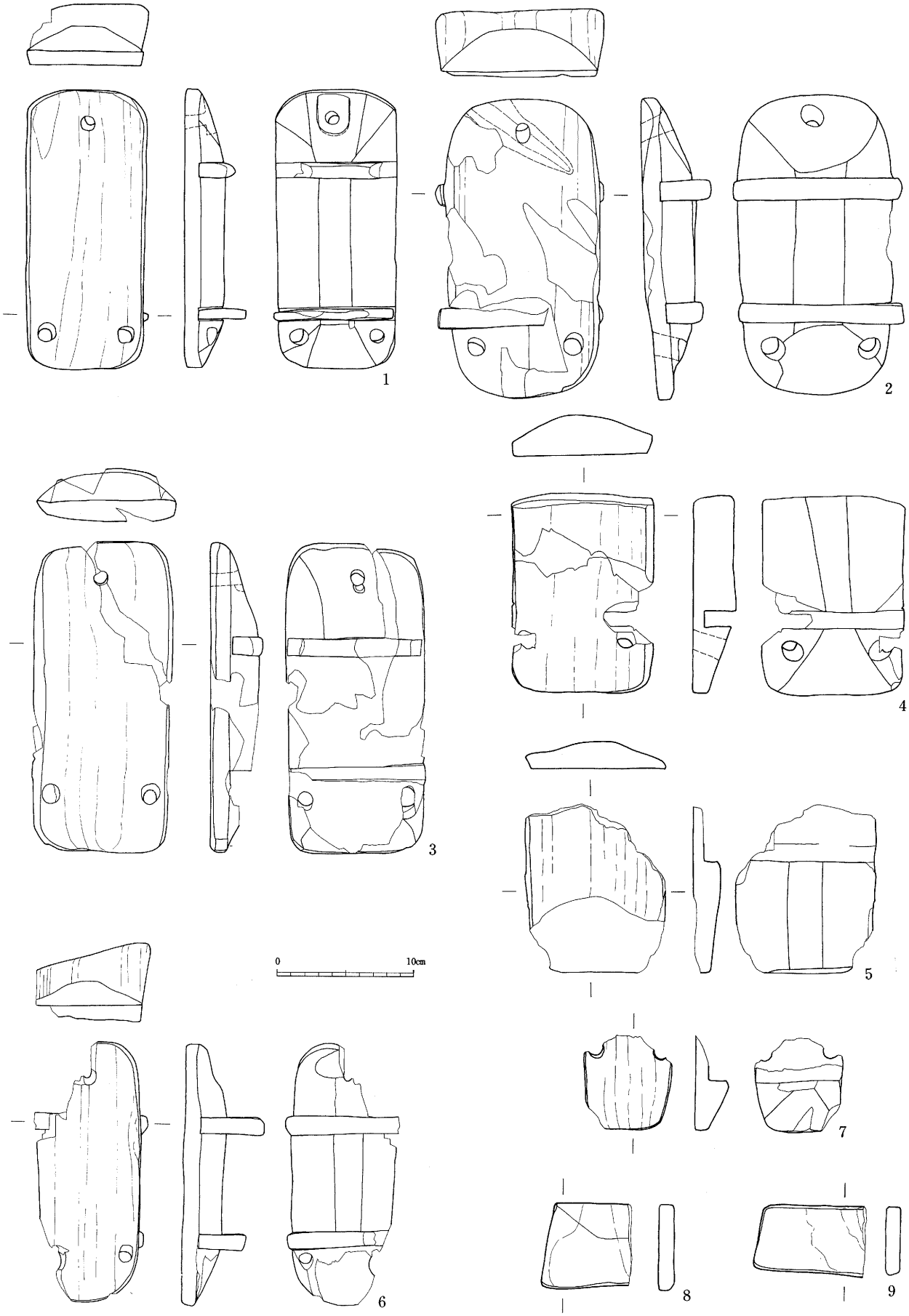
第13図　出土遺物（2）　瓦・銅製品・石製品



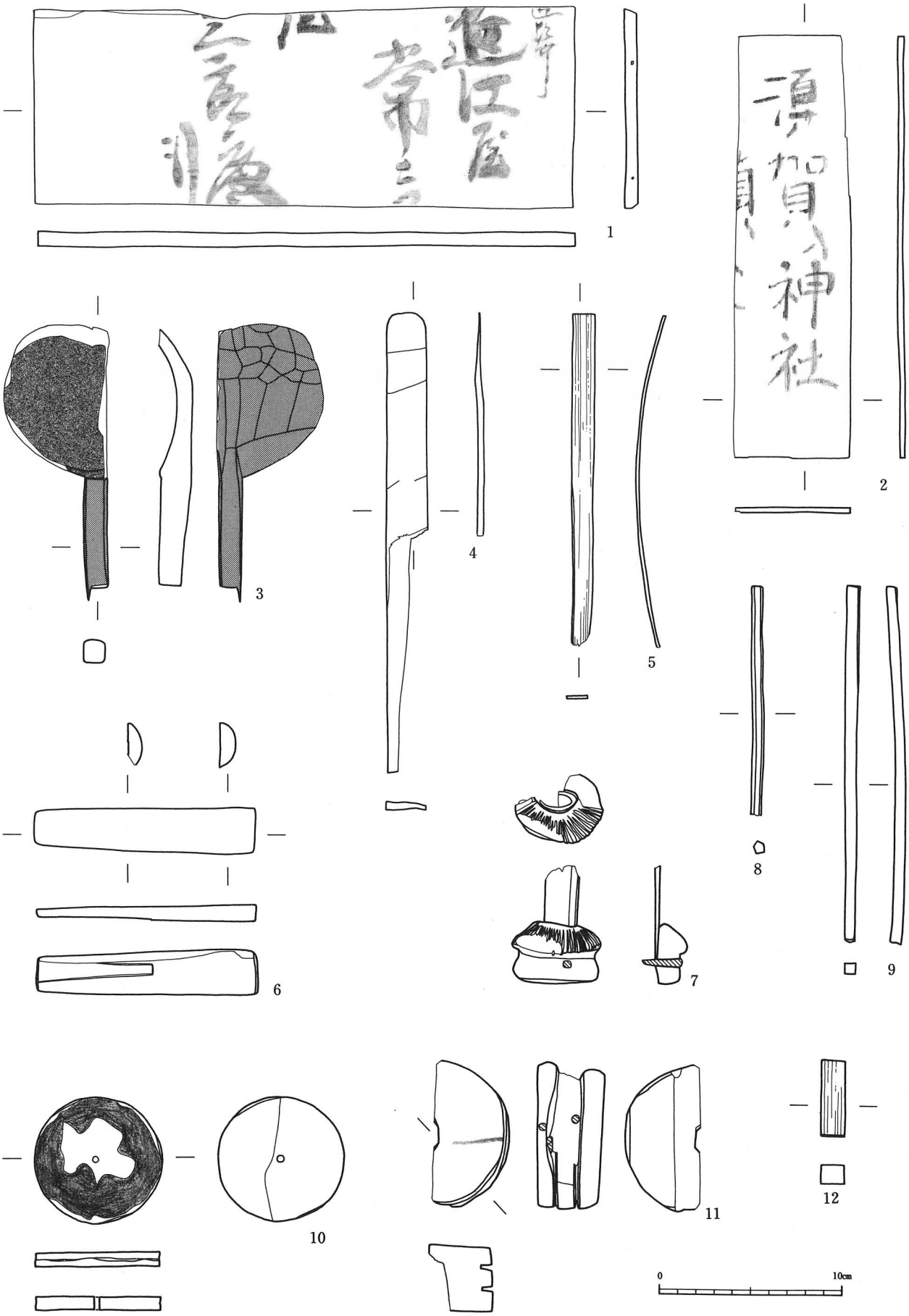
第14図　出土遺物（3）　木製品①



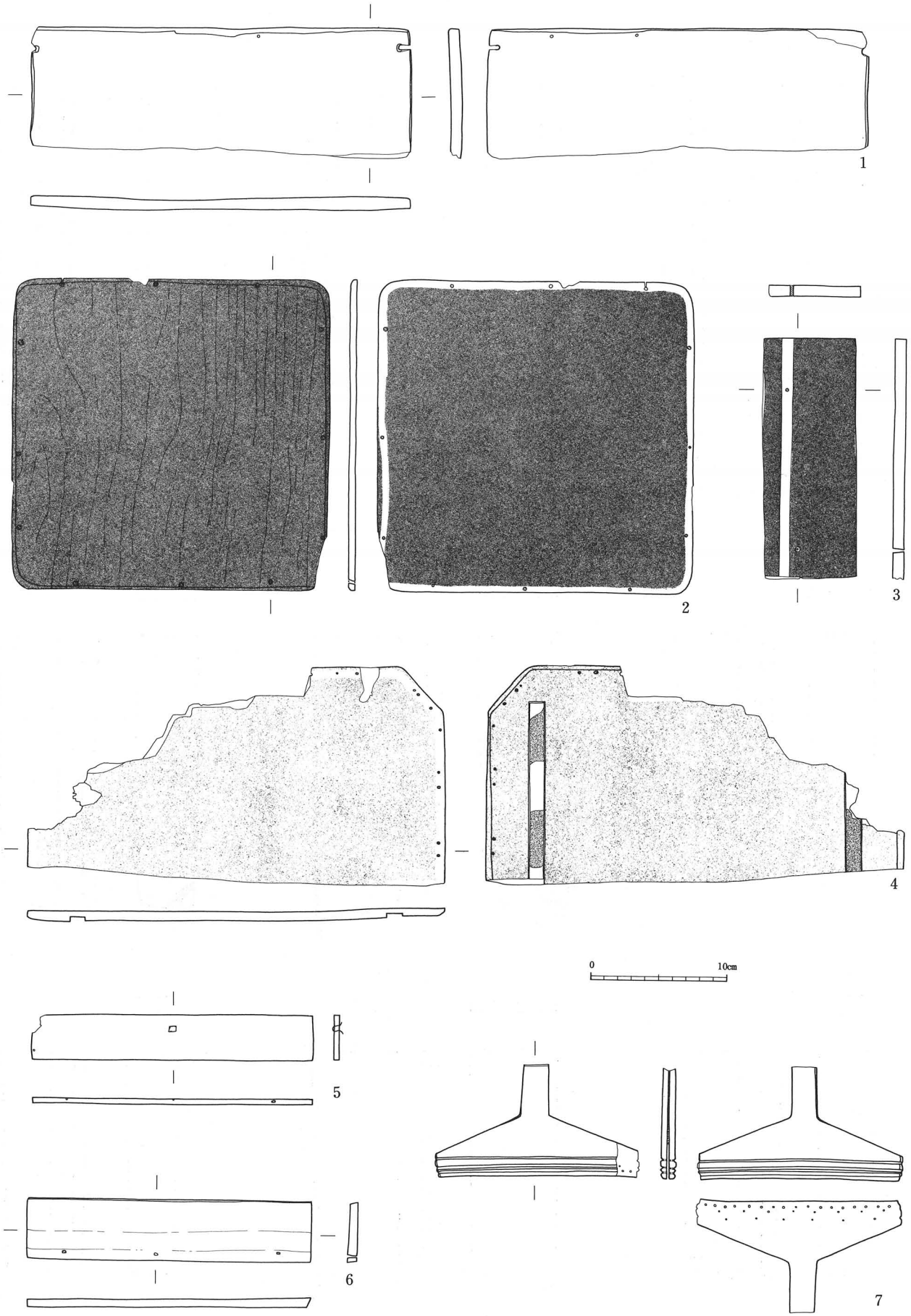
第15図　出土遺物（4）　木製品②



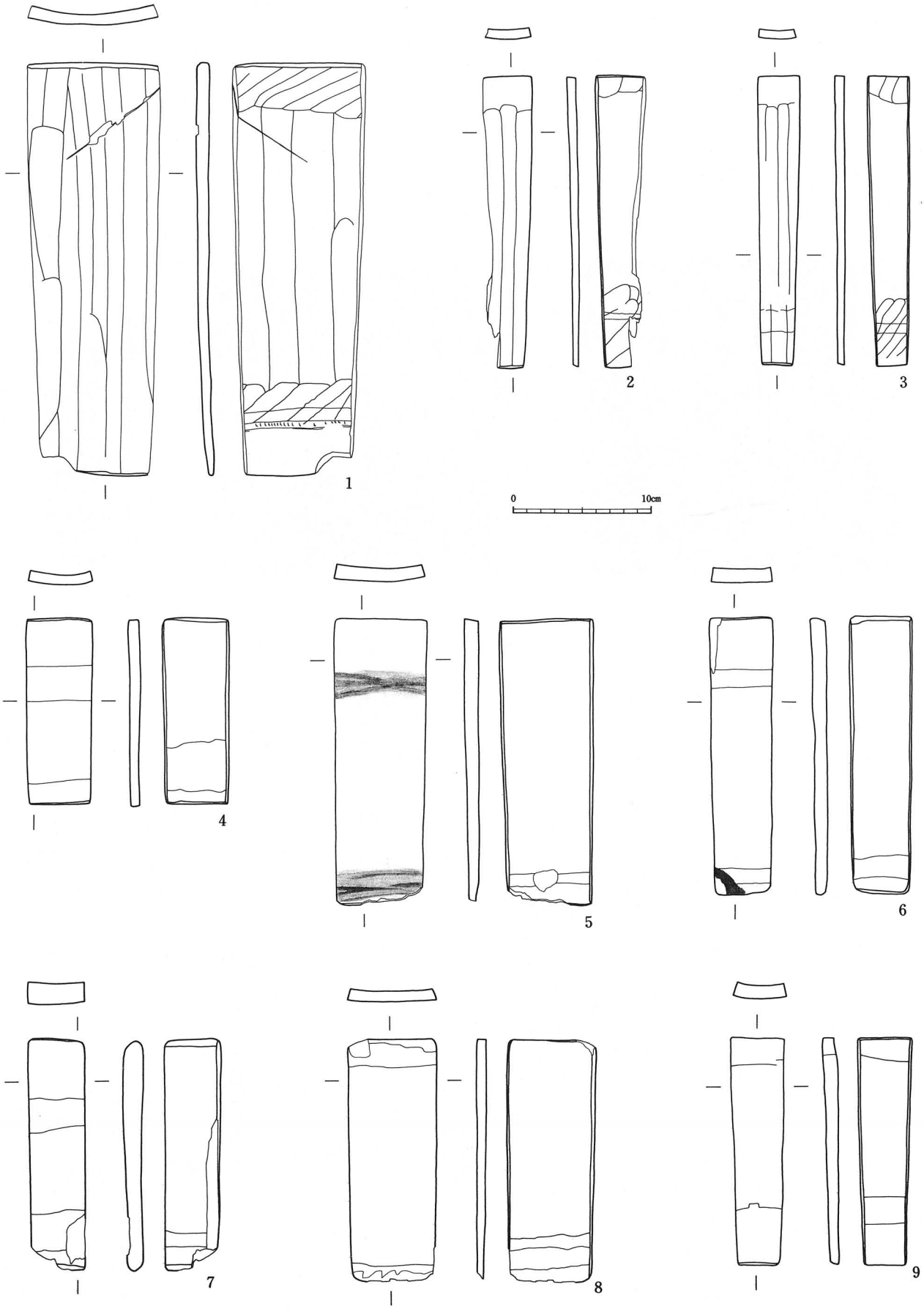
第16図　出土遺物（5）　木製品③



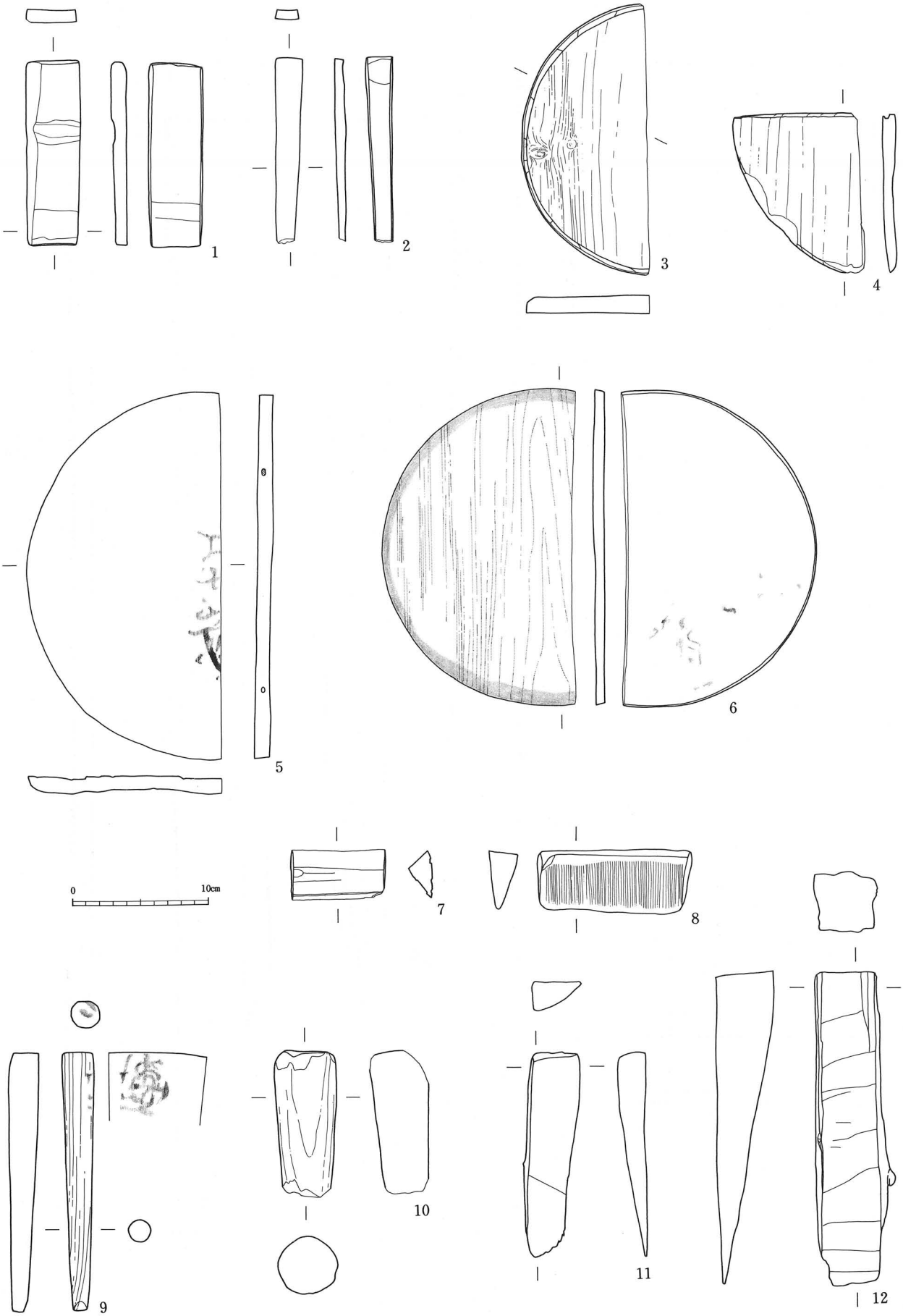
第17図　出土遺物（6）　木製品④



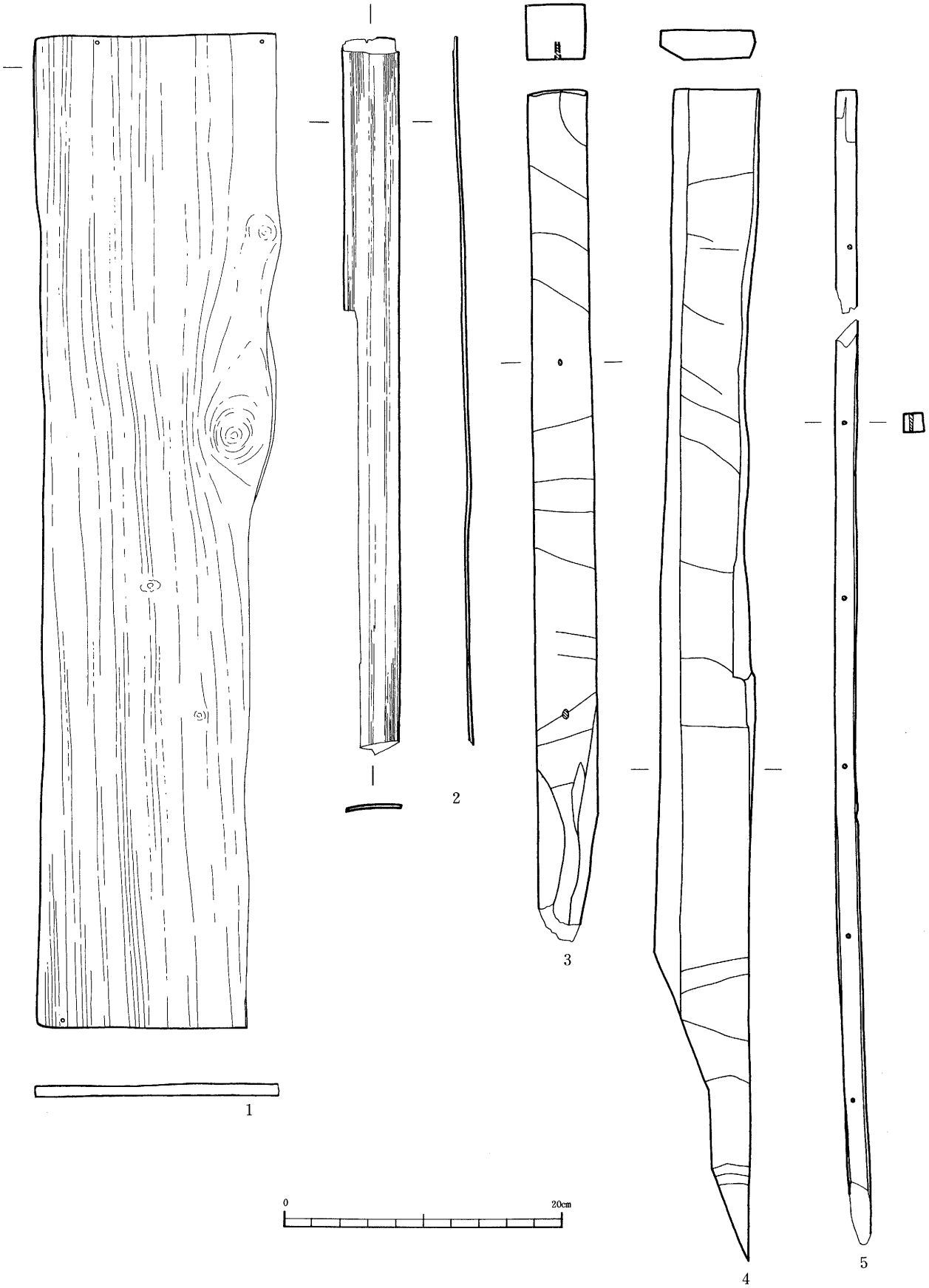
第18図　出土遺物(7)　木製品⑤



第19図　出土遺物（8）　木製品⑥

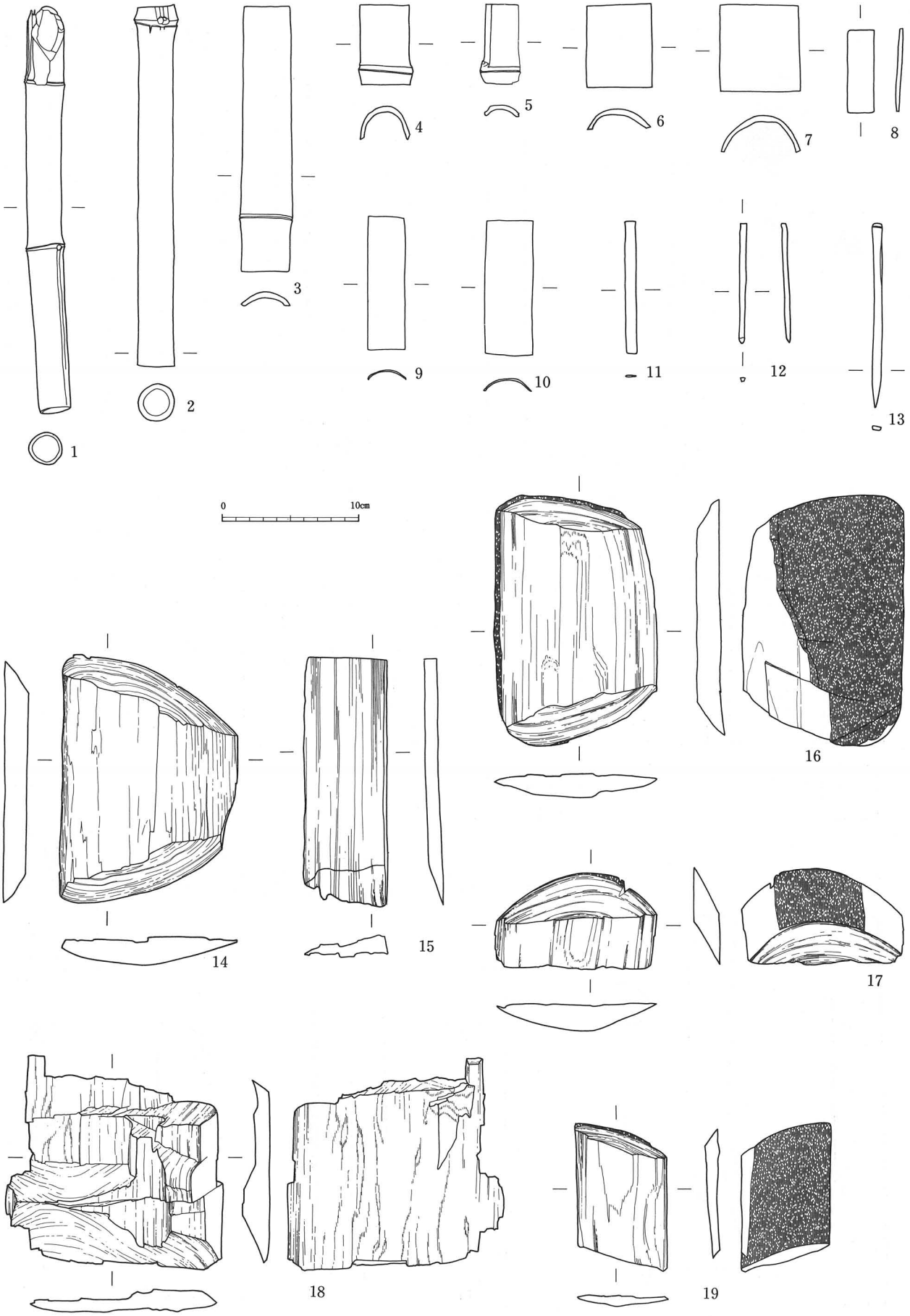


第20図　出土遺物（9）　木製品⑦

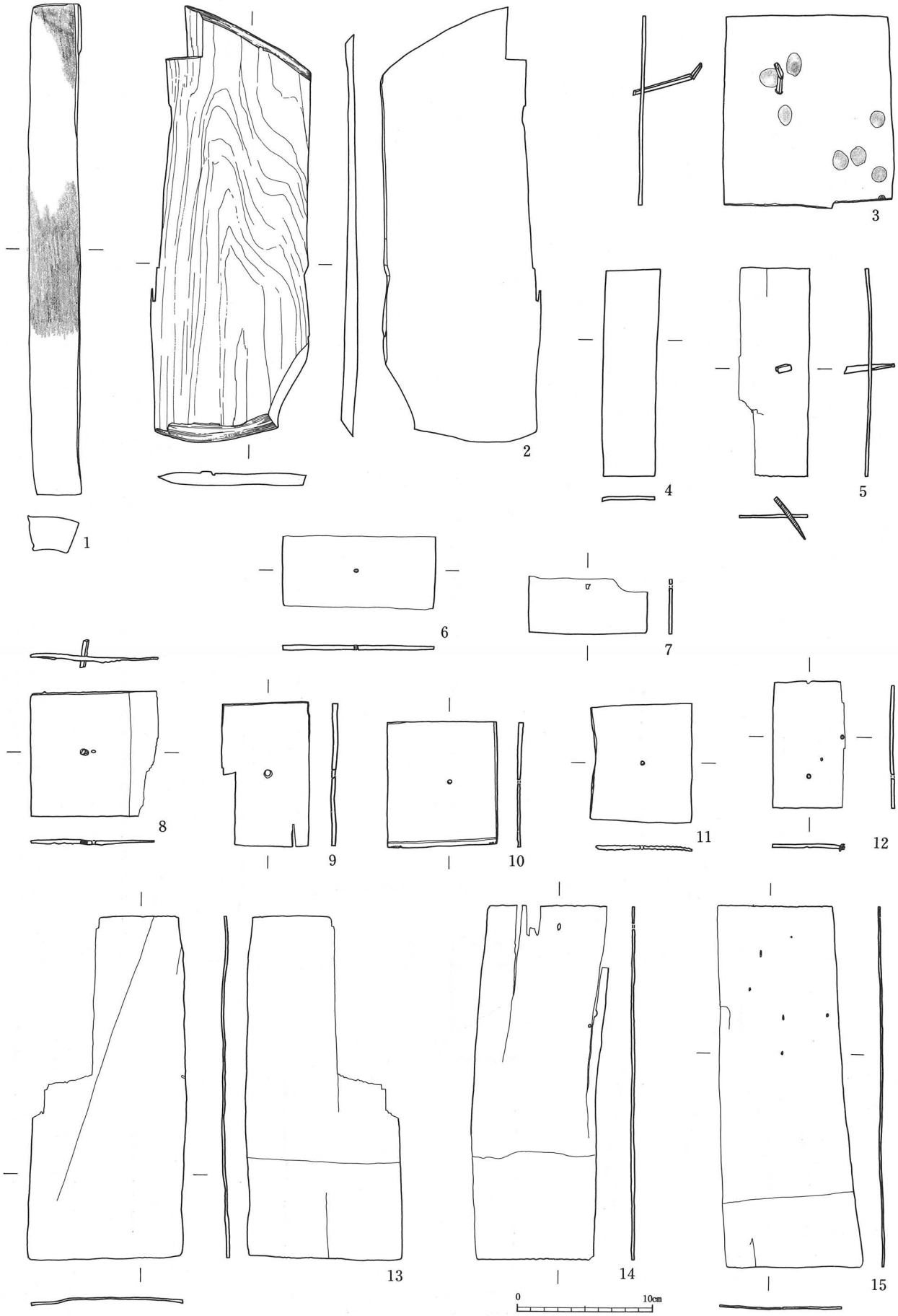


第21図　出土遺物(10)　木製品⑧

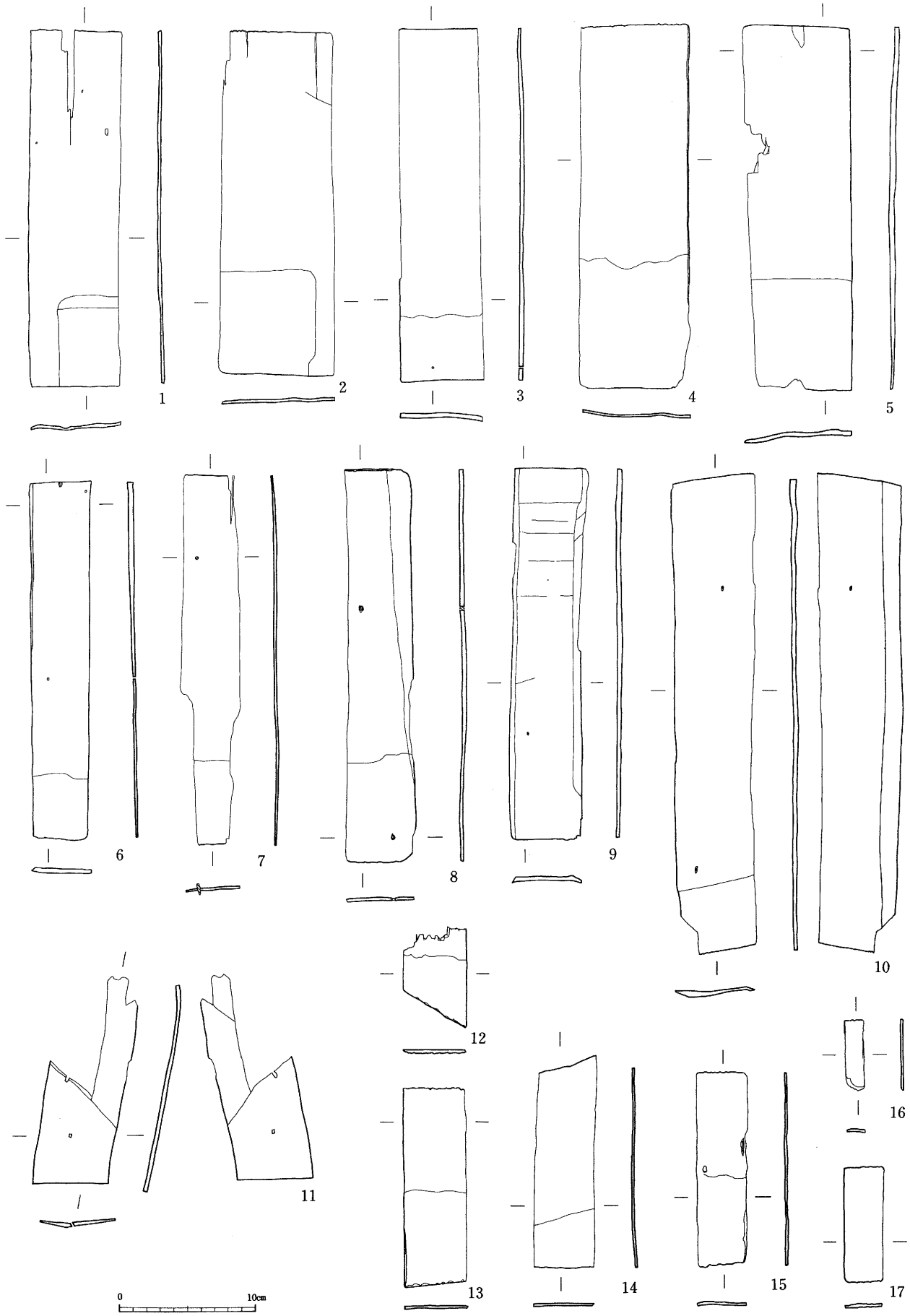
第22図　出土遺物(11)　木製品⑨



第23図　出土遺物(12)　木製品⑩



第24図　出土遺物(13)　木製品⑪



第25図　出土遺物(14)　木製品⑫

縄文土器

図版番号	遺物番号	トレンチ	遺構・基本層	器　種	時　期	特　　徴	写真番号
12－1	A1	3	SK1（埋土）	ミニチュア土器	晩期	【外】ミガキ・丹塗り　【内】丹塗り	19－1
12－2	A6	3	SK1（埋土）	不明	不明	【外】縄文・綾絡文	－
12－3	A5	3	V層	浅鉢？	晩期	【外】磨消縄文（LR）→沈線	19－2
12－4	A10	1	SR1	不明	後・晩期	【外】羽状縄文（LR・RL）	－
12－5	A9	3	SD1－A	深鉢	後・晩期	【外】縄文（LR）	－
12－6	A4	3	SK1（埋土）	不明	不明	【外】縄文（RL）	－
12－7	A3	3	SK1（埋土）	不明	後・晩期	【外】縄文（RL・結縛）	－
12－8	A8	3	SK1（埋土）	不明	不明	【外】縄文	－
12－9	A7	3	SK1（埋土）	浅鉢？	後・晩期	【外】赤彩、口唇部に刺突	－
12－10	A2	3	SK1（埋土）	不明	晩期	【外】縄文（LR・結縛）	19－3

土師器・須恵器・陶器

図版番号	遺物番号	トレンチ	遺構・基本層	種類	器種	法　量（mm）			型式・年代	特徴・調整など	写真番号
						口径	底径	器高			
12－11	C1	1	SR1（埋土）	土師器	坏	14.6	－	(35)	鬼高式	【外】口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ　【内】ナデ	19－4
12－12	C2	2	SR1（埋土）	土師器	甕	239	－	(85)	国分寺下層式	【外】口縁部：ヨコナデ、体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ 【内】ヘラミガキ	19－5
12－13	D1	2	SD－A1（埋土）	土師器	坏	148	－	(48)	表杉ノ入式	【外】ロクロ調整　【内】ヘラミガキ(横位)・黒色処理	19－8
12－14	D2	2	SR1（埋土）	土師器	坏	132	－	(36)	表杉ノ入式	【外】ロクロ調整　【内】ヘラミガキ(横位)・黒色処理	－
12－15	D16	2	SR1（埋土）	土師器	坏	－	60	(28)	表杉ノ入式	【外】ロクロ調整、体部下端：手持ちヘラケズリ、底部：回転糸切り　【内】ヘラミガキ(横位)・黒色処理(再酸化)	－
12－16	E24	4	Ⅲ層	須恵器	蓋	－	－	－	平安時代？	釦状つまみ、【外】ロクロ調整→回転ヘラケズリ 【内】ロクロ調整	19－7
12－17	E9	3	SD1－A（埋土）	須恵器	坏	－	62	－	平安時代	【外】ロクロ調整、底部：回転糸切り→底部～体部下端回転ヘラケズリ　【内】ロクロ調整	－
12－18	E1	1	SR1（埋土）	須恵器	甕	－	－	－	奈良以前？	【外】平行タタキ　【内】同心円文のオサエ	19－6
12－19	E17	1	SR1（埋土）	須恵器	壺or甕	－	－	－	奈良時代？	【外】平行タタキ　【内】格子状のオサエ	－
12－20	E2	4	SD1－B（埋土）	須恵器	壺？	－	－	－	古墳時代	【外】平行タタキ　【内】同心円文のオサエ	－
12－21	I3	5	粗掘	陶器	焙烙	－	－	－	18世紀以降	鉛釉	19－10
12－22	I2	2	SD1－A（埋土）	陶器	焙烙	－	－	－	18世紀以降	鉛釉、小型	19－11
12－23	I1	3	SD1－A（埋土）	陶器	擂鉢	－	－	－	近代	内外面鉄釉、外面に突帯1条、その上肥厚し口縁端部内湾 擂目密に入り単位確認できず	19－9

瓦

図版番号	遺物番号	トレンチ	遺構・基本層	器　種	法　量（mm）					特　　徴	写真番号
					幅	奥行	厚さ	小巴高	垂れ高		
13－1	H1	2	粗掘	軒桟瓦	(246)	(139)	19	86	43	小巴：連珠に左巻き三巴、垂れ：均整唐草？	19－14
13－2	H3	－	表採	軒桟瓦	(125)	(115)	18	－	(34)	垂れ：均整唐草？	19－13
13－3	H2	－	表採	軒桟瓦	(88)	(96)	20	(78)	－	小巴：連珠に左巻き三巴	19－12
13－4	F1	4	SD1－B（埋土）	丸瓦	－	－	23	－	－	玉縁、粗な布目、コビキB	19－16
13－5	F2	5	SD1－A（埋土）	丸瓦？	(55)	(61)	18	－	－	内面に密な布目	19－17
13－6	G3	4	I層	平瓦	108	89	20	－	－	凸面に櫛目（単位不明）	19－15

石製品・金属製品

図版番号	遺物番号	トレンチ	遺構・基本層	種　別	器種	法　量（mm）			特　　徴	写真番号
						長さ	幅	高さ		
13－7	N1	5	SD1－A（埋土）	銅製品	キセル	81	8	12	吸い口部分	19－18
13－8	K1	4	SD1－B（埋土）	石製品	砥石	96	47	27	使用面3面	19－20
13－9	K2	4	SD1－A（埋土）	石製品	硯	(32)	78	(14)	外面に漆残る（未製品ないし廃棄品）	19－19
13－10	K3	3	SD1－A（埋土）	石製品	硯石	(51)	78	27	切断痕あり（電動鋸？）	－

下駄

図版番号	遺物番号	遺構・層位	種　別	法　量（mm）			特　　徴	写真番号
				長さ	幅	高さ		
14－1	L1	SD1－B（埋土）	無歯下駄	219	86	29	鼻緒：前1木釘留め・後ろ不明の木釘留め、台表：い草貼り（鋲・木釘併用留め） 台裏：側面･前部に抉り	20－6
14－2	L3	SD1－B（埋土）	無歯下駄	210	84	23	鼻緒：前1・後ろ各2の木釘留め、台表：筵貼り（鋲・木釘併用留め） 台裏：側面に抉り・土踏まず部分に抉り	20－8
14－3	L2	SD1－B（埋土）	無歯下駄	225	87	26	鼻緒：前1・後ろ各2の木釘留め、台表：筵張り（木釘留め）、台裏：側面に抉り	20－11
14－4	L4	SD1－B（埋土）	無歯下駄	210	81	21	鼻緒：前1・後ろ各2の木釘留め、台表：筵張り（木釘留め）、台裏：側面に抉り	20－7
14－5	L5	SD1－B（埋土）	無歯下駄	(178)	82	23	鼻緒：前1・後ろ各2？の木釘留め、台表：筵張り（木釘留め）、台裏：側面に抉り	20－10
14－6	L6	SD1－B（埋土）	無歯下駄	204	86	21	鼻緒：前1・後ろ各2？の木釘留め、台表：不明（木釘留め）、台裏：側面･前部に抉り	－
15－1	L9	SD1－B（埋土）	無歯下駄	(172)	88	25	鼻緒：前1・後ろ1以上の木釘留め、台表：筵貼り（木釘留め）、台裏：側面に抉り	20－9
15－2	L14	SD1－B（埋土）	刳り下駄	(116)	57	14	鼻緒：前1孔大きい・後ろ不明、台裏土踏まず部分を直に抉り前部・後部？を削り出す	21－9
15－3	L7	SD1－B（埋土）	無歯下駄	(214)	74	23	鼻緒：前3（修理痕？）・後ろ各2の木釘留め・鼻緒接合部分に抉りあり 台表：不明（鋲・木釘併用留め）、台裏：側面に軽い抉り	20－5
15－4	L10	SD1－B（埋土）	無歯下駄	216	58	20	鼻緒：前3（修理痕？）・後ろ各1の木釘留め･鼻緒接合部分に抉りあり 台表：不明（木釘留め）、台裏：側面にごく軽い抉り	20－4

第4表　出土遺物観察表（1）

下駄

図版番号	遺物番号	遺構・層位	種　別	法　量（mm）			特　　徴	写真番号
				長さ	幅	高さ		
15－5	L11	SD1－B（埋土）	中折り下駄	237	66	16	鼻緒：不明、台表：不明（木釘留め？）、台裏：平坦	20－12
15－6	L8	SD1－B（埋土）	中折り下駄	242	76	18	鼻緒：前1・後ろ不明の木釘留め・鼻緒残存（2本縒りで軸を作りさらに1本（5本一組）を逆方向に巻く）台表：筵貼り（木釘留め）、台裏：平坦	20－13
16－1	L22	SD1－B（埋土）	差歯下駄	204	88	45	角形、台裏鼻緒穴の周縁に抉りがある	21－1
16－2	L16	SD1－B（埋土）	差歯下駄	218	113	50	長円形	21－7
16－3	L17	SD1－B（埋土）	差歯下駄	227	101	38	角形	21－2
16－4	L18	SD1－B（埋土）	差歯下駄	(145)	104	(31)	角形	21－8
16－5	L21	SD1－B（埋土）	差歯下駄	(124)	102	(20)	角形？	－
16－6	L15	SD1－B（埋土）	差歯下駄	191	76	59	長円形	21－6
16－7	L20	SD1－B（埋土）	差歯下駄	(68)	64	(24)	後鼻緒穴が後歯の前に位置する	21－5
16－8	L23	SD1－B（埋土）	下駄の歯	幅(66)	高63	厚12		21－3
16－9	L24	SD1－B（埋土）	下駄の歯	幅(82)	高52	厚11		21－4

木製品・端材

図版番号	遺物番号	遺構・層位	種　別	法　量（mm）			特　　徴	写真番号
				長さ	幅	高さ		
17－1	L57	SD1－B（埋土）	板材（木札？）	(110)	294	9	「…近江屋常三…屋…殿‥」の墨書あり、釘穴あり	20－2
17－3	L25	SD1－B（埋土）	汁杓子	(155)	(56)	16	凹面のみ赤漆、他全面黒漆、柄部切断再利用	－
17－4	L107	SD1－B（埋土）	ヘラ状木製品	254	22	5	先端を薄く削る	22－12
17－6	L105	SD1－B（埋土）	刃物の柄	119	26	9	断面楕円形、内面に茎の圧痕あり	－
17－7	L380	SD1－B（埋土）	傘の轆轤？	外径49	穴径18	高34	木釘を側面から差し込み、押さえに使っている	23－22
17－8	L27	SD1－B（埋土）	箸	(126)	7	5	断面五角形	－
17－9	L26	SD1－B（埋土）	箸	195	6	5	断面四角形	－
17－10	L29	SD1－B（埋土）	円盤状木製品	径70	－	8	中央に穿孔、片面に煤付着、側面に溝が切られている	22－20
17－11	L30	SD1－B（埋土）	円盤状木製品	径80	－	36	中央に不定形の穴、側面に2条の溝が切られ木釘が3本打ち込まれる	22－21
17－12	L55	SD1－B（埋土）	不明木製品	43	13	11	長方体の小型品	－
18－1	L56	SD1－B（埋土）	板状木製品	279	95	10	両端部に凹み、上部に釘穴	22－23
18－2	L31	SD1－B（埋土）	箱物	232	228	5	天板、周縁部に釘穴あり、片面周縁部を除き両面赤漆	－
18－3	L33	SD1－B（埋土）	箱物	(177)	69	9	片面のみ赤漆（接合部除く）、釘穴あり	22－25
18－4	L32	SD1－B（埋土）	膳？	306	(160)	7	隅切、上：周縁部を除き透け漆、下：脚部接着用の漆？あり、周縁釘穴あり	22－24
18－5	L35	SD1－B（埋土）	箱物？	207	33	4	側板、両端と側面に釘穴あり、中央に桜？の樹皮が通してある	22－22
18－6	L34	SD1－B（埋土）	箱物？	209	45	7	側板、下部に釘穴	－
18－7	L28	SD1－B（埋土）	刷毛	(82)	149	10	上部は漆で接着？、通し穴数多くあり	－
19－1	L42	SD1－B（埋土）	桶・樽	300	95	9	側板、板目、内外面縦方向・内面上下部に斜方向の削り、内面下部は切り曲げ	22－1
19－2	L50	SD1－B（埋土）	桶・樽	212	(35)	6	側板、柾目、外面縦方向の削り、内面上下部斜方向の削り	22－3
19－3	L49	SD1－B（埋土）	桶・樽	210	30	7	側板、柾目、外面縦方向の削り・タガ痕、内面上下部斜方向の削り・底板圧痕	22－4
19－4	L47	SD1－B（埋土）	桶・樽	135	48	8	側板、柾目、外面にタガ痕2条、内面下部に浅い凹み	－
19－5	L102	SD1－B（埋土）	桶・樽	207	65	10	側板、柾目、外面にタガ痕2条、内面下部に底板の圧痕	22－5
19－6	L46	SD1－B（埋土）	桶・樽	201	46	11	側板、板目、外面にタガ痕2条、内面下部に底板の圧痕	22－2
19－7	L43	SD1－B（埋土）	桶・樽	167	40	15	側板、柾目、外面にタガ痕2条、内面下部に底板の圧痕、上端部に丸みあり	22－7
19－8	L104	SD1－B（埋土）	桶・樽	176	65	8	側板、柾目、外面にタガ痕2条、内面下部に底板の圧痕	－
19－9	L45	SD1－B（埋土）	桶・樽	165	39	11	側板、柾目、外面にタガ痕2条、内面下部に底板の圧痕	22－6
20－1	L44	SD1－B（埋土）	桶・樽	135	39	11	側板、柾目、外面にタガ痕2条、内面下部に浅い凹み、上端部に丸みあり	22－9
20－2	L48	SD1－B（埋土）	桶・樽	(136)	21	7	側板、柾目、内面上部に削り	22－8
20－3	L38	SD1－B（埋土）	円盤状木製品	径202	－	13	周縁部面取り	22－14
20－4	L39	SD1－B（埋土）	円盤状木製品	径248	－	9		22－13
20－5	L41	SD1－B（埋土）	円盤状木製品	径270	－	11	墨痕あり、継ぎ手の釘穴2ケあり	22－16
20－6	L40	SD1－B（埋土）	円盤状木製品	径230	－	8	墨痕あり、周縁部変色	22－15
20－7	L68	SD1－B（埋土）	くさび状木製品	69	37	高17		21－12
20－8	L349	SD1－B（埋土）	くさび状木製品	113	48	高21		－
20－9	L36	SD1－B（埋土）	栓	191	広端径24	狭端径 9	墨痕あり	22－11
20－10	L37	SD1－B（埋土）	栓	(107)	広端径46	狭端径－		22－10
20－11	L110	SD1－B（埋土）	くさび状木製品	149	38	高21		－
20－12	L117	SD1－B（埋土）	くさび	229	58	高47	柱を止めるために打ち込むいわゆる「ヌキ」	21－10
21－1	L100	SD1－B（埋土）	板状木製品	712	(174)	8	板目	22－18
21－3	L98	SD1－B（埋土）	角杭	(612)	42	40	釘穴あり	23－14
21－4	L99	SD1－B（埋土）	平杭	846	68	22		23－15
21－5	L312	SD1－B（埋土）	廃材？	(820)	14	14	12cm間隔で釘穴あり、木釘残る	－
22－1	L101	SD1－B（埋土）	板状木製品	338	145	10	板目、片面に焦げあり	22－17
22－2	L297	SD1－B（埋土）	板状木製品	314	(73)	12	板目	－
22－3	L51	SD1－B（埋土）	板状木製品	216	(90)	6	板目	－
22－4	L53	SD1－B（埋土）	板状木製品	126	128	8	板目、端部1カ所三角形に肥厚	23－21
22－5	L342	SD1－B（埋土）	端材A	74	39	14	三角形、断面台形	－
22－6	L341	SD1－B（埋土）	端材A	－	径125	44	丸材	21－18
22－7	L377	SD1－B（埋土）	端材A	123	43	45	数寄屋造の柱の端材か（4寸角・樹皮を意図的に残す）	21－13
22－8	L331	SD1－B（埋土）	端材A	117	79	45		21－16
22－9	L339	SD1－B（埋土）	端材A	－	径78	23	丸材、墨打ちの跡あり	21－17
22－10	L353	SD1－B（埋土）	端材A	26	63	14	塗料？付着	－
22－11	L54	SD1－B（埋土）	板状木製品	86	50	10	板目、木札、径3㎜の貫通孔あり、焼き印あり	20－3
22－12	L118	SD1－B（埋土）	棒状木製品	285	37	16	先端が尖る	－
22－13	L116	SD1－B（埋土）	棒状木製品	262	径30	－	先端が尖る、樹皮が残る丸材	21－11

第5表　出土遺物観察表（2）

木製品・端材

図版番号	遺物番号	遺構・層位	種　別	法　量（mm）			特　　徴	写真番号
				長さ	幅	高さ		
22－14	L292	SD1－B（埋土）	割竹	241	20	4	先端が焦げる	－
22－15	L108	SD1－B（埋土）	割竹	(207)	25	4	ヘラ状、先端が丸くなる	－
22－16	L294	SD1－B（埋土）	割竹	181	42	2		23－25
22－17	L106	SD1－B（埋土）	割竹	(190)	20	3	先端が尖る	23－27
23－1	L296	SD1－B（埋土）	竹	265	径26	4	先端が尖る	23－24
23－2	L295	SD1－B（埋土）	竹	299	径24	3		23－23
23－3	L293	SD1－B（埋土）	割竹	193	39	4		23－26
23－4	L288	SD1－B（埋土）	割竹	58	40	4		23－36
23－5	L282	SD1－B（埋土）	割竹	58	29	3		23－30
23－6	L287	SD1－B（埋土）	割竹	62	47	5		23－35
23－7	L284	SD1－B（埋土）	割竹	63	58	5		23－32
23－8	L283	SD1－B（埋土）	割竹	60	19	3		23－31
23－9	L285	SD1－B（埋土）	割竹	97	28	1		23－33
23－10	L286	SD1－B（埋土）	割竹	99	35	1		23－34
23－11	L291	SD1－B（埋土）	割竹	97	10	1		－
23－12	L279	SD1－B（埋土）	竹釘？	88	5	3		－
23－13	L52	SD1－B（埋土）	竹釘？	135	7	3		23－28
23－14	L96	SD1－B（埋土）	端材B	182	128	20		21－19
23－15	L220	SD1－B（埋土）	端材B	182	62	13		23－12
23－16	L89	SD1－B（埋土）	端材B	183	117	17		－
23－17	L90	SD1－B（埋土）	端材B	70	117	18		21－15
23－18	L97	SD1－B（埋土）	端材B	142	159	20		21－20
23－19	L236	SD1－B（埋土）	端材B	97	65	10		21－14
24－1	L329	SD1－B（埋土）	端材B	360	38	28	焦げ	23－13
24－2	L95	SD1－B（埋土）	端材B	317	116	10		－

ヘギ板

図版番号	遺物番号	遺構・層位	釘　穴　数（うち残存釘数）	木目状況	法　量（mm）				特　　徴	写真番号
					長さ	幅	高さ	風化部分長		
17－2	L59	SD1－B（埋土）	－	密	232	(63)	3	－	「須賀神社」の墨書あり	20－1
17－5	L120	SD1－B（埋土）	－	密	(183)	12	2	－	弧状に湾曲	22－19
21－2	L87	SD1－B（埋土）	－	密	514	40	2	－		－
24－3	L60	SD1－B（埋土）	1（1）	密	142	126	2	－	片面にシミあり、竹釘長55mm	23－18
24－4	L77	SD1－B（埋土）	－	密	153	41	3	－		－
24－5	L63	SD1－B（埋土）	1（1）	密	153	(52)	2	－	残存竹釘長40mm	23－16
24－6	L66	SD1－B（埋土）	1（1）	密	112	(54)	3	－	中央に釘穴あり	－
24－7	L146	SD1－B（埋土）	1（－）	密	88	(41)	2	－	中央に釘穴あり	－
24－8	L61	SD1－B（埋土）	2（1）	密	(95)	92	3	－	残存竹釘長21mm	23－17
24－9	L64	SD1－B（埋土）	1（－）	密	107	64	4	－	中央に釘穴？	－
24－10	L65	SD1－B（埋土）	1（－）	密	93	82	3	－	端部に圧痕あり	23－20
24－11	L62	SD1－B（埋土）	1（－）	密～中	87	75	3	－	中央に釘穴あり	23－19
24－12	L148	SD1－B（埋土）	4（1）	中	93	(53)	2	－	中央に釘穴あり	－
24－13	L80	SD1－B（埋土）	－	密	251	115	2	72	斜行する圧痕あり	23－1
24－14	L74	SD1－B（埋土）	2（－）	密	260	92	2	78		23－3
24－15	L76	SD1－B（埋土）	6（－）	密～中	265	101	2	56	やや歪む	23－2
25－1	L75	SD1－B（埋土）	3（－）	密	262	(67)	2	67		23－4
25－2	L70	SD1－B（埋土）	－	密	253	(85)	2	76		23－5
25－3	L82	SD1－B（埋土）	1（－）	密	261	(61)	3	49		23－10
25－4	L85	SD1－B（埋土）	－	中	(268)	(81)	2	89		23－6
25－5	L86	SD1－B（埋土）	－	密～中	267	(79)	4	82		－
25－6	L78	SD1－B（埋土）	－	密	264	(46)	3	49		23－9
25－7	L123	SD1－B（埋土）	－	密	271	(43)	2	62		－
25－8	L83	SD1－B（埋土）	2（－）	密～中	288	(51)	3	79		23－7
25－9	L79	SD1－B（埋土）	1（－）	密	273	54	4	－		23－11
25－10	L84	SD1－B（埋土）	2（－）	密	350	(62)	5	51	斜行する圧痕あり	23－8
25－11	L127	SD1－B（埋土）	1（－）	密	152	(57)	3	－		－
25－12	L166	SD1－B（埋土）	－	中	(73)	(47)	3	49		－
25－13	L141	SD1－B（埋土）	－	密	146	47	2	76		－
25－14	L152	SD1－B（埋土）	－	密	155	(45)	2	43		－
25－15	L143	SD1－B（埋土）	1（－）	密	144	(38)	2	56		－
25－16	L160	SD1－B（埋土）	－	密	(52)	14	2	－		－
25－17	L149	SD1－B（埋土）	－	中	85	(29)	3	－		－

第6表　出土遺物観察表（3）

Ⅵ　まとめ

１．遺構について

遺構については、年代を特定できるものについて、簡略に述べることにする。

（１）20世紀以降：ＳＤ１－Ａ堀跡

ＳＤ１－Ａの上端は、前述したように、昭和25～26年の官舎建設工事整地の折に、切岸によって形成されたものであろう。

（２）近世－19世紀代：ＳＤ１－Ｂ堀跡

ＳＤ１－Ｂの年代は、底面から大堀相馬白濁釉陶器が、最下層中から19世紀代の瀬戸美濃陶器が出土しており、概ね19世紀以降と理解される。また、文化・文政期に出現する無歯下駄（草履下駄）も出土しているが、これとも矛盾しない。次に下限の問題である。前宮城刑務所職員佐藤正治氏、宮城刑務所職員柴修也氏からは、集治監時代に所内で木工等の労働が行われ、その端材が投棄された可能性についてのご指摘もいただいている。しかし、ＳＤ１－Ｂからは、近代に下る陶磁器他の遺物は一切出土していない。出土遺物からみて近世の枠内に収まるものと考えられる。

（３）10世紀中葉～13世紀以前：ＳＤ５溝跡

ＳＤ５は、灰白色火山灰を多量に含むⅣ層上面の遺構である。５トレンチⅢ層中からは、13世紀代の龍泉窯系無文青磁碗が出土しているので、下限は13世紀以前として理解される。

（４）平安時代（10世紀中葉以降）：ＳＤ３溝跡、ＳＫ２～ＳＫ６土坑

ＳＤ３は、Ⅳ層上面検出である。Ⅳ層は層中に10世紀前半代に降下したと見られる灰白色火山灰を二次堆積として含むことから、ＳＤ３は10世紀中葉以降のものと考えることができる。出土遺物は、最新でロクロ土師器と赤焼土器坏と思われる小片である。ＳＫ２～ＳＫ６は、Ⅲb層上面で確認した。出土遺物は、最新でロクロ土師器と赤焼土器坏かと思われる小片である。ＳＤ３の下限は４トレンチⅢb層堆積以前、ＳＫ２～ＳＫ６の下限はⅢa層堆積以前であるが、この４トレンチⅢ層（Ⅲa層・Ⅲb層一括取り上げ）の最新の遺物はロクロ土師器であり、128点の出土遺物に中世以降のものを含まない点、５トレンチⅢ層と年代的に一致するか疑問が残る。よって、概ね中世に下らない遺構として考えたい。

（５）平安時代～灰白色火山灰降下以前：ＳＲ１河川跡、ＳＫ１土坑

ＳＲ１から出土した遺物のうち、最新のものはロクロ土師器である。２トレンチでは、ＳＲ１はⅣ層に覆われており、Ⅳ層堆積以前に埋没した河川跡である。堆積土にも灰白色火山灰が全く見られないため、概ね９世紀代の河川跡と思われる。ＳＫ１は、Ⅴ層上面で確認したが、３トレンチはⅤ層の隆起が見られ、また上位の基本層の削平が著しいため、より上位より掘り込まれているものと推測される。出土遺物は21点で、縄文土器が多いが最新のものはロクロ土師器である。Ⅳ層との関係は不明であるが、概ね平安時代としたい。

（６）年代不明：ＳＤ４溝跡、ＳＤ６溝跡、ＳＫ７土坑

その他の遺構は年代が絞りきれなかった。ＳＤ６は５トレンチⅡ層上面で確認し、ＳＤ１－Ａに切られるが、Ⅱ層について堆積年代が不明であり、結論づけられなかった。ＳＤ４については、本来の確認面が後代の削平によって失われている可能性がある。規模・方向・形状ともにＳＤ３に似るが、出土遺物もないため不明である。ＳＫ７は、ＳＤ１－Ａ底面での検出で出土遺物もないことから、これも不明である。

２．出土遺物について

ここでは木製品に関して、分類と若干の類例紹介をしたい。木製品は、すべてＳＤ１－Ｂからの出土である。年

代に関しては、層位的な取り上げをしていないため厳密ではないが、最下層より19世紀代の瀬戸美濃製品が、底面より大堀相馬白濁釉製品が出土しており、概ね19世紀代と考えられる。

（1）下駄

下駄は、ＳＤ１－Ｂより19点出土している。Ａ～Ｅの５類に大別される。

Ａ類：歯を持たない無歯下駄、いわゆる草履下駄のうち台裏側面と土踏まず部分が抉られる一群である。７点ある。なお、これらは鼻緒の留め方にも共通点がある。前鼻緒は大きめの木釘１本、後鼻緒は小型の木釘を２本打ち込み留めている。Ａ類は、台表に貼られるものの接合方法によって、さらに２類に細分される。

◎ＡⅠ類：主として鼻緒留めの木釘と鋲で留められるものである。台表に貼られるものの種類で、さらに２類に細分される。

○Ⅰa類：４枚の薄い板を骨とし、これにい草を巻いたもの。【Ｌ１】

○Ⅰb類：稲藁製の表を貼り付けたもの。【Ｌ３】

◎ＡⅡ類：主として鼻緒留めの木釘と、それを補い小型の木釘で貼り付け、鋲が用いられていないもの。【Ｌ２・Ｌ４・Ｌ５・Ｌ６・Ｌ９】

Ｂ類：歯をもたない無歯下駄であるが、台裏が扁平なものである。２点ある。これらは、Ａ類と異なり、台表の鼻緒接合部分が凹面となる。台表には遺存してはいないが、鋲痕や細かな木釘が打ち込まれた小孔があるため、Ａ類同様何か貼られていたものと思われる。この２点は、その台表の貼り物の留め方と台裏の形状で異なりを見せる。

◎ＢⅠ類：台表の貼り物の接合に鋲が用いられている。台裏側面にはごく軽い抉りが入る。【Ｌ９】

◎ＢⅡ類：台表の貼り物の接合が木釘で行われている。台裏側面に抉りが入らず全く扁平である。【Ｌ14】

Ｃ類：いわゆる「中折り下駄」ないし「中切下駄」と呼ばれるものである。歯を持たないが台が前部・後部よりなり、貼り物と鼻緒でそれらを一体化する。２点ある【Ｌ８・Ｌ11】。Ｌ８には稲藁製の貼り物が残存する。Ｌ11の貼り物は不明である。Ｌ８は鼻緒がついた状態で出土した（整理作業中に破損）。鼻緒は２本を右巻きに捻って芯とし、次に１本を逆方向に巻いている。

Ｄ類：歯を持つが台と歯が一体化しており、連歯状の下駄である。１点ある【Ｌ14】。前の方が残存し、前鼻緒の穴が大きく空けられている。台表に黒漆、台裏凹部に赤漆が微かに残存する。

Ｅ類：台と歯が分離した差歯下駄である。いずれも台に穴を空けることなく接合しており、「陰卯差歯下駄」と呼ばれるものである。７点ある。後鼻緒の位置により２類に細分される。

◎ＥⅠ類：後鼻緒孔が、後歯よりも前に位置するものである。１点ある【Ｌ20】。歯は残存せず圧痕のみが残る。後部のみの出土で、法量が小さい。

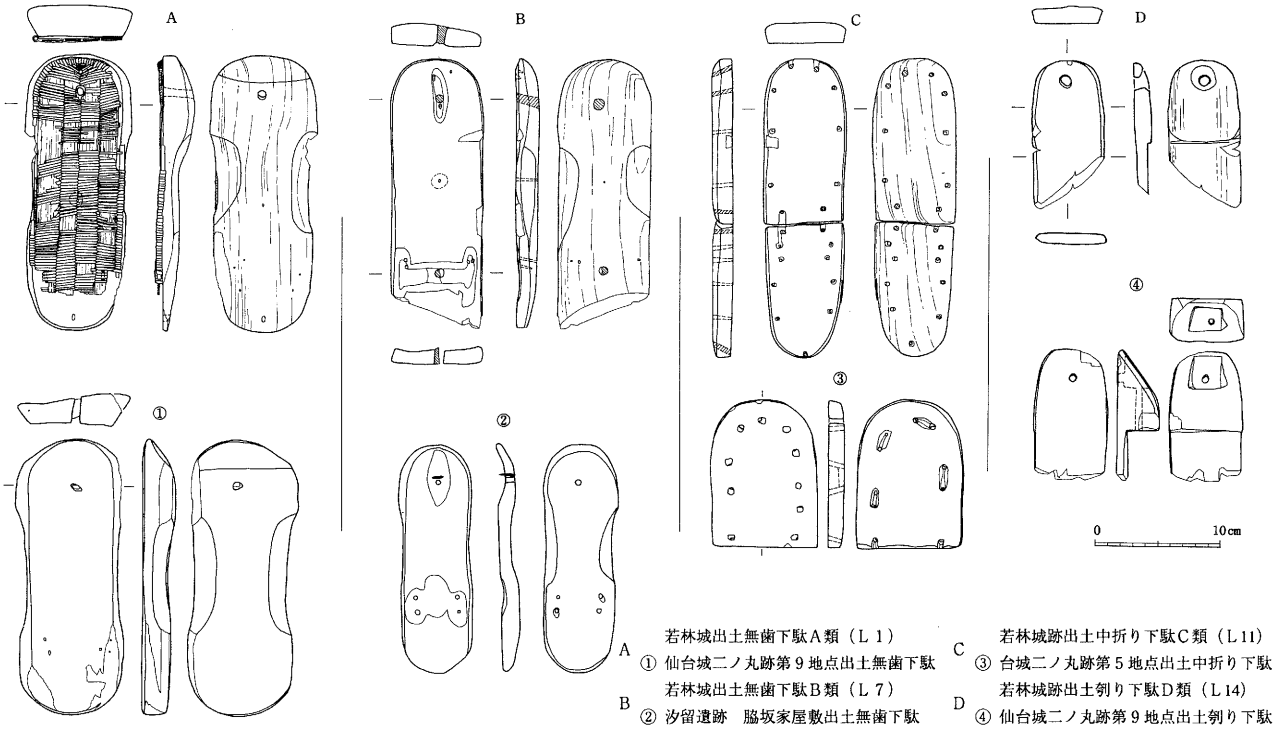
◎ＥⅡ類：後鼻緒孔が、後歯よりも後ろに位置するものである。６点ある。台の形状により、さらに２類に細分される。

○Ⅱa類：台の形状が、概ね角形の物である。【Ｌ17・Ｌ18・Ｌ22】

○Ⅱb類：台の形状が、丸みを帯び長円形を呈する物である。【Ｌ15・Ｌ16　※Ｌ20もⅡb類か】

第26図は、他遺跡の出土下駄と本調査の出土下駄の主なものを比較したものである。

Ａ類の類例としては、①仙台二ノ丸跡第９地点１号池出土資料（東北大埋蔵文化財センター：1997※以下、東北大）がある。１号池の年代は19世紀中葉とされる。①の資料は台表の貼り物が存在していないが、台の形状などから、Ａ類の類例と考えられる。報文によれば、鼻緒の接合について前は穴に通すと想定（東北大：1998）されているが、本調査のものには太めの木釘が残存している。市田京子氏によれば、草履下駄は文化文政期以降に出現（市田：2000）するとされている。



第26図　出土下駄の比較

B類の類例としては、第26図②汐留遺跡脇坂家屋敷出土資料（東京都埋蔵文化財センター：1997）がある。年代は、19世紀出現とされている。

C類の「中折り下駄」の類例のうち、第26図には③仙台城二ノ丸跡第5地点出土資料（東北大：1993）を掲載した。市田氏によれば、中折り下駄は寛政年間出現（市田：2000）とされるが、第5地点出土資料は元禄年間のもので、これを遡る資料である。本調査資料よりも身幅があり、表に貼り付けられたものの留め方も異なるようで、本調査出土のものと形態的に異なっている。

D類は、構造としては「歯の一部もしくは全部が台裏から独立しない形式の『刳り下駄』」（古泉：1987）に分類される。本調査資料は傷みが激しく裏面もかなり減っているが、遺存状況の良いものに、仙台城二ノ丸跡第9地点出土刳り下駄がある。(第26図④)

E類の陰卯差歯下駄は、L20以外全て後緒穴の位置が後歯よりも後ろ側にある。L20は法量も他のものに比べて小さく、比較検討の対象としてはふさわしくない。近世の下駄がまとまって出土している東北大二ノ丸跡では、元禄年間を境として後歯の後ろ側に位置するものが増え、18世紀後葉にはそれに一元化されている（東北大：1998)。19世紀代と目される本調査資料も、二ノ丸跡の出土状況と矛盾しない。台の形状については、二ノ丸跡ではいずれの時期においても長円形と角形が併存しているとされている（東北大：1998)。

（2）円盤状木製品

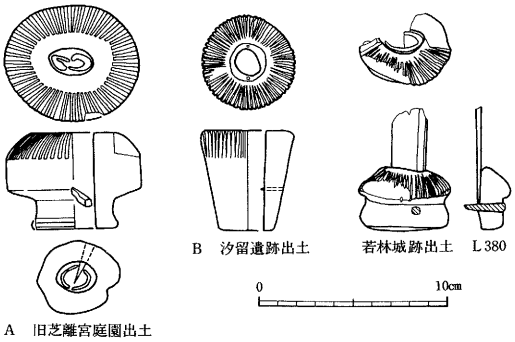
6点ある。円盤状木製品としたものには、桶の底板・樽の天板や底板・蓋物等が考えられるが、用途が特定できないため、円盤状木製品として一括した。

L29は、径が小さく、片面には煤が付着している。側面をみると溝が切られており、以上の形態的特徴から提灯の底板の可能性が指摘できる。煤付着側が内面と思われる。

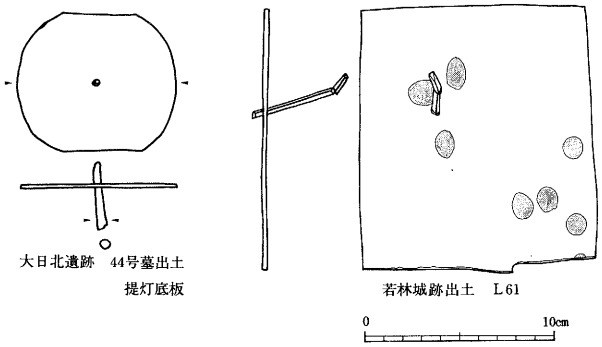
L38は、径に比して比較的厚手である。片側端部が削り取られ面取りが施してある。

L39には、段が見られ、そこから破損している。横木が接合されていた可能性があり、蓋物と考えられる。

L40は、片面の縁に7～8㎜の一様な変色部がめぐりこれも蓋物と思われる。変色部側が内面で、墨痕が残る側が外面になる。



第27図　傘の轆轤の比較



第28図　大日北遺跡出土提灯床板とヘギ板（L61）

L41は最も径が大きく270㎜程度と推定される。片側に墨書を残す（文字不明)。側面には釘穴のような小孔が二つあり、接合されていたと思われる。

L30は、中央に不定形に穿孔されており、何か芯棒のようなものに通されていたと思われる。片面には墨？が打たれている。断面には２条の細い溝があり、木釘が打ち込まれている。

（３）桶・樽の側板

11点ある。形状から３類に大別される。

A類：内面上部に削りが入るもの。７点ある【L42・L45・L46・L48・L49・L50・L104】。

B類：内面上部に削りが入らないもの。５点ある【L47・L102】。

C類：断面において、上端が丸みを帯びるもの。２点ある【L43・L44】。

ほとんどのものは、外面にタガ痕が観察される。縦方向のケズリ痕が残る物もある。内面については、桶の製造段階で底板を固定するのに行われる「榑の切り込み」(成田：1996）の痕跡は看取できない。鋭角なものではないが、わずかに底板付近に凹みが見られるものもある。A類の内面上部の斜方向の削り込みについては、蓋を載せるのではなく、受けるためというようなことも推測できよう。L42については、身幅があるためか内面下部に、曲物を製造する際に行われる「切り曲げ」(成田：1996）のような技法が取られている。

（４）傘の轆轤

L380は、和傘の轆轤と考えられるものである。第27図に類似資料を２点掲載した。本資料も含めて、上部に細かい切り込みが入れられている。また側面には小さな木釘が差し込まれている。なお、旧芝離宮庭園では、この側面の木釘が伴わないものも出土している。

（５）竹

一定の長さに切りそろえた割竹である。長さ２寸程のものと３寸程のものがある。用途等不明である。２寸程のものがL282・L283・L284・L288で、これよりやや長い物でL287がある。３寸程のものにL285・L291がある。

（６）ヘギ板

厚さ２～３㎜の柾目の材をヘギ板と総称した。216点出土し木製品のうち最も出土量が多い。大半は破損が著しく遺存状況の良いものを図示した。図示資料は31点である。形態から２類に分けられる。

A類：ほぼ正方形のもの。中央付近に穿孔がみられ大きめの竹釘が刺さったままのものもある。

B類：長方形のもの。竹釘の穴や竹釘を残すものも見られる。片面に風化面を持つものもある

A類の類例として、多賀城市大日北遺跡出土の提灯板（第28図）がある。形状は円形・隅丸正方形に大別されるが、総じて丁寧に作られている。出土資料は、端部の調整も行われておらず粗製のものである。L61は他に比して法量が大きいが、蝋の痕跡か点状にシミが見られる。

B類には「こけら」の可能性をもつものが含まれる。武藤正幸氏に鑑定していただき、L82・L84・L123につ

いては竹釘の跡と風化面の痕跡から「こけら」の可能性を指摘された。B類の法量は、長さがほぼ240㎜～280㎜の範囲に収まるが、一部長い物と極端に短い物がある。長い物は総じて身厚である。破損品が多い中、L80は本来の幅を残していると観られ、115㎜を測る。また、L59は「須賀神社」の墨書がみられ木札類と考えられる。

なお、ヘギ板観察表に設けた「木目」欄で、「密」とされているものは完全な柾目材である。「密～中」「中～粗」としたものは、柾目から板目へ移行する様子を現している。

（7）端材

木製品の製作工程ないし構造物の建築の際に排出されたと考えられるものを端材と一括した。このうち、観察表に「端材A」としたものは、木製品の製作や建築に関わると考えられるものである。このうち、L377は4寸角の材で樹皮を意図的に残している点などから数寄屋造りに関するものではないかとの指摘をいただいている。

「端材B」としたものは、排出過程が不明のものである。法量には大小あるが、総じて木を斜方向に切断し、その後柾目方向に木をへいでいるように観察される。

3．若林城について

若林城は、寛永4（1627）年、政宗の「屋敷」新築の願いを許可する旨の2月23日付「老中奉書」を受け築城されたものである。ところが工事は難航し、翌寛永5（1628）年5月には大雨によって「北之土居又破損之由候」[注34]というようなこともあった。この際も政宗は、名取・国分・宮城中の茅を刈り、土居の高さに応じて土一重、茅一重というように念入りにつき固めるよう事細かに指示している[注35]。築城成り、落成移徒の儀が執り行われたのは、寛政5年11月16日のことである。

城の規模は、「政宗記」には「屋敷を三町四方に取立」とある。若林城跡は、東西370m・南北290m程で、これに堀がめぐる。城の外郭は、「政宗記」にいう「弘さ（ママ）三十間の堀」・「二丈餘尺の土手」で囲まれ、北・東・西の三方に虎口があった。虎口部分の土塁は鍵形に屈曲し、それぞれ桝形状の形状をもっていたことが分かる。大手は「街道に近い西門であった」と推定されている（菅野：1996）。また、北西・北東・南・南西の4カ所には張り出しがある。このうち、南西の張り出しについては、表現されている絵図といない絵図がある（第31図）。表現されている絵図としては、管見の限りでは宝暦7（1757）年～明和3（1766）年「仙台城下絵図」、安永元（1772）年～同7（1778）年「仙臺地圓」があるだけだが、築城当初からのものと考えられるであろう。若林城内の様子については、政宗の若林城普請に関する指図である寛永7（1627）年の「若林普請覚書」（市史：1995b）がある。これによれば、若林城内には庭園や的場が設けられ「御山里」と呼称されていたこと、その一角（の土手）には石垣が積まれていたことが分かる。また、「東奥老士夜話」[注36]によれば、北に築山、東南の隅には櫓があったという。第31図に掲載した若林御薬園の墨書が見える「御修覆帳」は、文化12（1815）～14（1817）年の補筆が推定されているものである。この頃までは若林御薬園の存続が確認できる。

若林城内は過去2回の発掘調査が行われている。1次調査では、中世から近世初期の幅におさまる可能性が大きい掘立柱建物跡と角柱痕跡を有するピット等を検出している（田中：1985）。2次調査では、平瓦が出土した土坑を検出し、若林城に関わる遺構として理解されている。他に、珠文帯左巻軒丸瓦・志野織部碗？が遺構外から出土している（佐藤甲二：1986）。

本調査で検出した基本層5トレンチⅢ層については、堆積年代が中世に下るもので、標高は11.4mである。これに対して当調査区の北側に隣接する南小泉23次調査区では、遺構検出面が14.5mであり、本調査Ⅲ層に対する比高差3.1mを測る。これは堀跡部分が元来旧河道起源の凹地で、この自然地形を生かした縄張りが行われたことを推測させるものである。なお、第29図に示したように、城の南には、「五谷」・「五ツ谷」といった谷地形に関わる旧字名が存在する。これらから、若林城は旧河道に挟まれた部分に築城したものと推測される[注37]。

4．結び

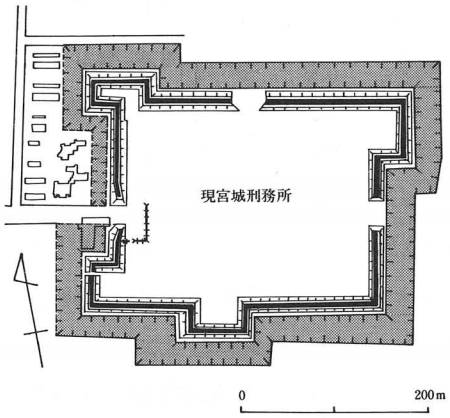
（1）若林城跡は広瀬川北岸に形成された標高11～14mの自然堤防上に立地する。今回の調査は若林城跡北辺堀跡の北西部で行われた。

（2）道路拡幅建設工事に関わる遺跡地内の約370㎡を調査し、若林城跡の堀跡の一部を確認した。他の検出遺構には、溝跡４条・河川跡１条・土坑７基がある。

（3）堀跡は、形状・出土遺物からＡ・Ｂに分け調査を進めたが、城廃絶後の堀埋没過程での19世紀以降から宮城刑務所官舎建設の間における堀の状況の一端が窺われた。堀跡出土の木製品類等は外からの一括廃棄物である。江戸時代後期から終わりにかけての生活品類の出土は貴重な資料となりうる。

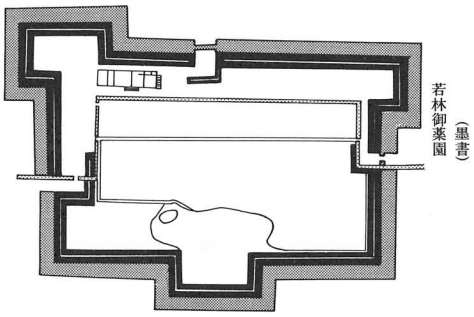
若林城跡の堀は極めて巨大なもので、現況確認でも堀北辺部から土塁基底部まで25m前後の幅を有する。今回の調査は堀跡の部分的な調査に留まり、堀本来の形状や深さなどは不明となっている。今後の調査に期待するものが大きい。

第29図　若林城周辺旧字名
（原図：田中1999）

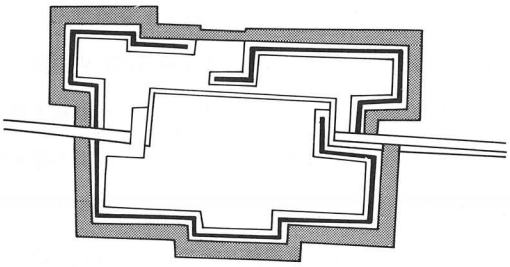


第30図　若林城跡概要平面図
（藤沼邦彦ほか1981）

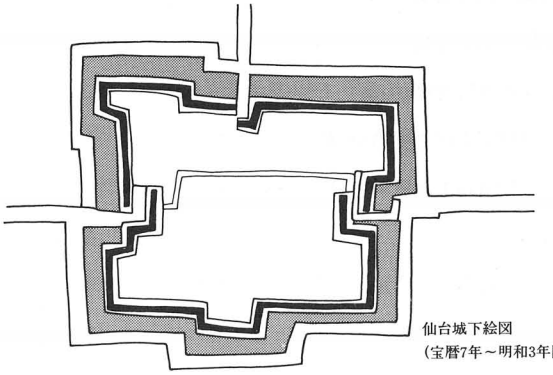
（※絵図面をトレース、黒線は土塁、アミは堀部分）



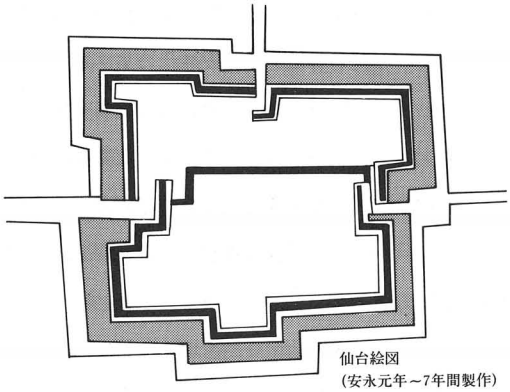
御修復帳｛作製年：寛文12・延宝8・貞享3・元禄11年
補筆年：（推定）文化12～14年｝



安政補正改革仙府絵図
（安政3年～6年間製作）



仙台城下絵図
（宝暦7年～明和3年間製作）



仙台絵図
（安永元年～7年間製作）

第31図　若林城跡各絵図

引用・参考文献（五十音順）

飯村　均（1997）：「中世食器の地域性　［2］東北南部」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

五十嵐康洋（1995）：『南小泉遺跡　第25次調査報告書』仙台市文化財報告書第196集

五十嵐康洋（1998）：『南小泉遺跡　第26次調査報告書』仙台市文化財報告書第225集

石村真一（1997）：『ものと人間の文化史82　桶・樽』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ法政大学出版会

市田京子（2000）：「江戸時代の下駄」　江戸遺跡研究会『江戸文化の考古学』吉川弘文館

伊東信雄（1937）：「仙台城下町人町の商業特権の変遷」　『仙台郷土史の研究』宝文堂

伊東信雄（1952）：「仙台馬市の起源」　『仙台郷土史の研究』宝文堂

井上喜久男（1992）：『尾張陶磁』ニューサイエンス社

小川淳一（1980）：「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集

沖野小学校（1982）：『沖野の郷土史』

奥津春生（1973）：『大仙台圏の地盤と地下水』宝文堂

金森安孝・稲葉俊一（1992）：『南小泉遺跡　第21次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第164集

金田章裕（1993）：『微地形と中世村落』吉川弘文館

菅野正道（1993）：「『国分盛重』と国分氏の滅亡」　『仙台郷土研究』復刊18巻２号

菅野正道（1995）：「秋田県公文書館所蔵『国分文書』」　『市史せんだい』vol. 5

菅野正道（1996）：「政宗の『隠居所』若林城」　『歴史群像名城シリーズ13　仙台城』学研

菊地逸夫・佐々木茂槇（1983）：『南小泉遺跡』宮城県文化財調査報告書第94集

木村孝文（1999）：『若林の散歩手帖』宝文堂

旧芝離宮庭園調査団（1988）：『旧芝離宮庭園　浜松町駅高架式歩行者道架設工事に伴う発掘調査報告』

工藤信一郎・渡部紀・根本光一（1998）：『南小泉遺跡　第30・31次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第226集

工藤哲司（1991）：『南小泉遺跡　第20次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第153集

黒沢泰輔（1963）：『陸奥国分寺』国分寺

小泉和子（1980）：『日本史小百科　家具』東京堂出版

小泉和子（1999）：『道具と暮らしの江戸時代』吉川弘文館

小泉和子（2000）：「くらしの中の桶と樽」　小泉和子編『桶と樽－脇役の日本史』法政大学出版会

古泉　弘（1987）：『考古学ライブラリー48　江戸の考古学』ニューサイエンス社

小林清治（1996）：「仙台城築城－青葉の名城誕生す」　『歴史群像名城シリーズ13　仙台城』学研

斎野裕彦（1994）：『南小泉遺跡　第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財発掘調査報告書第192集

佐藤　淳（1990）：『南小泉遺跡　第19次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第141集

佐藤甲二（1985）：『南小泉遺跡　第12次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第80集

佐藤甲二（1986）：『若林城跡－平安時代の集落跡－』仙台市文化財調査報告書第90集

佐藤　洋（1987）：『南小泉遺跡　第14次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第109集

佐藤　洋（1990）：『南小泉遺跡　第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集

佐藤　洋（1997）：『養種園遺跡発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第214集

汐留遺跡調査会（1996）：『汐留遺跡－汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書－』

七郷の今昔を記録する会（1993）：『ふるさと七郷－もうひとつの仙台－』仙台市七郷市民センター

紫桃正隆（1974）：『史料仙台寮内古城・館』第四巻宝文堂

柴　修也（1990）：『西南戦争余話』非売品

仙台市史編纂委員会（1950）：『仙臺市史　第３巻　別篇１』
仙台市史編纂委員会（1953）：『仙臺市史　第７巻　別篇５』
仙台市史編纂委員会（1954）：『仙臺市史　第１巻　本篇１』
仙台市史編纂委員会（1994ａ）：『仙台市史　特別編１　自然』
仙台市史編纂委員会（1994ｂ）：『仙台市史　資料編10　伊達政宗文書Ⅰ』
仙台市史編纂委員会（1995ａ）：『仙台市史　特別編２　考古史料』
仙台市史編纂委員会（1995ｂ）：『仙台市史　資料編１　古代中世』
仙台市史編纂委員会（1996）：『仙台市史　資料編２　近世１　藩政』
仙台市史編纂委員会（1999）：『仙台市史　通史編１　原始』
仙台市史編纂委員会（2000）：『仙台市史　通史編２　古代中世』
鈴木公雄（1999）：『出土銭貨の研究』東京大学出版会
武田健市（1998）：『大日北遺跡－近世墓の調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第49集
田中則和（1985）：「若林城跡」『年報６』仙台市文化財調査報告書第83集
田中則和（1997）：「宮城県南小泉遺跡」　『東北の貿易陶磁貿易陶磁研究集会平泉大会資料』日本貿易陶磁研究会
田中則和（1999）：「一地域における中世から近世へ－南小泉遺跡と養種園遺跡（一）－」　『六軒丁中世史研究』第六号
田中則和（2000）：「一地域における中世から近世へ－南小泉遺跡と養種園遺跡（二）－」　『六軒丁中世史研究』第七号
東京都埋蔵文化財センター（1997）：『汐留遺跡Ⅰ－旧汐留貨物駅跡地内の調査－』東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集
東北大学埋蔵文化財調査研究センター（1993）：『東北大学埋蔵文化財調査年報　６』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター（1997）：『東北大学埋蔵文化財調査年報　８』
東北大学埋蔵文化財調査研究センター（1998）：『東北大学埋蔵文化財調査年報　９』
日本美術刀剣保存協会宮城県支部（1973）：『仙臺藩刀匠銘譜』
成田壽一郎（1996）：『曲物･箍物』理工学社
原田多加司（1999）：『檜皮葺と柿葺』学芸出版社
藤沼邦彦ほか（1981）：『日本城郭大系第三巻　山形　宮城　福島』新人物往来社
藤原相之助（1939ａ）：「仙臺郷土研究としての國分ものがたり（一）」　仙臺郷土研究会『仙臺郷土研究』第十巻第八號
藤原相之助（1939ｂ）：「仙臺郷土研究としての國分ものがたり（二）」　仙臺郷土研究会『仙臺郷土 研究』第十巻第十號
藤原相之助（1939ｃ）：「仙臺郷土研究としての國分ものがたり（三）」　仙臺郷土研究会『仙臺郷土研究』第十巻第十一號
松尾剛次（1998）：「中世都市鎌倉と寒河江・慈恩寺」　西村山地域史研究会『西村山地域史の研究』第16号
南材木町小学校（1984）：『広瀬川と町　わが南材』
三原良吉（1948）：『宮城刑務所と若林城』宮城刑務所
宮城刑務所（1979）：『宮城刑務所創立100周年記念　悠久』
宮城県神社庁（1976）：『宮城縣神社名鑑』
『宮城県の地名日本歴史地理体系第4巻』平凡社
結城慎一（1982）：『南小泉遺跡　都市計画街路建設工事関係第１次調査報告』仙台市文化財調査報告書第35集
結城慎一・工藤哲司（1983）：『南小泉遺跡　都市計画街路建設工事関係第２次調査報告』仙台市文化財調査報告書第52集
結城慎一・佐藤　洋（1984）：『南小泉遺跡　都市計画街路建設工事関係第３次調査報告』仙台市文化財調査報告書第68集
結城慎一・佐藤洋ほか（1985）：『仙台城三ノ丸跡　発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集
渡部弘美（1983）：『南小泉遺跡－青葉女子学園移転新営工事地内調査報告－』仙台市文化財調査報告書第55集
渡部弘美・伊東真文（1999）：「保春院前遺跡・養種園遺跡」　『宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』

渡部弘美・伊東真文（2000）：「宮城県内出土の『平安通寶』」出土銭貨研究会『出土銭貨』第14号

注１：ここでの「南小泉地区」とは、南小泉遺跡・養種園遺跡・保春院前遺跡・若林城跡を包摂する地域としている。南小泉遺跡は広範囲にわたるので、本報告書では、宮城野萩大通り以西を「西部」、宮城野萩大通りから国道４号線仙台バイパス間を「中央部」、国道仙台バイパス以東を「東部」とした。

注２：堀の名称は、いずれも現在の呼称である（出典－七郷の今昔を語る会1993）。

注３：六郷堀近隣の調査は、本調査である。七郷堀近隣の調査は、都市計画街路「南小泉・茂庭線」関連遺跡発掘調査である。なお、「南小泉・茂庭線」関連遺跡調査は、南小泉遺跡第28次調査・養種園遺跡第２次調査・保春院前遺跡第１次調査の総称で、現在報告書作成中である。よって、本文中に記載されたこの３調査に関わるすべての記述は、報告書発行に先立つものであり、今後見解が変わる可能性を持つ。

注４：この縄文前期頃の包含層と見られる黒色シルト・粘土層は、養種園遺跡北東部～南小泉遺跡にかけて広く確認されている層である。(遺物の出土は現在のところ、この地点だけである。)

注５：国分寺の創建瓦は、762年に修造された多賀城第二期のものと同様であり、この時期には伽藍の主要部は完成したと見られている（市史2000）。

注６：４次調査については結城1982参照。

注７：７次調査については結城・工藤1983参照。

注８：規模から見て常住施設とは考えがたいが、カマドを有するため、住居跡とした。

注９：『日本三大実録』には、貞観12（870）年に陸奥国に派遣された新羅人「潤清、長焉、真平等」は「才長於造瓦」、よって「預陸奥国修理府料造瓦事、令長其道者相従伝習」とある。また、貞観15（873）年には、陸奥国の俘囚が不穏な動きを示した際、国分寺に五大菩薩像を安置し安寧を願ったという記録がある。

注10：984年、国分寺の金堂で書写された大般若経が盗まれるという記録（『日本高僧伝要文抄』があり、その頃までは存続が確認されている。国分尼寺については、1080年「顛倒」とある（『水左記』）。

注11：『奥州国分寺縁起記』による。焼亡の際、寺僧が本尊の薬師如来・十二神将像、白山神社のご神体を持ち出し、この地に小堂を建ててこれを祀ったという。

注12：これは千葉氏を祖とする「平姓国分氏」である。国分氏の出自については、ほかに「藤姓国分氏」説がある。国分氏は、文治５年奥州合戦の際、東海道大将軍であった千葉常胤に従った五男胤道が、軍功によって宮城郡国分荘を賜り、以後国分姓を称したのが国分氏の始まりといわれており、それが（おそらく南北朝時代頃に）長沼姓の藤姓国分氏にすり替わったと解釈されてきた。

注13：屋敷の名称は、南小泉遺跡の中世屋敷跡研究の嚆矢となった南小泉16次～18次調査（佐藤洋1990）のもので、以後の報告書もこれに依拠しているため、本報告書でもこれを継承した。なお、第２図にある屋敷Ｈ～Ｍは、筆者が便宜的に付けたものである。

注14：南小泉の中世の屋敷跡は、田中1997・1999に詳しい。本図もそれをもとにしている。

注15：敷地を区画するとみられる溝は、幅３～５ｍ・深さ２ｍ程で、断面Ｖ字形の防御性の高いものである。区画内もさらに小規模な溝で区分けされている模様で、Ｌ字形の溝や直行する溝、通路かと思われる２条並行する溝など様々見られる。

注16：井戸や土坑からは壁土も出土しており、掘立柱の建物の中には土壁のものもあったと考えられる。

注17：道路跡は、馬の背状の高まりの上を通るが、それを掘り窪め、砂に土器・瓦・中世陶器の破片ないし意図的に割ったものと大小の礫を入れてバラスとしている。この道路跡は平安時代（９世紀代）の竪穴住居を切っており、少なくともの上限はそれ以降である。またこのバラスの中には、近世まで下らない瓦質擂鉢が含まれており、少なくともバラスの敷設作業は戦国期に行われたものとしてとらえられる。

注18：擂鉢が主体である。擂鉢は被熱したものが多く、中には取手を持つものもあり、いわゆる「擂鉢鍋」としての使用が考えられる。ほかに釜形土器、風炉、香炉、鉢、皿がある。

注19：政宗の取り立てによりその刀身に九曜紋を刻むことを許された刀工本郷国包は、「小泉村若林」に居住し釘打ち職人をしていたという。なお、登米石森邑雙龍子玉英が天保８年に著した「表海鍛冶伝所載」によれば、国包の５代前の国住は、「本国大和」「応永中（1394～1427）仙台国分若林に住す」とある（『仙臺藩刀匠銘譜』）。

注20：養種園遺跡の北方700ｍの陸奥国分寺所蔵薬師如来像の厨子願文（1585年）には、「藤原朝臣政重（国分盛重）」の名が見え、この時期に国分氏が陸奥国分寺と深い関わりを持っていたことが知れる。また、『伊達文書』の記述から国分寺門前には、馬市が立つ「国分日町」と呼ばれる市町もあった。永禄８（1565）年、伊達輝宗は、家臣を「国分」に遣わし馬を買い求めている。また、政宗も慶長５（1600）年、家臣を「国分日町」に遣わし「馬拾一疋」買わせている。

注21：中近世移行期の六道銭を詳細に検討した鈴木公雄氏は、永楽通寶６枚よりなる六道銭を「完全セット」と呼称し、16世紀後半より永楽通寶が東国に集中することのひとつの現れと見た。下限は、江戸幕府が永楽通寶の流通停止を命じた慶長13（1608）年頃か。江戸幕府は、この禁令の際、以降金・銀・鐚銭の三者で取引を行うように命じ、これを寛永13（1636）年の古寛永通寶の発行でもって一本化した。(以上、鈴木1999)。

注22：小林1996。なお、大広間の完成は落成は慶長15（1610）年のことである。

注23：なお、二日町の住人も国分氏の氏神白山神社の祭礼に奉仕する義務を持っており、二日町住人も日町から移り住んだ可能性がある（伊東1937)。

注24：1997年１トレンチＳＫ113。出土遺物には、中国角皿（明末清初)、中国古染付型打皿、備前壺、この時期の指標となる登窯Ｉ期[※1]の瀬戸美濃灰釉碗等の陶磁器と、キセル、銭貨（宋銭か）等がある。

[※1]井上1992。井上編年によれば、登窯Ｉ期の年代観は慶長10年～元和年間（1605～1623）である。

注25：平安通寶の出土例は全国的に見ても極めて少なく、本例で７例目の出土である。宮城県内では、比較的出土例が多く、塩沢北遺跡（小川1980)、南小泉９次調査に次いで３例目となる。平安通寶の流通年代は明らかでない。

注26：「御一門始御家中御屋敷割被成候」（東奥老士夜話)。

注27：養種園遺跡の調査で検出された15世紀末～17世紀初頭の遺構の方向基準はＮ－10～20°－Ｅである。なお、若林城下町の範囲については、町を管轄したこの二人の奉行の職権が及ぶ範囲が不明なため、明確な結論には至っていない。

注28：若林城跡南側には軸線の貫徹は見られないものの、「東奥老士夜話」には、「長町の中ほとより、かねの手に東へ若林への通付申し候。御構の向かいに大橋かゝり申候。長町の橋と双橋にかゝり候よし老人共申候を承り申候」の記述があり、若林城の南に広瀬川に大橋を架け、直接南方への交通の便を図った様子がうかがわれる。また、「御名語集」に記されている政宗の直話として「若林御城南の川除普請過ぎて後のおん話に、この頃年月の水に橋もいたみ普請せばや」云々とある（三原1948)。

注29：「東藩史稿」。

注30：南小泉９次調査では、瀬戸美濃段付白天目茶碗が出土した第１号井戸跡がある。南小泉14次調査（佐藤洋1987）では、美濃灰釉碗、美濃灰釉丸皿、唐津鉄釉擂鉢とともに右巻き三巴文金箔軒平瓦、桔梗文軒平瓦が出土したＳＭ１がある。現在の七郷堀（仙台堀）にほど近い地点で行われた南小泉28次調査では、4基の土坑・竪穴遺構が確認されている。ＳＫ120からは、時期決定資料の瀬戸美濃鉄釉擂鉢のほか、切り紙文様の黒織部、織部茶入、中国産青花小坏、唐津半筒碗、志野織部皿等が、碗状滓に混じって出土している。ＳＫ123からは、御深井釉皿、青織部六角向付、唐津半筒碗等が出土している。ＳＩ103竪穴遺構からは、棒状鉄に混じって、瀬戸美濃茶釜形水指、中国産青花小坏、瀬戸美濃鉄釉擂鉢、瀬戸美濃天目茶碗などが出土している。ＳＫ110からは、御深井釉皿、美濃唐津皿、備前壺、中国青花漢詩文碗などが出土している。

注31：延寶６（1678）年同８（1680）年間製作「仙台城下大絵図」には、保春院から南に延びる道の東側に「御仮屋」が、東側に「鹿又久兵衛」屋敷が見える。なお、元禄４（1691）・５（1692）年製作「仙台城下五厘卦絵図」には、鹿又屋敷しか見えず、御仮屋はこの頃には廃絶したものと思われる。

注32：宝暦７（1757）年製作「仙台城下絵図」には「小泉御屋敷」、天明６（1786）年～寛政元（1789）年製作「仙台城下絵図」には「小泉御殿」、安政３（1856）・同６（1859）年製作「安政補正改革仙府絵図」には「小泉御屋敷」と見える。この間、文政９（1826）年には、「国分小泉御屋敷御絵図」が製作されている。「高野家記録」によれば、明和元（1764）に城下北目町より出火した火事で「小泉御殿」被災とあり、「国分小泉御屋敷御絵図」にある「御殿跡地」の記載と関わるものと思われる。また、天明年間（1781～1788）には小泉屋敷内で銀札が印刷され、文政３（1820）年には屋敷内に「御籾蔵」が建設されるなど、藩施設として屋敷が多様に利用されていた様が伺える。なお、宝暦13（1763）年より９年の歳月をかけて編纂された地理書「封内風土記」によれば、別荘が造営される以前、義山公忠宗の世には火薬庫をここに置き、火災の後廃地となったとある。

注33：この際使われた土は、所内で瓦を焼くのに搬入していた堤町周辺の陶土の残りという。

注34：「政宗君治家記録引証記　三十二上」（市史1996)。

注35：同上

注36：元禄～享保年間（1688～1735）に成立した書物。

注37：田中1999

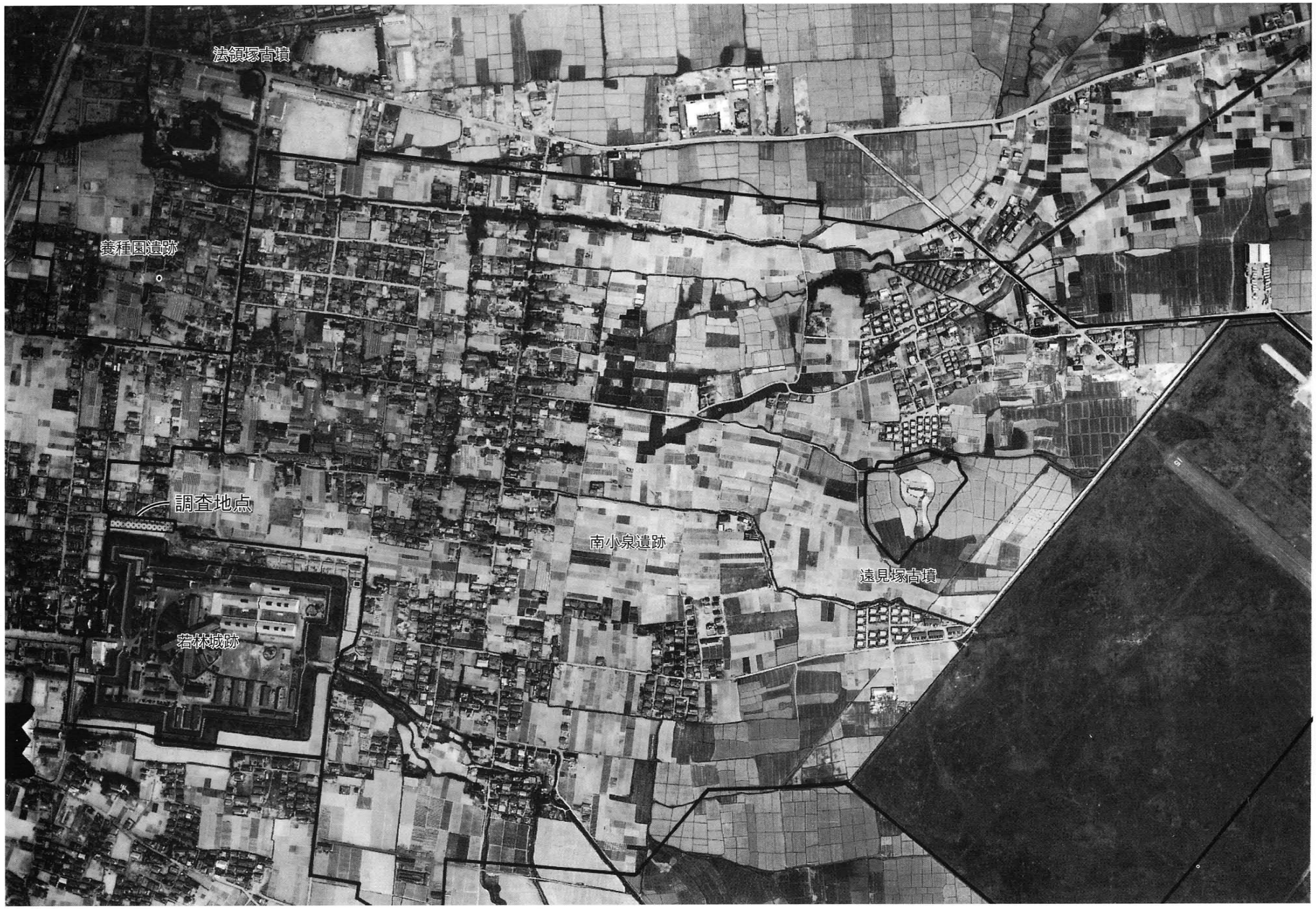


写真１　若林城跡とその周辺の航空写真　（昭和36年国土地理院撮影）

写真２　SD1　確認状況（２トレンチ・西から）

写真３　SD1　完掘状況（４トレンチ・西から）

写真４　４トレンチ・東壁断面（西から）

写真５　SD1　断面（４トレンチ・東から）

写真６　SD1　完掘状況（１トレンチ・西から）

写真７　SD1　木製品出土状況（４トレンチ・西から）

写真８　SD1　断面（３トレンチ・西から）

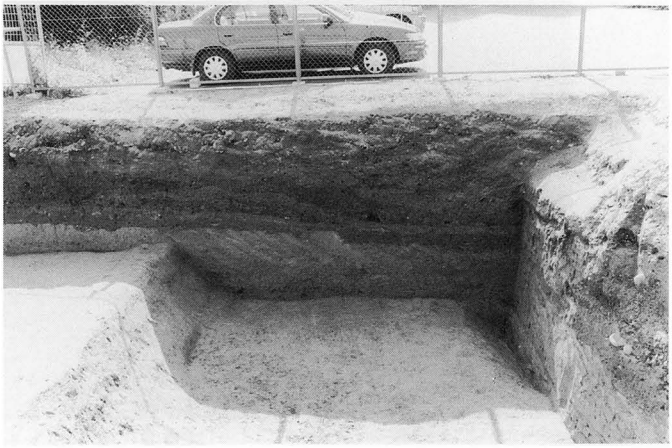


写真９　SD1　断面（５トレンチ・北から）

写真10　２トレンチ西壁断面（SD1・SR1重複状況）

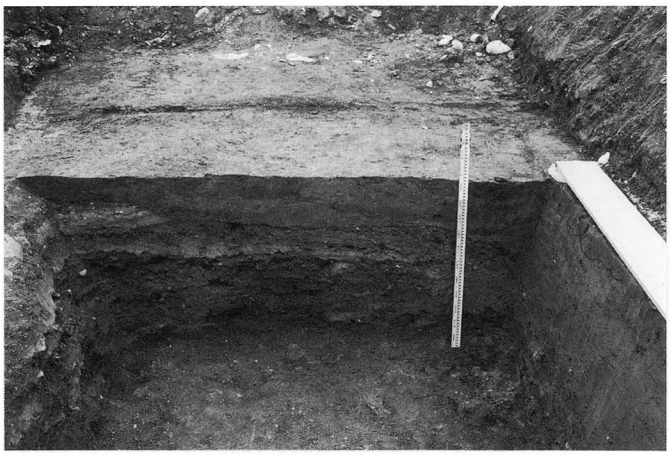


写真11　SD1・SR1　重複状況（１トレンチ・西から）

写真12　SD3　完掘状況（４トレンチ・南から）

写真13　SK2　断面（４トレンチ・東から）

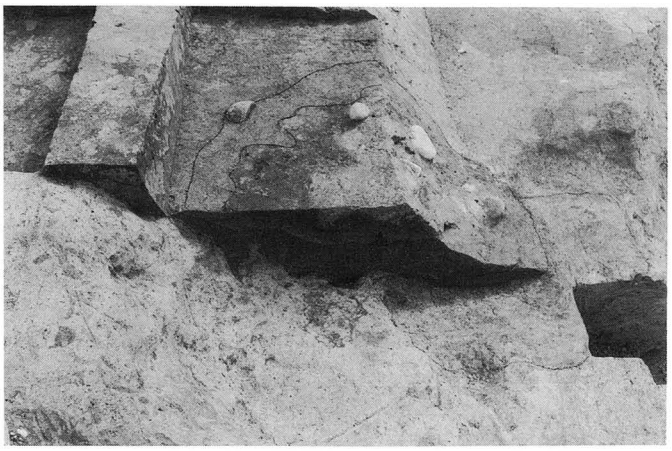


写真14　SK3　断面（4トレンチ・西から）

写真15　SK4　完掘状況（4トレンチ・南から）

写真16　SD1・SK1　断面（3トレンチ・東から）

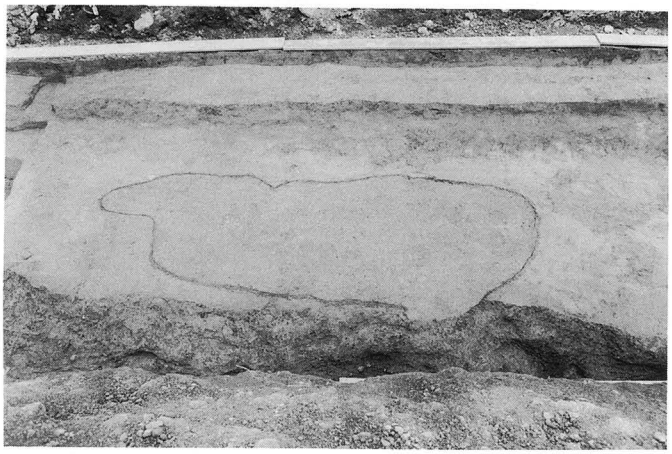


写真17　SK7　確認状況（2トレンチ・南から）

写真18　SD6　断面（5トレンチ・西から）

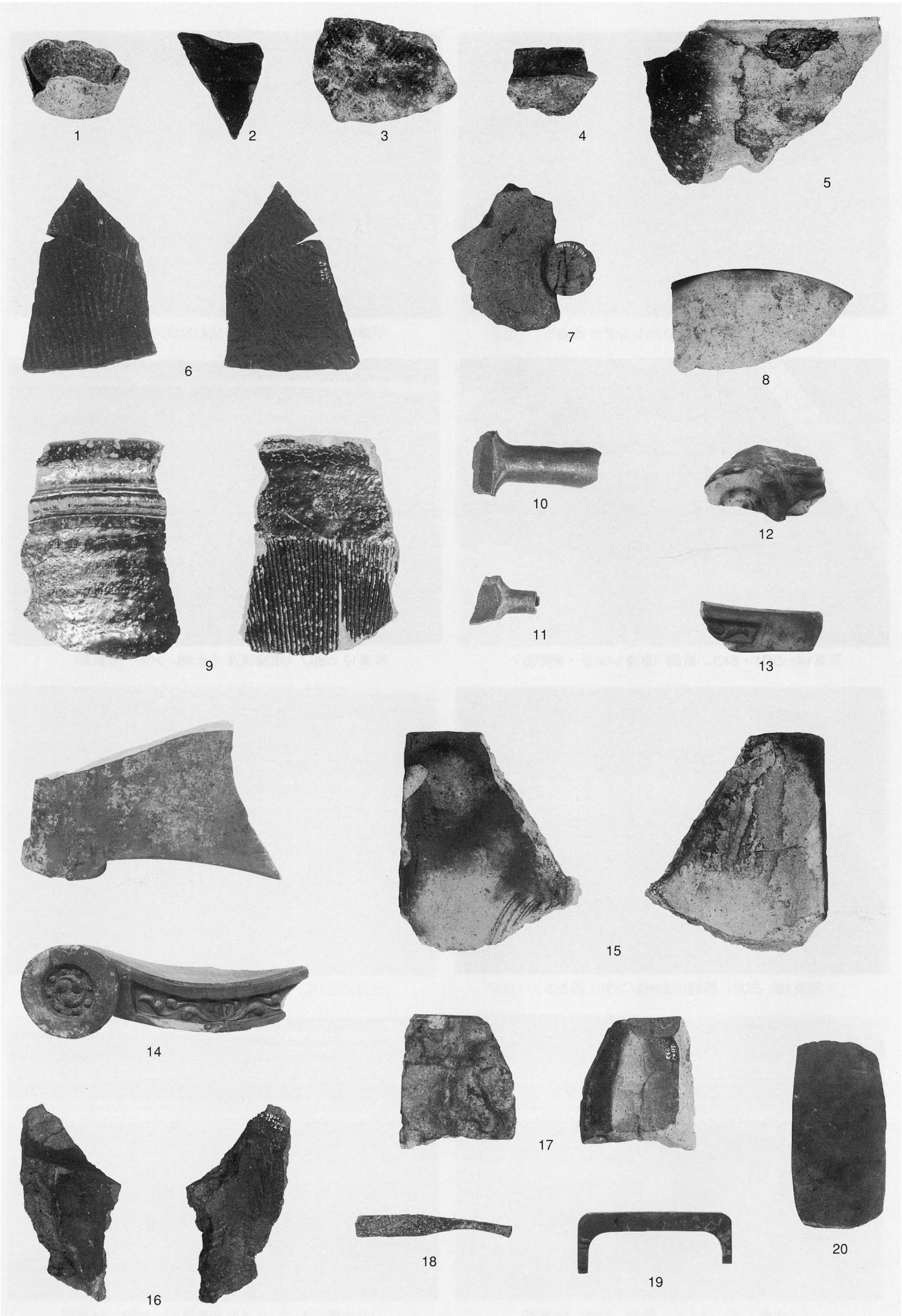
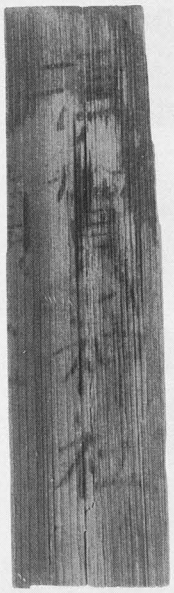


写真19　出土遺物（1）



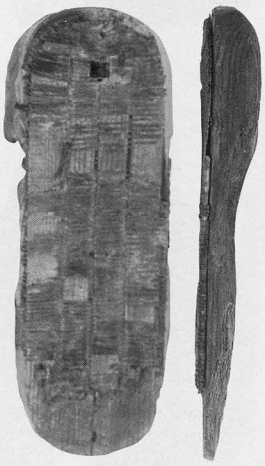
1

2

3

4

5

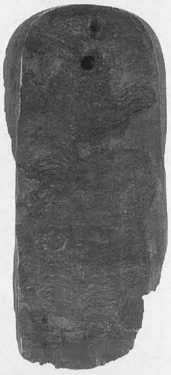


6

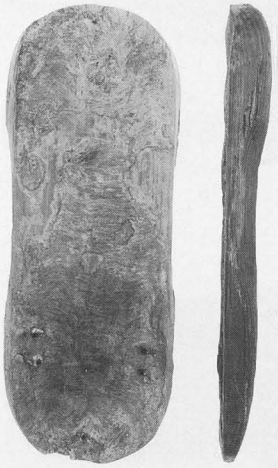
7

8

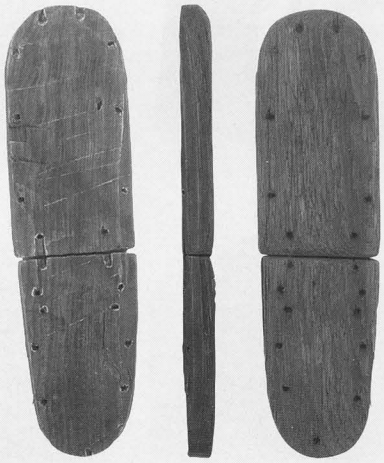
9



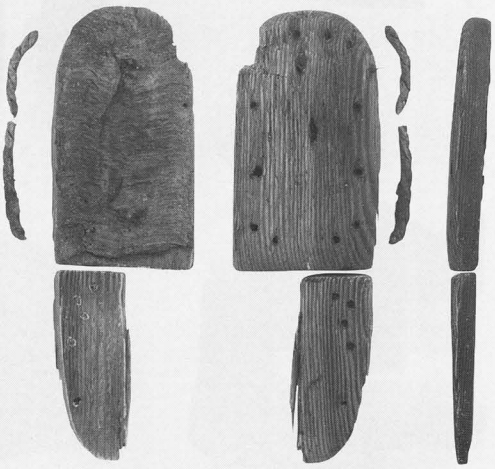
10



11



12



13

写真20　出土遺物（2）

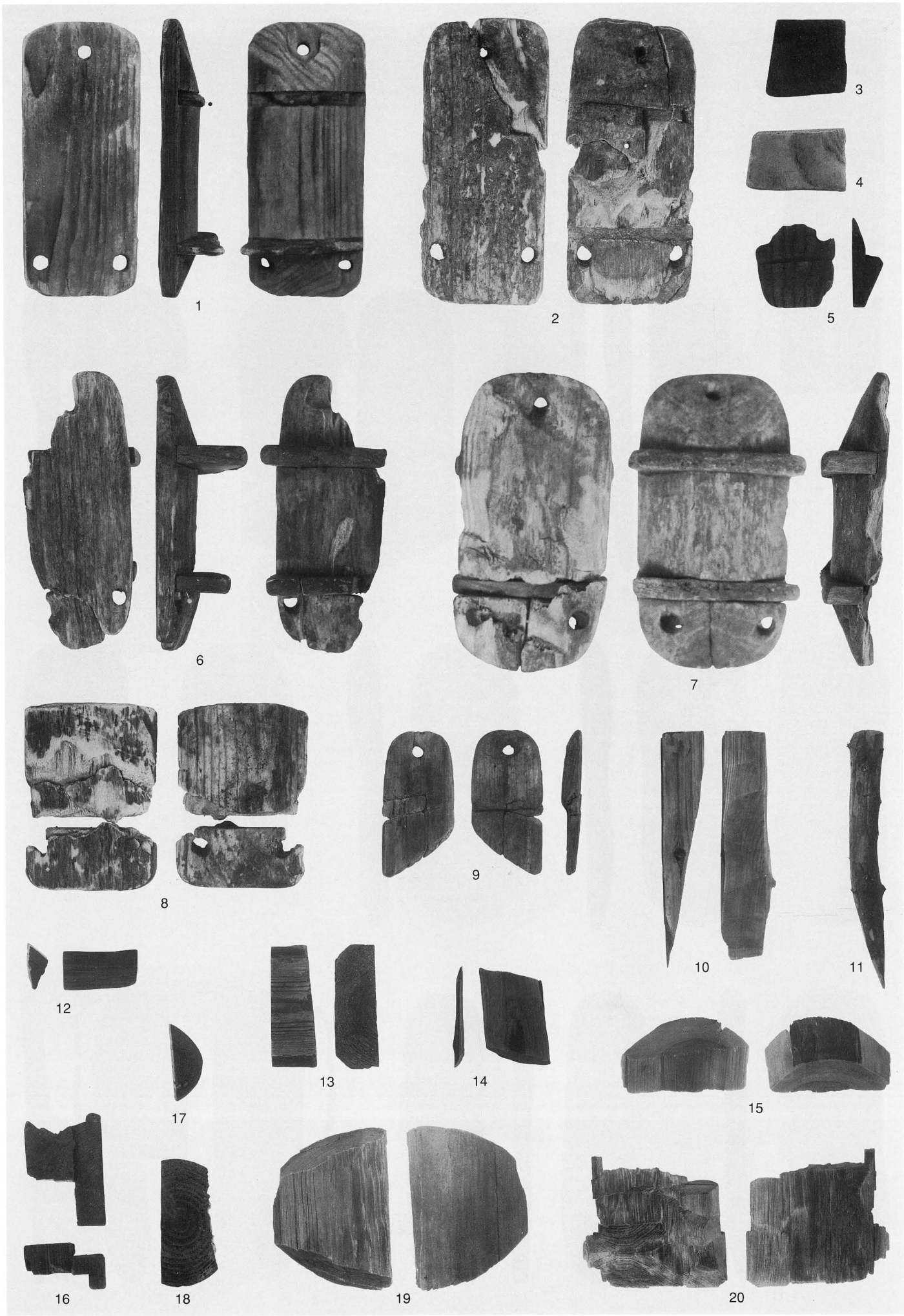


写真21　出土遺物（3）

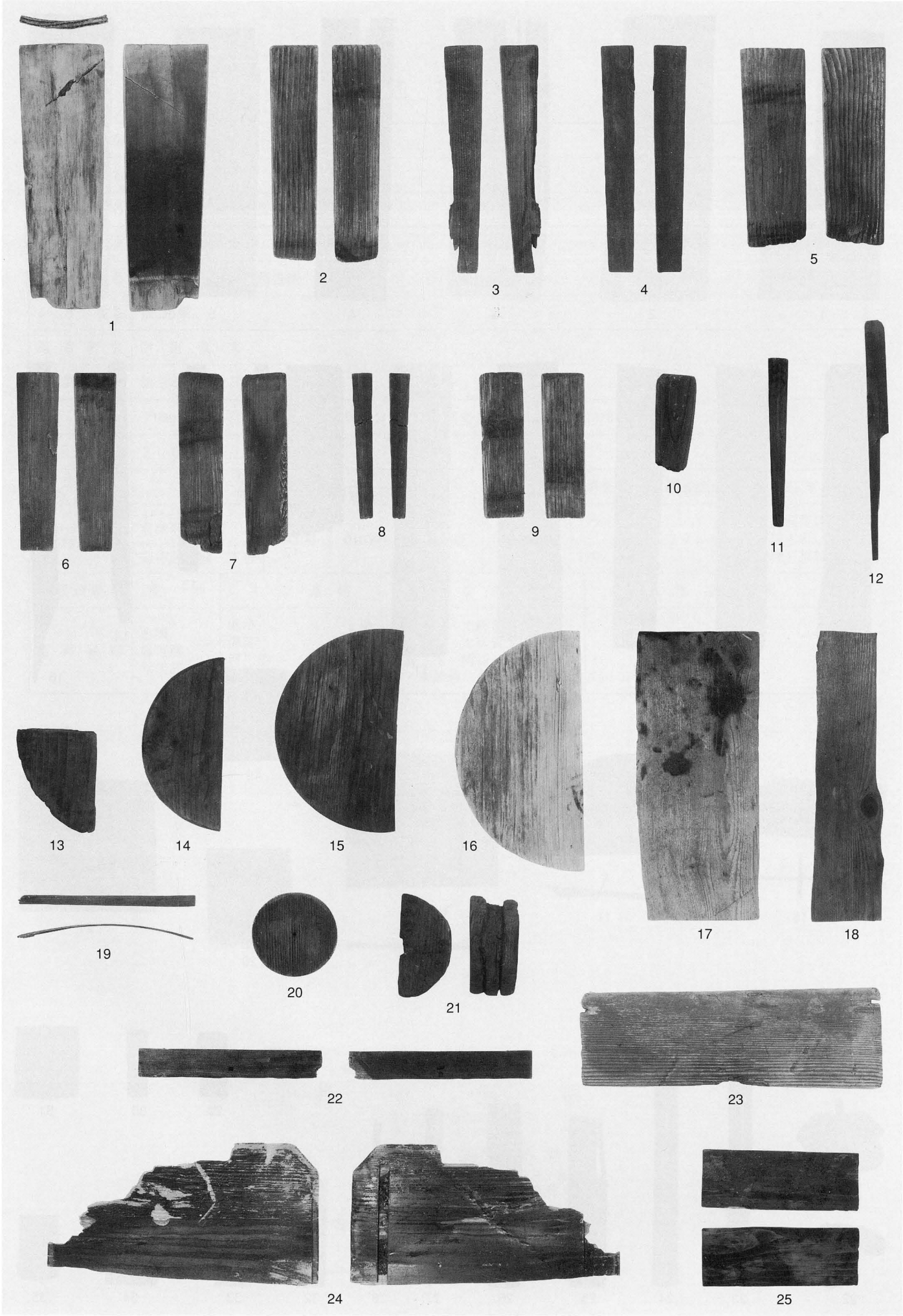


写真22　出土遺物（4）

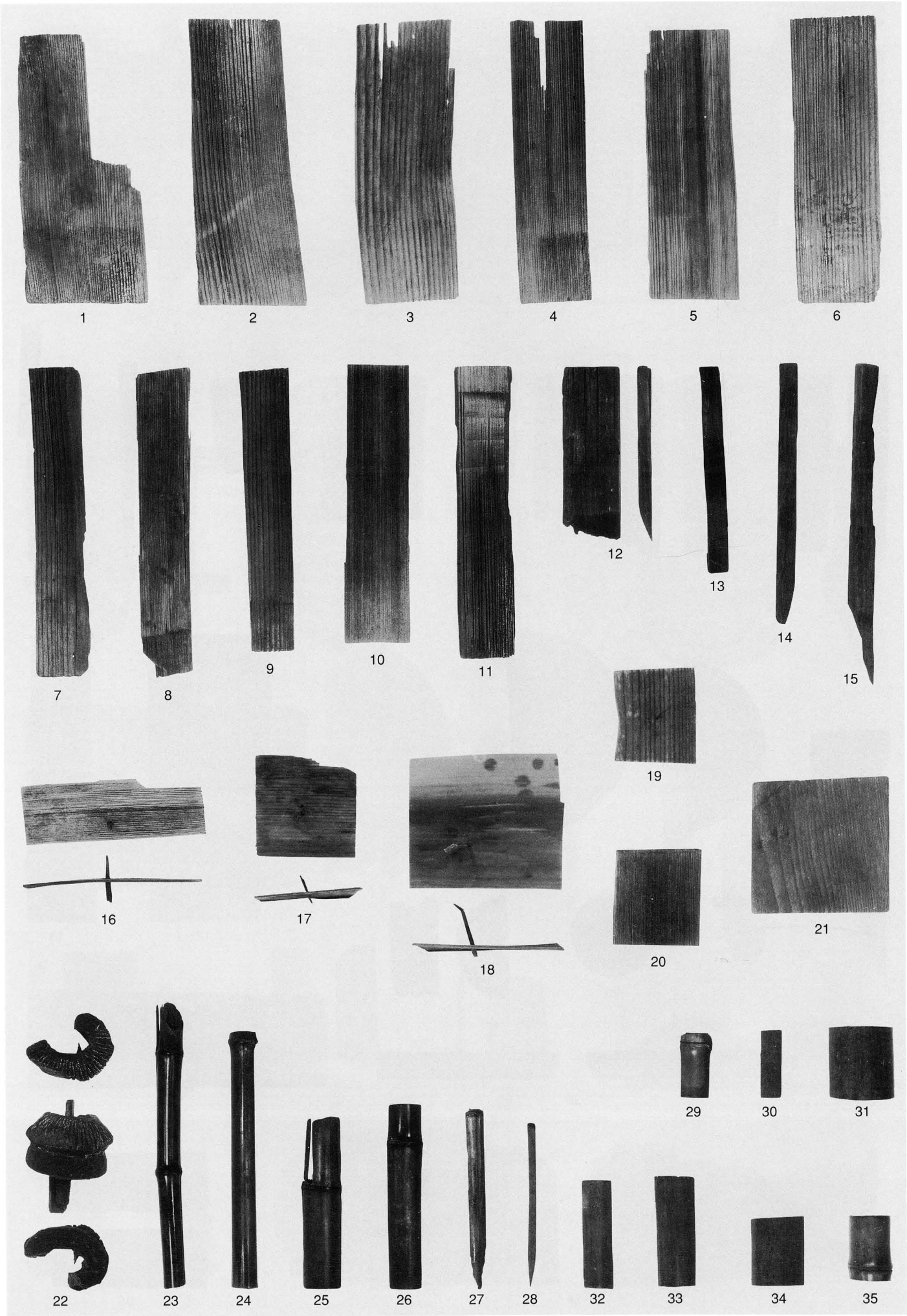

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35

写真23　出土遺物（5）

報告書抄録

ふりがな	わかばやしじょうあと
書名	若林城跡
副書名	第3次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第256集
編著者名	伊東真文
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL：022-214-8893~4
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
わかばやしじょうあと 若林城跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 わかばやしくふるじろにちょうめ 若林区古城二丁目	04100	01030	38°14′08″	140°54′13″	1999.08.23 ～ 1999.10.26	370㎡	都市計画街路「南材木町・古城線」拡幅工事

所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺物	特記事項
若林城跡	古墳 集落跡 城館跡	堀跡 1条 溝跡 4条 河川跡 1条 土坑 7基	縄文土器・土師器・須恵器・赤焼土器・土師質土器・瓦質土器・瓦・陶器・磁器・石製品・木製品・金属製品	

仙台市文化財調査報告書第256集

若林城跡

－第3次発掘調査報告書－

平成14年3月31日

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7番1号

仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社 共新精版印刷

仙台市宮城野区日の出町二丁目4-2

TEL 236－7181